

Himi



Nanto



テーマ
ウェルビーイング先進地域
～多様な人材が創るこれからの地域社会～

Asahi



全国過疎問題 シンポジウム2023 in とやま



令和5年

2023 10.26 木 -27 金

報告書

26日 木
全体会

富山県民会館ホール (富山市)

- 令和5年度
過疎地域持続的発展優良事列表彰式
- 基調講演「過疎地域の使命」
《講師》宮口 何徳 氏 (早稲田大学名誉教授)
- パネルディスカッション
「ウェルビーイング先進地域
～多様な人材が創るこれからの地域社会～」

交流会

ANAクラウンプラザホテル富山 (富山市)

27日 金
分科会

朝日町

- 第1分科会 優良事例発表・現地視察
(あさひコミュニティホールアゼリア)

氷見市

- 第2分科会 優良事例発表・現地視察
(氷見市芸術文化館)

南砺市

- 第3分科会 パネルディスカッション・現地視察
(南砺市井波総合文化センター)

主催／総務省、全国過疎問題シンポジウム実行委員会 (富山県、一般社団法人全国過疎地域連盟、富山県地域振興団体協議会)

後援／農林水産省、国土交通省、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、環境省、全国知事会、全国都道府県議会連合会、全国市長会、全国市議会連合会、全国町村会、全国町村議会連合会、全国山村振興連盟、一般財団法人地域活性化センター、富山県市長会、富山県市議会連合会、富山県町村会、富山県町村議会連合会、公益財団法人富山県市町村振興協会、読売新聞北陸支社、朝日新聞富山総局、毎日新聞社富山支局、北陸中日新聞、株式会社日刊工業新聞社富山支局、日本経済新聞社富山支局、(一社) 共同通信社富山支局、時事通信社富山支局、北日本新聞社、富山新聞社、NHK富山放送局、北日本放送、富山テレビ放送、チューリップテレビ、富山エフエム放送、一般社団法人富山県ケーブルテレビ協議会

CONTENTS

プログラム	2
シンポジウムグラフ	4
全体会	
開会宣言 笹原 靖直 氏 (富山県地域振興団体協議会過疎地域振興部会長/朝日町長)	8
主催者挨拶 鈴木 淳司 氏 (総務大臣)	9
主催者挨拶 遠藤 雄幸 氏 ((阿部 守一会長代理) / (一社) 全国過疎地域連盟理事/福島県川内村村長) ..	10
歓迎挨拶 新田 八朗 氏 (富山県知事)	11
令和5年度過疎地域持続的発展優良事列表彰式	
受賞団体一覧	12
講評	14
総務大臣賞	16
全国過疎地域連盟会長賞	22
基調講演 「過疎地域の使命」	32
《講師》宮口 侗迪 氏 (早稲田大学名誉教授)	
パネルディスカッション	
「ウェルビーイング先進地域 ～多様な人材が創るこれからの地域社会～」	38
次期開催県挨拶	
安藤 明範 氏 (山梨県総務部次長)	52
分科会	
第1分科会 (朝日町)	54
●過疎地域持続的発展優良事例発表会	
●スペシャルトークセッション	
「富山県朝日町発、日本の幸せづくり ～一人ひとりが住みたい場所に住み続けるために～」	
第2分科会 (氷見市)	76
●過疎地域持続的発展優良事例発表会	
第3分科会 (南砺市)	90
●パネルディスカッション	
「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」	

26日

木

全体会

富山県民会館ホール (富山市)

11:00 展示ブースオープン

12:00 受付開始

13:00 開会式

- ・開会宣言 富山県地域振興団体協議会過疎地域振興部会長 (朝日町長)
- ・主催者挨拶 総務大臣 (一社) 全国過疎地域連盟会長
- ・歓迎挨拶 富山県知事

13:20 令和5年度過疎地域持続的発展優良事列表彰式

13:50 休憩

14:05 基調講演「**過疎地域の使命**」
《講師》宮口 侗迪 氏 (早稲田大学名誉教授)

15:00 休憩

15:10 パネルディスカッション

**「ウェルビーイング先進地域
～多様な人材が創るこれからの地域社会～」**

【コーディネーター】 指出 一正 氏 (『ソトコト』編集長)

【パネリスト】 藤田 とし子 氏 (まちとひと 感動のデザイン研究所 代表)

金子 知也 氏 ((公社) 中越防災安全推進機構にいがたイナカレッジ マネージャー)

島田 優平 氏 ((一社) ジソウラボ 代表理事)

佐藤 みどり 氏 (NPO法人立山 クラフト舎 代表理事)

16:55 次期開催県紹介

17:00 閉会

26日

木

交流会

ANAクラウンプラザホテル富山 (富山市)

17:30 受付開始

18:00 開会～

19:30 閉会



27日

金

分科会 (優良事例発表会・現地視察)

第1分科会

朝日町

／あさひコミュニティホール アゼリア

9:15 会場受付開始

9:50 過疎地域持続的発展優良事例発表会

【コーディネーター】 宮口 侗迪 氏 (早稲田大学名誉教授)

【発表者】 総務大臣賞及び全国過疎地域連盟会長賞受賞団体



あさひ舟川「春の四重奏」

11:55 スペシャルトークセッション

「富山県朝日町発、日本の幸せづくり ～一人ひとりが住みたい場所に住み続けるために～」

藤野 英人 氏 ((一社)みらいまちラボ合同代表、レオス・キャピタルワークス株式会社 代表取締役会長兼社長 CEO&CIO)

× 畠山 洋平 氏 (朝日町次世代パブリックマネジメントアドバイザー、(株)博報堂)

12:30 (午前だけの参加者は専用バスで富山駅へ)

12:40 現地視察 (昼食: 紋左 (たら汁定食)) ～

17:00 解散 (富山駅)

第2分科会

氷見市

／氷見市芸術文化館

9:15 会場受付開始

9:50 過疎地域持続的発展優良事例発表会

【コーディネーター】 指出 一正 氏 (『ソトコト』編集長)

【発表者】 総務大臣賞及び全国過疎地域連盟会長賞受賞団体



©(公社)とやま観光推進機構
蛇ヶ島越しの立山連峰

11:50 (午前だけの参加者は専用バスで富山駅へ)

12:00 現地視察 (昼食: 番屋亭 (海鮮御膳)) ～

17:00 解散 (富山駅)

第3分科会

南砺市

／南砺市井波総合文化センター

9:00 会場受付開始

9:30 パネルディスカッション

「集落の暮らしを未来へつなぐ

～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

【コーディネーター】 関司 直也 氏 (法政大学現代福祉学部 教授)

【パネリスト】 田口 太郎 氏 (徳島大学大学院社会産業理工学研究部 教授)

小玉 陽造 氏 (山口県岩国市 市民協働部長)

小島 公明 氏 (兵庫県朝来市いくの地域自治協議会 事務局長)

川島 尚子 氏 (高知県室戸市まちづくり推進課 集落支援員)



世界遺産 相倉合掌造り集落

12:00 (午前だけの参加者は専用バスで富山駅へ)

12:15 現地視察 (昼食: 道の駅木彫りの里 (麦屋パークの山海膳)) ～

17:00 解散 (富山駅)

開会式



開会宣言



笹原 靖直
(富山県地域振興団体協議会過疎地域振興部会長／富山県朝日町長)

歓迎挨拶



新田 八朗(富山県知事)

主催者挨拶



鈴木 淳司(総務大臣)



遠藤 雄幸(阿部 守一会長代理)／
(一社)全国過疎地域連盟理事／福島県川内村村長)

令和5年度過疎地域持続的発展優良事列表彰式 講評



宮口 侗迪 氏
(過疎地域持続的発展優良事列表彰委員会委員長／早稲田大学名誉教授)

令和5年度過疎地域持続的発展優良事列表彰式



受賞記念写真



基調講演



宮口 侗迪 氏 (早稲田大学名誉教授)



パネルディスカッション



交流会



第1分科会 (朝日町)



第2分科会 (氷見市)



第3分科会 (南砺市)



全体会

開会式

開会宣言

笹原 靖直

富山県地域振興団体協議会
過疎地域振興部会長
朝日町長

主催者挨拶

鈴木 淳司

総務大臣

遠藤 雄幸

(阿部 守一会長代理)
(一社) 全国過疎地域連盟理事
福島県川内村村長

歓迎挨拶

新田 八朗

富山県知事

開会宣言



笹原 靖直 氏

富山県地域振興団体協議会過疎地域振興部会長
朝日町長

皆様こんにちは。ようこそ富山県へお越しくださいました。本大会には多くの皆様にご参加いただきまして、心より感謝を申し上げます。実り多き大会になることを願っております。

それではただいまより、「全国過疎問題シンポジウム2023 in とやま」を開会いたします。どうぞよろしく願いたします。



主催者挨拶



鈴木 淳司 氏

総務大臣

総務大臣の鈴木淳司です。

「全国過疎問題シンポジウム2023 in とやま」の開催にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

本日まで参加の皆様には、日頃より過疎対策をはじめ、地方行政全般にわたり、格別のご理解とご協力を賜り、深く感謝申し上げます。

現在我が国では、人口減少、少子高齢化が進み、とりわけ過疎地域において、その傾向が顕著になっておりまして、地域社会を担う人材の確保などが喫緊の課題となっております。

これらの課題は深刻ですが、各地域の創意工夫を凝らした懸命の努力により、課題の解決に向けた着実な動きも見られます。

本日、過疎地域の課題解決に繋がるすばらしい取り組みを総務大臣賞として表彰させていただきます。

開会宣言をされた富山県朝日町では、「共助型マイカー乗り合い公共交通サービス」を開始し、高齢化する住民の足の確保に取り組んでおられます。

宮城県丸森町では、東日本大震災等を経て、地域運営組織において、住民自らが移動販売ガソリンスタンドの承継など、暮らしを守り、特産品のブランド化などの活動を続けておられます。

新潟県長岡市では、旧山古志村の地域づくりに取り組む団体が、最新デジタル技術を活用して、世界中から知恵や資源、資金を集め、デジタル村民とともに地域を存続させる挑戦をしておられます。

このほかにも全国過疎地域連盟会長賞を受賞される5つの事例におきましては、農業振興や観光、移住促進など、地域資源を生かした取り組みを進めておられます。

関係者のご尽力にここで改めて敬意を表します。

さて、今回の全国過疎問題シンポジウムでは、副題を「多様な人材が創るこれからの地域社会」としておられます。

開催地の富山県では、暮らす人、訪れる人、生まれ育った人など、愛着を持って関わるすべての人を富山の仲間とする「幸せ人口1000万人」を目指していると伺っております。

このように、多様な価値を持つ人材が集まることによって、地域資源の価値を再認識することによって、誇らしく生きやすい地域社会の実現に繋がっていくと思っております。

総務省としましても、地域おこし協力隊や地域活性化起業人など、地域の人の流れの創出を支援して参ります。

このシンポジウムを通じて、こうした多様な人材による地域創造の方策や具体的事例について、活発な議論が展開され、各地域での活動のさらなる発展に繋がっていくことを期待しております。

結びになりますが、このシンポジウムの開催にあたりご尽力賜りました、富山県をはじめ、関係者の皆様にご深く感謝申し上げますとともに、本日の議論が実り多きものとなり、皆様の今後の取り組みに活かされることを祈念申し上げ、開会のご挨拶とさせていただきます。

主催者挨拶



遠藤 雄幸 氏

(阿部 守一会長代理)
(一社) 全国過疎地域連盟理事／福島県川内村村長

全国過疎地域連盟理事福島県川内村村長の遠藤雄幸と申します。

会長の阿部守一長野県知事が出席いたしまして、皆様方にご挨拶申し上げる予定でしたが、急遽出席がかなわなくなったため、ここで会長の挨拶文を代読させていただきます。

本年6月に開催されました第55回総会におきまして、全国過疎地域連盟の会長に就任しました、長野県知事の阿部守一でございます。

一言ご挨拶を申し上げます。

本日「全国過疎問題シンポジウム2023 in とやま」が盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

地元の富山県をはじめ、開催にあたりご尽力をいただきました多くの関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

また本日栄えある過疎地域持続的発展優良事例の表彰を受けられます皆様方、誠におめでとうございます。

過疎地域の持続的発展を目指し、創意工夫が図られた皆様の取り組みに深く敬意を表します。

さて、過疎地域は豊かな自然に恵まれ、農林水産業の発展、成長に密接に関わるなど、地域経済の循環や自然環境の保全等に貢献しており、国土の多様性を支える重要な役割を担っています。

その一方で、多くの過疎地域では、急速に人口減少や少子高齢化が進行しており、地域経済の縮小や担い手不足など、過疎地域を取り巻く環境は厳しさを増しており、地域住民の生活に必要なサービスを行うための財源の充実、確保が重要な課題となっています。

今回の全国過疎問題シンポジウムは、過疎地域の可能性について、新たな気づきや発見がある場とするとともに、全国の優れた取り組みにふれ、参加者相互の交流を図るなど、人と人との繋がりを通じて、将来に向けた取り組みを考える契機を目指しています。

結びに、本シンポジウムが実り多く、意義深いものとなりますとともに、ご参加いただいた皆様のご健勝とご活躍を心よりご祈念申し上げ、挨拶といたします。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。



歓迎挨拶



新田 八郎 氏

富山県知事

「全国過疎問題シンポジウム2023 in とやま」開催に当たりまして、開催県知事として、一言ご挨拶を申し上げます。

総務省地域力創造審議官の山越伸子様をはじめ、ご来賓の皆様方、また全国各地からご参加の皆様にはようこそ富山へおいでいただきました。県民を代表して心から歓迎を申し上げます。

本日お集まりの皆様におかれましては、日頃から過疎地域の振興に力を尽くしていただいております。深く感謝申し上げます。

また後程、栄えある優良事例表彰を受賞される8団体の皆様には、心からお喜び申し上げますとともに、敬意を表したいと存じます。

さて、今回のシンポジウムのテーマは「ウェルビーイング先進地域～多様な人材が創るこれからの地域社会」となりました。

これからの過疎地域には都市部にはない豊かな地域資源を生かして、人々が幸せに住み続けることができる仕組みづくりが求められており、その実現には多様な人材の確保、育成が重要とされています。

この考え方は、次世代の新たな価値を生む人材が育ち、またそうした富山県に県外から引き寄せられた人材が集積する、「幸せ人口1000万～ウェルビーイング先進地域、富山～」という、ちょっと手前みそですが、本県の成長戦略のビジョンと重なるところが多いと考え、今回のシンポジウムのテーマとさせていただきます。

今回のシンポジウムが過疎地域の可能性について、気づきや発見がある場となり、全国各地でウェルビーイングの花が咲きほこることを願ってやみません。

明日は朝日町、氷見市、そして南砺市において、分科会も開催されます。

ぜひ各地域の特色ある取り組みや魅力を見て感じていただき、過疎ならではのウェルビーイング事例をお持ち帰りいただければ幸いです。

そして、しっかりと学んでいただいた後、シンポジウム終了後は、お時間の許す限り、富山県の豊かな自然、食、歴史、文化を体感していただければと思います。

結びに、本大会の開催にあたり、お力添えを賜りました皆様心から感謝を申し上げ、歓迎のご挨拶とさせていただきます。

本日はありがとうございます。よろしく願いいたします。



令和5年度過疎地域持続的発展優良事列表彰 受賞団体一覧



総務大臣賞

一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会

宮城県丸森町

山古志住民会議/ネオ山古志村(山古志DAO)

新潟県長岡市

朝日町MaaS 実証実験推進協議会

富山県朝日町

全国過疎地域連盟会長賞

株式会社ホップジャパン

福島県田村市

昭和村

福島県昭和村

論田自治会 及び 熊無自治会、ろんくま移住促進委員会

富山県氷見市

特定非営利活動法人 本と温泉

兵庫県豊岡市

家賀再生プロジェクト

徳島県つるぎ町



優良事例受賞団体 講評



宮口 侗迪 氏

過疎地域持続的発展優良事例表彰委員会委員長／早稲田大学名誉教授

1946年富山県富山市(旧細入村)生まれ。

東京大学地理学科同大学院博士課程にて社会地理学を専攻し早稲田大学に勤務、1985年教授、その後教育・総合科学学術院長を歴任。2017年名誉教授。国土審議会専門委員、大学設置審議会専門委員、自治大学校講師、富山県景観審議会会長、富山市都市計画審議会会長を歴任、2021年3月まで総務省過疎問題懇談会座長として、新しい過疎法の制定に尽力、地方の発展のあり方について発言を続ける。1985年から富山市在住。『過疎に打ち克つー先進的な少数社会をめざしてー』(原書房)ほか著書多数。

皆さんこんにちは。ようこそ、全国過疎問題シンポジウムへいらっしゃいました。表彰委員会の委員長を仰せつかっております早稲田大学の宮口でございます。本日お手持ちの優良事例表彰の冊子に私の講評も出ておりますので、それに沿って所見を申し上げさせていただきます。

例年のように本年度も各県から推薦された表彰候補団体の中からさらに候補を絞り、各委員の視察を経て委員会で協議し、総務大臣表彰3団体、過疎地域連盟会長賞5団体を選定させていただきました。

北から順番に紹介しますと、総務大臣表彰は、まず宮城県丸森町の「一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会」です。この協議会は地区の住民全員参加の集まりで、町から交流センターの指定管理を受けたのを契機に一般社団法人に移行し、大震災を乗り越えながら、雑貨店や移動販売、ガソリンスタンドの運営、広報誌の発信を行い、最近では太陽光発電の会社を設立されました。1億数千万という予算規模を実現し、一つの町の小さな地区としては大変総合的な力をつけられたとともに、地区が総合的な活力を育て得ることを示されました。

続いて新潟県長岡市の「山古志住民会議/ネオ山古志村(山古志DAO)」です。山古志村は中越地震で壊滅的な被害を受けられましたが、長岡市に合併されて以降、山古志DAOというコミュニティを形成し、電子住民票の機能を持つNFTを発行され、800人弱の村に1000人を超えるデジタル村民を作られました。デジタル村民は海外にもいらっしゃり、その人たちが村に来ることを帰省と呼び、それが移住に繋がり、関係人口が濃い集まりを作られました。これは過疎地域の

お手本になるのではないかと思います。

そして富山県朝日町の「朝日町MaaS実証実験推進協議会」です。

MaaSというのは「Mobility as a Service」の略で、わが国で初めてタクシーやバス会社と協力した住民輸送システム、これはバスもあまり通っていない、バス停から遠いところに住む人たちをどうやって運ぶかということですが、予約をタクシー会社が受け、バスの回数券で支払うという仕組みです。関係者を巻き込んで、非常に合理的にすみ分けを行っておられ、他にも普及していると聞いています。

過疎連盟会長賞に移らせていただきますと、まず「福島県昭和村」です。豪雪地帯ではありますがカスミソウの産地であり、雪のない夏の間を活用してカスミソウの品質を向上させ、「会津のカスミソウ」というブランドを確立され、夏を中心に全国一位の出荷量を誇っておられます。インターンやターンの人たちに対して、カスミソウのことを学んでもらう、子供たちにも小さいときから花のことを学んでもらうということで、20年間に36人の就業者をもたらされています。

次に福島県田村市の「株式会社ホップジャパン」です。こちらは東日本大震災で遊休施設となった場所でホップ栽培を復活させ、人を繋いで地元100%のクラフトビールを実現し、6次産業的に展開して、地域に大きな希望を生み出されています。

続いてご当地ですが、富山県氷見市では論田自治会と熊無自治会という二つの地区が「ろんくま移住促進委員会」というものを結成して活動しておられます。20年にわたって二つの自治会が連携している例というのもあまり全国にはないと思いますが、草餅などの特産

物の継承のほか、現在では移住促進委員会で移住促進計画を策定され、移住者を増やそうと頑張っておられます。

続いて兵庫県豊岡市の「特定非営利活動法人本と温泉」です。志賀直哉の小説で「城崎にて」という名作があるのですが、こちらは城崎温泉の旅館の二世の会が、志賀直哉が来訪して100年の記念に文学と歴史のまちを目指しこれから頑張ろうということで、城崎に関する文学作品を新しく出版して、地元でのみ販売するという活動をされています。すでに4冊出版されており、1万部売られたものもあります。旅館や土産物屋で販売されています。

そして最後に徳島県つるぎ町の「家賀再生プロジェクト」です。こちらは傾斜地農業で世界農業遺産に登録されています。しかし、過疎高齢化により将来が危ぶまれるということで、地域の外に住んでいる地域の関係者のグループによって藍栽培の復活や商品化が進められ、食べる藍というものを新しく作られるなど、地域の景観の継承に向けて、貴重な活動をおられます。

このように今年度も多彩な活動が表彰されました。行政と民間による特産物の育成や、地域経済の活性化に加えて、デジタル村民や複数の地区の連携、外部グループの活動という新しい社会関係の育成というのが、ここから読み取れます。そういう点で小さく固まって独立性が強かった我が国の集落、地区というものに新しい風が吹いてきたように思います。

過疎化の中では人は減ります。過去のやり方だけではやっていけなくなりますので、新しい風にどんどん吹いていただきたい。地域交通のあり方にも新しい流れが生じ、出版という文化的な活動も生まれました。そして震災後の新しい展開が3団体でありました。

皆さん頑張って非常に良い状態を作っておられる、そういった優良事例が今年もたくさん表彰されました。皆さんのさらなる発展を祈り、また、心からお祝いを申し上げ講評とさせていただきます。

なお、わたくし長年委員長を務めさせていただきましたが、今年度で退任させていただきますので、今年のパンフレットの最後には私の回想みたいなものも

載っております。またご覧いただければ幸いです。

それでは改めて申し上げます。表彰地域の皆さんおめでとうございました。講評を終わります。ありがとうございました。



総務大臣賞

まる もり まち
宮城県丸森町

ひっぽ
一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会

地域の課題・難題になんでも挑戦!協働の地域づくり



住民待望の「ひっぽのお店」。地区住民が集まる憩いの場にもなる。

審査講評

評価のポイント

- ▶ 東日本大震災、台風災害を経験し、10年あまりの時間をかけて地域のことをみんなで考え、公民館活動を下地にしながらい生懸命に向き合っている点。
- ▶ 地域運営組織を、多様なチャレンジを通して地域の経験値を上げ、「多様な打ち手」を増やしていく場としての位置づけがなされている点。

審査委員のコメント

地域住民の協力と挑戦心が生んだ成功。

暮らしを支える「守り」の活動から、新たな生業づくりや移住者受け入れなどの「攻め」の活動まで、興味関心ある住民とともに、多様なチャレンジに取り組まれています。地域運営組織という場の活かし方とその設えのポイントを、10年あまりの協議会の歩みから学び取ってほしいです。

今後、人口減少と高齢化が一層進む中で、地域内外に担い手を広げながら、どのように地域運営のメリハリをつけていくのか、次の大きな挑戦に向き合い始めていると考えます。



取組の概要

平成22年度に丸森町から筆甫まちづくりセンターの指定管理を受けたことを契機に、**地域住民自らが住み慣れた地域で安全・安心に自分らしく暮らすことができる地域社会の構築を目指し事業を開始。**

地域の重要課題であった獣害対策としてイノシシ対策、高齢者の困りごとを解決する「お助け隊」、特産品である「へそ大根」のブランド化、買い物弱者対策として店舗の開設、ガソリンスタンドの事業承継など、暮らしやすい地域を住民自らがつくり続け、「地域の自立」や「持続可能な社会の形成」を具現化している。



毎週1回、高齢者宅を回る移動販売。地域住民の買い物支援と見守りを兼ねる。



地域唯一のガソリンスタンドを事業承継。暮らしのライフラインを守る。



特産品のへそ大根づくり。体験会には地域外から多くの人が参加する。



地域でできる獣害対策。地域自らイノシシを捕獲。

取組のKEY PLAYER



庄司 一郎さん

[一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会 代表理事]



吉澤 武志さん

[一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会 事務局長]

地域内外の連携強化によって、移住者の増加を実現したい。

筆甫地区振興連絡協議会は、地域運営組織として地域に暮らす住民一人ひとりの暮らしをより良くするために、

- ①住民の協力を得るため、筆甫地区振興連絡協議会の存在・意義を周知し続ける。
- ②地域課題解決への挑戦を通して、地域の経験値を上げる。
- ③多様な地域課題解決への挑戦を、興味関心を持つ住民と取り組む。
- ④専門家などの外部の力を地域に入れることや、地区内に新たな主体を創出する。

以上の4点を大切にしながら、さまざまな事業に取り組んでいます。今後も地域の暮らしを良くする事業を展開しながら、将来的に筆甫地区への移住につながるよう地域外との連携を強化していきたいと思ひます。

審査による現地調査でのヒアリング対象者

庄司 一郎さん [一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会 代表理事] / 吉澤 武志さん [一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会 事務局長]

宮城県丸森町

団体名 …… 一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会
 所在地 …… 〒981-2201 宮城県伊具郡丸森町筆甫字和田80番地2
 連絡先 …… TEL:0224-76-2111 FAX:0224-73-6008
 E-mail:hippo-kou@town.marumori.miyagi.jp
 URL: https://www.facebook.com/marumori.hippo/



自治体・団体の詳細はこちらからご覧いただけます。



総務大臣賞

新潟県長岡市

山古志住民会議 / ネオ山古志村
(山古志DAO)

NFT×限界集落 ~デジタル村民と挑戦する新たな村づくり~



ykotkx's works「Carp and Seasons」(左)、NishikigoiNFT:Okazz's works「Colored Carp」(右上)、raf's works「Generative patterns NISHIKIGOI」(右下)

審査講評

評価のポイント

- ▶ web3、NFT、DAOを活用した地域コミュニティの維持と拡大。
- ▶ デジタル関係人口の創出と地域住民との双方間のウェルビーイングの促進。

審査委員のコメント

世界へのつながりを創出する画期的なアイデア。

人口約800人の地域から、世界へとつながるデジタルシフトの試みが素晴らしい。DAOの仕組みを用いた仲間づくり、地域づくりのとても良いお手本だと思います。また、他の地域への参考となるアイデアにも富んでいると感じました。

デジタル技術はあくまでツールであり、信頼し、幸せを補完し合う地域を超えたコミュニティづくりをしっかりと見定め、実践している点も評価に値すると考えました。



取組の概要

中越地震による被災、平成の大合併による市町村合併を契機に住民主体の地域づくりの機運は高まる一方で、少子高齢化をくいとめることができなかったが、物理的制約を解放するデジタル技術に可能性を見出し、取組を開始。

ローカルの価値を最大限に広げることがデジタルであると考え、NFTを「デジタルアート×電子住民票」として活用し、NFTを接点とした共同体を形成し世界中から知恵や資源、独自資金を集め、地域を存続させる挑戦をしている。



デジタル村民、初帰省 (2021.12)。



デジタル村民との数々のアクション。



発行から1年の節目に開催したオフ会@東京。



山古志住民・デジタル村民が参加した中越地震10.23追悼式。

取組のKEY PLAYER



竹内 春華さん
[山古志住民会議 代表]

デジタル村民とともに、新たな村づくりへ。

地域が消滅するという危機感のもと、震災以降、山古志住民とともに絶え間ない挑戦を続けてきてくれた方々のように、山古志に共感する地域外の人々=「仲間」であることを認める仕組みを構築したいと考え、たどり着いたのが「NFT」でした。NFT発行当初、私たち山古志地域には専門的な知識はなく、手探りの挑戦でしたが、世界中の「デジタル村民」の知恵を借りながら、ともに“私たち”の新たな村づくりに挑戦しています。

審査による現地調査でのヒアリング対象者

竹内 春華さん
[山古志住民会議 代表]

@RYUさん
[山古志DAO/ネオ山古志村 山古志デジタル村民]

@fukudaoriginalさん
[山古志DAO/ネオ山古志村 山古志デジタル村民]

新潟県長岡市

団体名 …… 山古志住民会議/ネオ山古志村 (山古志DAO)
所在地 …… 〒947-0204 新潟県長岡市山古志竹沢甲2835番地
連絡先 …… URL: <https://nishikigoinf.com/>



自治体・団体の詳細はこちらからご覧いただけます。



総務大臣賞

あさひまち
富山県朝日町

あさひまち

朝日町MaaS実証実験推進協議会

気軽、手軽、みんな助かる!ノッカル!



「足元に気を付けて」ドライバーさんのちょっとした気遣い。

審査講評

評価のポイント

- ▶ 国内で初めて事業者協力型の自家用有償旅客運送を実現。
- ▶ コミュニティバス路線網も充実しており、空白地のタクシー、プラスノッカルの利用で、町の高齢者等のスムーズな移動に貢献。

審査委員のコメント

自治体と企業の連携が、高齢者の移動問題を解決。

地元のタクシー会社を運行協力者としたシステムを国内で初めて実現したことは、素晴らしいの一語に尽き、バス・タクシーとの使い分けが上手い点も評価できます。

多くの高いハードルを超えて実現したシステムですが、その後似たようなシステムがさまざまな地域で実施されていると伺いました。

町として常にノッカルを話題に挙げ、ドライバー同士で密な連携が図れるようになれば、ますますスムーズな利用を実現できるのではないのでしょうか。



取組の概要

持続可能な地域交通の確立が求められるなか、**人も車も大切な地元の資源と捉え**、住民の自家用車移動を活用し、同じ方向へ出かけたい移動ニーズとのマッチングを図る『**共助型マイカー乗り合い公共交通サービス**』として取組を開始。

「移動」という側面から全世代がメリットを享受できる仕組みを実現しているほか、**地元交通事業者も積極的に巻き込み**、役割分担とサービスの差別化を図ることで、パイの奪い合いではなく**共創による事業運営を実現している**。



ご近所さんの安心感「今日もよろしくね」。



「いつもありがとう」「こちらこそありがとう」感謝の気持ちはお互い様。



町内全地区で導入されているノッカル。今日もどこかで運行中。



お客さんとの何気ない会話、いつの間にかドライバーさんの楽しみに。

取組のKEY PLAYER



笹原 靖直さん
[朝日町 町長]

同じ課題を抱える地域でも、広く活用されてほしい。(笹原)

真に必要なローカルサービスとして誕生したのがこの仕組み。同様の課題を抱える全国の多くの地域で、カスタマイズされながら幅広く活用されることを切に願っております。



畠山 洋平さん
[朝日町次世代パブリックマネジメントアドバイザー ㈱博報堂]

官民共創で未来の朝日町を創造していきたい。(畠山)

地域の現状や将来に合わせて地域交通を再編集・再構築しようという「官民共創」の取組です。議論を重ねて動き続けた結果、産声を上げることができました。



小谷野 黎さん
[朝日町商工観光課 主事]

“お互い様の気持ち”が、サービスを実現に導いた。(小谷野)

住民の心に根付く“お互い様の気持ち”に着目し、サービスを形にしました。地域コミュニティ内で地道な説明を繰り返すことで、徐々に浸透してきたと実感しています。

審査による現地調査でのヒアリング対象者

- | | | | | |
|--------------------------|-----------------------------|---|----------------------------|---------------------------|
| 笹原 靖直さん
[朝日町 町長] | 山崎 富士夫さん
[朝日町 副町長] | 畠山 洋平さん
[朝日町次世代パブリックマネジメントアドバイザー ㈱博報堂] | 大谷 和哉さん
[朝日町商工観光課 課長] | 坂藤 未知祐さん
[朝日町商工観光課 主幹] |
| 小谷野 黎さん
[朝日町商工観光課 主事] | 住吉 嘉人さん
[朝日町みんなで未来!課 課長] | 寺崎 壮さん
[朝日町みんなで未来!課 課長代理] | 林 絵美さん
[朝日町みんなで未来!課 主査] | |

富山県朝日町

団体名 …… 朝日町MaaS実証実験推進協議会
所在地 …… 〒939-0793 富山県下新川郡朝日町道下1133
連絡先 …… TEL:0765-83-1100
E-mail:syouko@int.town.asahi.toyama.jp
URL:https://www.town.asahi.toyama.jp/index.html



自治体・団体の詳細はこちらからご覧いただけます。



全国過疎地域連盟会長賞

福島県田村市

株式会社ホップジャパン

過疎地域のリソースを産業循環エコシステムで活用し
中央あぶくまから発信、あぶくまブランドを造成する



写真協力：孫の手トラベルFoodCamp

ビールの原材料であるホップの栽培から手掛けており、夏にはホップの収穫体験を行っている。県内旅行会社の協力の元、地元ホップ農家の畑にて収穫体験を行い、ホップ畑に設置したダイニングで料理とクラフトビールを楽しむツアーなども開催している。

審査講評

評価のポイント

- ▶ 震災をきっかけに遊休施設となったグリーンパーク都路を復興の拠点として有効活用し、異なる役割を持った人、こと、ものを有機的につなぎ合わせて地域振興を実現。
- ▶ 震災復興のためにスピード感をもって、田村市でしかできないオリジナリティのある持続可能な産業の仕組みを確立。

審査委員のコメント

“100%地元産原料”というブランド力が強みに。

阿武隈高原の涼やかな気候、極めて情緒的なブルワリーを含む拠点の豊かな自然が、100%地元産原料で醸造されるビールの美味しさ、商品としての魅力にさらなる価値を付加していると感じました。

観光の目的として挙げられる上位項目が「食」。ブルワリーを核とした現在の敷地内でのさまざまなコンテンツの中に、食のコンテンツ（食体験、飲食店など）が加わり、より魅力的な拠点として発展することに、これからも期待したいです。



取組の概要

2000年代初頭に途絶えた福島県のホップ農業を地元農家と復活させ、ブルワリーを開業し、地域活性化の一翼を担っているほか、ビールの製造過程で排出されるホップや麦の粕を肥料として活用するなど、資源の再利用を行い、地球にやさしいまちづくりも実践している。

また、新しい価値観に基づいた企業誘致の手法「LESIP」にも取り組んでおり、実際にその理念に共感した人が移住を予定しているほか、新たな企業が地域に進出するきっかけにもなっている。



「循環」で持続可能な社会づくりを感じてもらうテーマパークを目指し、ビールを核に1次産業から6次産業化につなげていく。

「グリーンパーク都路」内の建物を一部改修して開設したホップガーデンブルワリー。

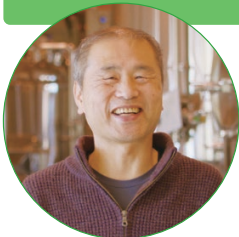


地元住民と協働してホップの手摘み収穫に適した新たな方法を開発するなど、途絶えてしまったホップ農業を新たな形で復活させた。



田村市都路地区の魅力を感じてもらい、人と人、人と地域に「つながり」が生まれるようにという思いの元、「つながりマルシェ」を開催している。

取組のKEY PLAYER



本間 誠さん
[株式会社ホップジャパン 代表取締役]

ビール造りと地域への想いを形にしていく。

アメリカ留学でクラフトビールに感銘を受け、帰国後にホップ栽培を始めました。震災を受け、「残りの人生を地球のため、価値あるもののために使いたい」という思いから起業し、復興庁の紹介で、原発事故の被災地である都路町へ移住しました。初めはホップを栽培してくれる農家探しに苦労しましたが、今ではホップ栽培からブルワリーでのビール造り、提供までの6次産業を行い、さらには、製造過程で出るホップ粕も肥料として再利用するなど、0次産業と名付け地域で産業が循環する仕組みを理念として取り組んでいます。今後は、飲食店を誘致することで、県内外から人に来てもらえるようなテーマパークを目指していきたいと考えています。

審査による現地調査でのヒアリング対象者

本間 誠さん [株式会社ホップジャパン 代表取締役]

福島県田村市

団体名 …… 株式会社ホップジャパン
所在地 …… 〒963-4702 福島県田村市都路町岩井沢字北向185-6
連絡先 …… TEL: 0247-61-5330
E-mail: information@hopjapan.com
URL: https://hopjapan.com/



自治体・団体の詳細はこちらからご覧いただけます。



全国過疎地域連盟会長賞

福島県昭和村

昭和村

夏秋期生産量日本一の昭和かすみ草「百年産地」を目指して



「花育」の集大成として、村内の中学生が東京都の大田市場で競り前PRを行う。

審査講評

評価のポイント

- ▶ カスミソウの「百年産地」を目指す、昭和村の生産者、JA、教育機関、自治体の協働の取組が、昭和かすみ草のブランド力を強化し、新規就農者の確保や極めて高い定着（移住定住）率につながっている点。
- ▶ カスミソウという地域資源を40年に渡って磨き上げてきた持続性、村の基幹産業としてさらなる発展に期待が持てるような、企画力と推進力。

審査委員のコメント

教育を重視した取組で、広がる地域資源の可能性。

新規就農者を増やすために最短1泊2日～最長4泊5日の日程で、先輩農家のもとで農機具の実習やマーケティングなどを学べる「かすみの学校」や、子どもたちへの「花育」など、地域資源をフル活用した取組のオリジナリティは、他の自治体の参考になり得ます。

食の世界では匂いの強いカスミソウは飲食店などのテーブル上には飾りにくい花の一つとされていますが、臭気を抑える技術をさらに進化させてPRすることで、これまでタブーだった飲食業界への販路拡大も見込めるのではないかと考えられます。



取組の概要

豪雪地帯という特徴を活かして、夏季の保冷に雪を使用する「雪室」を整備したことで、カスミソウの品質確保・向上が可能となり、夏秋期の生産量日本一、国内シェアの6割を達成している。

また、カスミソウ栽培の担い手確保・育成事業にも取り組んでおり、直近5年の就農定着率は100%であった。さらに、村内の小中学生にカスミソウ栽培体験（「花育」）を行っており、次世代のふるさとへの愛着の醸成と村の基幹産業への理解につながっている。



雪資源を活用した雪室を整備し、夏季の保冷に活用することでカスミソウの品質確保・向上を図っている。



インターンシップ事業「かすみの学校」では、村内のカスミソウ農家でUターン者を受け入れ、栽培体験を行っている。



「花育」の一環で村内の小中学生がカスミソウの収穫体験を実施。



生産者自らスーパーの店頭に立ち販促活動を行っている。

取組のKEY PLAYER



舟木 幸一さん
[昭和村 村長]

カスミソウの力が地域の未来をつなぐ。

「自然減を社会増で補う」さまざまな取組を行っています。村では過疎化・少子高齢化によるカスミソウ栽培の担い手確保が課題となっていますが、インターンシップ事業による新規就農者の受け入れを行い、高い定着率を実現しているところ。また、村内の子どもたちにも小学生の頃から栽培に関わってもらうことで、村の産業への理解や、将来に渡るふるさとへの愛着形成などに寄与するよう取り組んでいます。

審査による現地調査でのヒアリング対象者

- 永戸 敦さん [昭和村産業建設課 課長] / 菅家 祐博さん [昭和村産業建設課産業係 係長] / 栗村 良輔さん [昭和村教育委員会 教育長] / 土橋 康弘さん [昭和村立昭和中学校 校長] / 栗城 久登さん [カスミソウ生産者]

福島県昭和村

団体名 …… 昭和村
所在地 …… 〒968-0103 福島県大沼郡昭和村下中津川字中島652
連絡先 …… TEL: 0241-57-2111
E-mail: sangyou@vill.showa.fukushima.jp
URL: https://www.vill.showa.fukushima.jp/



自治体・団体の詳細はこちらからご覧いただけます。



全国過疎地域連盟会長賞

富山県氷見市

ろん でん くま なし
論田自治会及び熊無自治会、
ろんくま移住促進委員会

～ねこ"ろん"で"くま"なく歩いて 住んでみて～
ろんくま移住促進計画



すり鉢型の地形に森や集落が点在した、人と自然が織りなすろんくまの景観。

審査講評

評価のポイント

- ▶ 多様な地域づくりの取組を通じて、地域の内外の風通しを良くし、関係人口の広がりが移住者受け入れに向けた前向きな機運醸成につながっている点。
- ▶ 日常の活動をベースにしながら移住促進にも取り組むことで、各々の自治会の特徴を打ち出し人材を補充し合うことができ、「ろんくま移住促進計画」として戦略を形にし、魅力の発信、受け入れ態勢を充実させつつある点。

審査委員のコメント

“地域の味”を活かしながら、伝統を次世代へと受け継ぐ。

600年の伝統がある藤箕(ふじみ)や、地域の味である草もち、伝承料理などを地元里山に根差した資源と認識し、地元でのイベント開催時や市内の直売所で販売、提供することで関心を呼び、論田・熊無地区の前向きな姿勢を常に発信しています。他方で、さまざまな場面で担い手の高齢化にも直面し、藤箕の技術を受け継ぐ人材の育成、草もち加工でも技術だけでなく経営・雇用体制を含めた事業承継、集落運営でも「集落の教科書」づくりを通じた現状の棚卸しの作業などを進め、次世代への地域継承を求める機運の高まりが見出せています。



取組の概要

地域資源を活かしながら、住民にとってさらに住み良い地域、移住者など地域外から人が訪れる地域を目指し、地元特産の草もちの事業承継、自治会の負担を減らすためのLINEでの電子回覧板の運用、地元文化財を巡るウォーキングイベントの実施、マスコットキャラクターなどの制作といったさまざまな地域を盛り上げる取組を展開している。

各取組にキーパーソンがおり、世代間でバトンが受け継がれているほか、移住者や大学など地域外からの風が流れ込み、好循環が生み出されている。



春の桜を楽しみながら地域の文化財を巡る大人気ウォーキングイベント。



ろんくまマスコットキャラクターの「くまなくまタロー」と「ろんくまちゃん」。



ろんくま移住促進委員会の様子。地元住民、行政、大学が連携し、移住促進に向けた取組を検討。



地元で採れたヨモギやもち米でつくる「草もち」は地域の宝。次の世代へ地元の味と思いをつなぐ。

取組のKEY PLAYER



内 毅さん
[ろんくま移住促進委員会 会長]



中原 修さん
[ろんくま移住促進委員会 副会長]

多角的な取組の実現は、地域の協力があってこそ。

令和元年度の富山県の「中山間地農業再生支援事業」への取組を契機に、「ろんくま」(論田・熊無地区)が連携して暮らしやすい地域づくり、地域の活性化に取り組み始めました。現在は地域の特産品である草もちや藤箕、伝承料理の継承や、花の里ウォーク開催、マスコットキャラクター、集落の教科書作成など、さまざまな取組を行っています。一方で人口が減っていく中、今後活動の中心となる世代から負担を懸念する声も出ていますが、皆で協力しながら歩んできた地域の地力と地域外からの力をお借りし、課題解決に取り組んでまいります。

審査による現地調査でのヒアリング対象者

内 毅さん [ろんくま移住促進委員会 会長] / 中原 修さん [ろんくま移住促進委員会 副会長] / 伊東 翼さん [ろんくま移住促進委員会 事務局]

富山県氷見市

団体名 …… 論田自治会及び熊無自治会、ろんくま移住促進委員会
所在地 …… 〒935-0258 富山県氷見市論田2057-3(論田自治会)
〒935-0251 富山県氷見市熊無887-2(熊無自治会)
連絡先 …… TEL:090-9108-2314(ろんくま移住促進委員会事務局 伊東)
E-mail:ronkuma.himi@gmail.com
URL:https://ronkuma.com/



自治体・団体の詳細はこちらからご覧いただけます。



全国過疎地域連盟会長賞

兵庫県豊岡市

特定非営利活動法人 本と温泉

地産地読



第1弾

志賀直哉
『城の崎にて』
『注釈・城の崎にて』



第2弾

万城目学
『書き下ろし小説
『城崎裁判』』



本と温泉
Books
and
Onsen



第3弾

湊かなえ
『書き下ろし小説
『城崎へかえる』』



第4弾

tupera tupera
『描き下ろし絵本
『城崎ユノマトペ』』

「城崎でしか買えない本」を今までに4作品制作。城崎に来た際にはぜひ手に取っていただきたい。

審査講評

評価のポイント

- ▶ 旅館の二世の会が、Uターンの方(後のNPOのアドバイザー)のアドバイスを受けながら、志賀直哉来湯100年に「文学と歴史のまち」を目指し、城崎に関する文学作品を出版し、城崎で売るNPOを結成した点。
- ▶ すでに4冊が出版され、土産物屋、旅館、外湯等50ヵ所以上で売られており、2万部を超えたものもある点。

審査委員のコメント

温泉と文学を融合させた、ユニークな発想が際立つ。

城崎では、全体を一つの旅館と考えて外湯を大切にしてきた歴史があり、二世会(若旦那衆)からNPOに組織化し、その活動として本の出版を実現してきたことは大きく評価できます。

温泉観光地の活動として、文学作品を書いてもらう発想はユニークで、かつ困難な課題であると考えます。これまでの関係者の人脈を通じての執筆実現も引き続き期待し、さらには、新しいつながりの中での作品の実現など、さらなる話題を期待しています。



取組の概要

「本と温泉」は2013年の志賀直哉来湯100年を機に次なる100年の温泉地文学を送り出すべく、城崎温泉にある旅館の若旦那衆が中心になって立ち上げたプロジェクトである。

本をきっかけに「城崎のまちを訪れてくれること」等を目的に、城崎でしか買えない本を出版している。また住民、作者等と協力しながらイベント等も開催し、観光客のみならず、住民、作者等との交流も図っており、誘客促進やまちの活性化につながっている。



旅館・酒屋・お土産屋等が取り扱い店として協力し、まち全体で販売。



地域の子どもたち向けのイベントを開催し、本の魅力を発信。



歴代の作者が一同に集まったトークイベントも開催。地域と作家のつながりをとても大切にしている。



次回作「城の崎にて」のフォトブック付き英訳版を制作中。日本文学の魅力を世界へ伝えたいと考えている。

取組のKEY PLAYER



富田 健太郎さん
[特定非営利活動法人本と温泉 理事長]

たくさんの縁が取組を成功へと導いた。

「本と温泉」は、2013年、志賀直哉来湯100年を機に、城崎温泉における文学という側面を活かし、より多くの方が城崎温泉を知り、その魅力を深く楽しんでいただくために発足してから、今年で10周年を迎えました。

発足当時は何をしただけか分からず、四苦八苦でしたが、豊岡市参与の田口幹也さんよりブックディレクターの幅允孝さんをご紹介いただいてから大きく動き出しました。その後、江口宏志さん、万城目学さん、湊かなえさん、tupera tuperaさんをはじめ、多くの方のご協力により4つの本ができるに至ったご縁に感謝しています。現在は、新しいご縁もあり、城崎と文学の魅力を世界に届けるような本を制作中です。

審査による現地調査でのヒアリング対象者

富田 健太郎さん
[特定非営利活動法人本と温泉 理事長]

田口 幹也さん
[特定非営利活動法人本と温泉 アドバイザー]

高宮 浩之さん
[一般社団法人城崎温泉観光協会 会長]

とよおかし 兵庫県豊岡市

団体名 …… 特定非営利活動法人 本と温泉
所在地 …… 〒669-6101 兵庫県豊岡市城崎町湯島78(城崎温泉旅館協同組合内)
連絡先 …… TEL: 0796-32-4141
E-mail: booksonsen@gmail.com
URL: https://books-onsen.com/



自治体・団体の詳細はこちらからご覧いただけます。



全国過疎地域連盟会長賞

徳島県つるぎ町^{ちょう}

け か 家賀再生プロジェクト

家賀と藍をこよなく愛する家賀再生プロジェクト



世界農業遺産「にし阿波の傾斜地農耕システム」から生まれた、「食べる藍」を中心に、歴史ある集落の地域資源を活かした、活性化を目指す。

審査講評

評価のポイント

- ▶ 家賀地域ならではの伝統的な農法・文化・歴史を資源として活用している点。
- ▶ 商品開発などを通じて地域内外のネットワークが形成され、輪が拡大。

審査委員のコメント

民間企業を巻き込んだ、活動の輪の広がり进行评估。

2018年から活動をはじめ、この5年間で伝統農法での藍栽培を復活させたことに加え、パウダー加工した「食べる藍」を使った商品開発が地域内外の企業によってさかんに行われているという輪の広がりには驚きました。商品開発をはじめとした民間企業との連携は、一定の収益が見込めれば持続可能になりやすいため、プレイヤーとして民間企業をどう巻き込むかが重要だと考えられます。



取組の概要

徳島県西部「にし阿波地域」の中でも、最大規模の家賀集落では、年々過疎化が進み、集落存続が危機的状況だったが、平成30年に地域の伝統農耕が「にし阿波の傾斜地農耕システム」として世界農業遺産に認定されたことを契機に、地域外居住メンバー5人で「家賀再生プロジェクト」を立ち上げた。伝統農耕を活かした「藍」栽培を復活し、食用の「藍粉」を商品化。また、集落の伝統や文化などの紹介を通じた、地域活性化や雇用創出を目的に事業に取り組んでいる。



育てた藍を使って地域内外の食品業者等と協力し、商品開発や販路開拓を行い、積極的な魅力発信につなげている。



にし阿波の傾斜地農耕システムでは欠かすことのできない、カヤを使用した農耕手法を継承し、未来に向けた持続可能な藍栽培を実現している。



農業体験の受け入れ、農福連携の取組等で多くの団体と交流を増やし、関係人口の創出に努めている。



「にし阿波地域」の農業・観光・歴史・自然の魅力を伝える観光ツアーを実施。

取組のKEY PLAYER



枋谷 京子さん
[家賀再生プロジェクト代表者]

多様な製品に活用し、藍栽培の復活へ。

本プロジェクトは5年前の2018年から開始しました。亡き夫のお墓参りで訪ねていた家賀集落でも古くから行われている農耕が2018年3月に「世界農業遺産」に認定されたのをきっかけに、藍栽培の復活を企図して立ち上げました。取組で工夫した点としては、藍をパウダー状にした「食べる藍」という珍しい品目に着目したことです。この商品は、地場産品である藍を原料として活用することができますし、食用だけではなく化粧品にも活用できるなど、用途の幅広さが強みの一つです。今後の活動の方向性としては、集落内に宿泊施設がないため、集落へ帰省した出身者や観光客、視察者などが滞在できるような拠点となる施設を整備したいです。

審査による現地調査でのヒアリング対象者

枋谷 京子さん
[家賀再生プロジェクト代表者]

石田 修さん
[家賀再生プロジェクト ボランティアガイド]

徳島県つるぎ町

団体名 …… 家賀再生プロジェクト
所在地 …… 〒779-4107 徳島県美馬郡つるぎ町貞光字家賀道上474
連絡先 …… TEL:0883-53-8787
E-mail: kekasaisei.p@gmail.com
URL: https://www.facebook.com/kekasaisei.project/



自治体・団体の詳細はこちらからご覧いただけます。



基調講演「過疎地域の使命」



宮口 侗迪 氏

早稲田大学名誉教授

1946年富山県富山市(旧細入村)生まれ。

東京大学地理学科同大学院博士課程にて社会地理学を専攻し早稲田大学に勤務、1985年教授、その後教育・総合科学学術院長を歴任。2017年名誉教授。国土審議会専門委員、大学設置審議会専門委員、自治大学校講師、富山県景観審議会会長、富山市都市計画審議会会長を歴任、2021年3月まで総務省過疎問題懇談会座長として、新しい過疎法の制定に尽力、地方の発展のあり方について発言を続ける。1985年から富山市在住。『過疎に打ち克つ―先進的な少数社会をめざして―』(原書房)ほか著書多数。

皆さんこんにちは。ご紹介いただきました宮口でございます。基調講演をさせていただきます。

昨年の熊本のシンポジウムでは、明治大学の小田切さんが基調講演をされました。大変綿密なお話をされておりまして。私はもうかなり年も取りまして、過疎行政と関わって随分長い年月が経ちました。そういう点で話は少し雑駁になるかもしれませんが。ただ思いを込めて語らせていただきますので、よろしく願いたします。

私が育ったのは富山県の岐阜県境、高山線という鉄道がございまして、その富山最後の駅の近くでございまして。高校まで1時間あまり、当時SLに乗って通いました。そういう村で楽しく育ったものですから、富山市の高校へ行き、そして東京の大学へ行くようになり、やっぱり人間社会いろいろだな、と思うようになりました。

村の生活というのは人と人の関係が濃いわけでありまして。一方東京へ行きますと、薄くできるだけ関わらないような人たちがたくさんおります。そういう違いを感じる中で、世の中の違いというものはどうして生まれているのか、ということを考える地理学というものをやるようになりました。そして大学を出るころに過疎法ができました。過疎とはどういうことかと村育ちの人間としてよく考えてみようということで、地方の村を訪ね歩くようになり、そしてそのうちに過疎問題懇談会などに入れていただき、随分長くこの過疎問題に関して議論をさせてきていただきました。そういう点では村に育った私としては大変良い人生であったと、かなり人生も終わりに近くなってきておりますので、そう今振り返っております。

今日話す内容について資料をお配りしてありますが、まず第1項目は“富山での過疎問題シンポジウム開催の意義”としました。富山県は実は大変な経済県でありまして、大都市圏を除けば最も過疎地域が少ない県です。要するに県として過疎ということにあまり目を向けなくてもよかったと、こんなことを言うと叱られますが、そういうところがございまして。

最初の過疎法ができたのは1970年、昭和45年で、その頃は市町村合併が今のように進んでおらず村もたくさんあった中、その時過疎指定になったのは当時の利賀村と山

田村という二つの村だけでした。利賀村は今の南砺市で、今は市全体が過疎地域です。山田村は富山市にその後合併されましたので一部過疎となり、一部過疎でも富山市のように財政力の強いところに合併したところは、6年間の経過措置はありますけれども、一部過疎から除かれるよう、少し差をつけるように今回の法律はなっております。私が育った細入村という村も、その後過疎指定にはなりましたが、現在こども富山市に合併され過疎ではなくなり、現在の過疎指定は南砺市、氷見市、朝日町、砺波市内の旧庄川町のみです。

富山県というところは、実は川の downstream 半分にあたります。私が育ったところは神通川という川があり、上流にいくと飛騨高山で、今の岐阜県、当時の飛騨は江戸時代、一つの国であり天領だったところでした。南砺市の庄川をさかのぼると飛騨白川郷です。ですから上流半分は岐阜県になります。多くの県では最上流まで県内であり、その上流地域が大体過疎になっているケースが多いかと思えます。

それに加え、川の出口、平野になるところで水力発電が早くから行われました。

富山県で最初の発電所を作ったのは、売薬の元締めの人だということ、県内の人はかなりご存知と思いますが、知っておいてください。要するに薬の富山が発電をすることで後の工業県に繋がっていったと。そこが非常にスムーズに富山の場合は展開したため、今も非常に経済も順調、工場も早くから大企業がたくさん立地し、駅前ごとに大工場があるような県になりました。私が通った高山線ですえ、途中で敷島紡績や日産化学という大企業の大工場がありました。

そのため就職に困らない。実は富山県は現在高卒の県内就職率が愛知県に次いで2番目です。それほど就職先が多いハッピーな県でして、結果として過疎地域が少ないのもうべなるかなといえると思えます。

それから富山県では日本で最初に県が工業団地を作られたと記憶しております。工業団地というのは行政が土地を用意して工場を呼ぶというもので、その後全国に展開され、富山県内でも市町村による団地もたくさんありますが、これについても先進県であるということでもあります。今でも第二次

産業の従事者比率は全国1位で、県民所得も5番目ぐらいにあります。このように大変な経済県で過疎地域が少ないということで、過疎問題シンポジウムを引き受けるのが遅くなりました。先ほど過疎地域の厳しい中で素晴らしい取り組みをやっておられる方々が表彰されました。ぜひこうしたことも県内の方はよく知っておいていただきたいと思います。

続いて第2項目は“過疎法の歩み”について。過疎法という過疎地域を支援する法律があり、それに基づいてこのシンポジウムも行われるようになったわけですが、最初の過疎地域の法律、過疎地域対策緊急措置法は昭和45年、1970年にできました。実は昭和40年、1965年の国勢調査で地方の人口がガタッと減少し、ものすごく目立ったということが新聞等で随分大きく取り上げられました。

私が高校を卒業し東京へ行った年だったのでよく覚えているのですが、団塊の世代が大都市へ流入するということが顕著になりました。こうしてガタッと若い人がいなくなり将来が危ぶまれる地域が出現しました。

ただ一つ理解しておいていただきたいのは、農村というところは元々人口が増えるところではないのです。兄弟みんな家に残れば土地がどんどん細くなるので、できるだけ一子相続でまとまって相続させようとする。そうすると次男三男はどこかへ出て行って頑張ると。このように人口は増えもしなければ減りもしないというのが本来の農村の姿なのですが、今度は跡取り予定の長男さえ東京へ行ってしまうような時代が来たわけです。

瀬戸内海には新しい工業地域がどんどん発展し、そこへ引っ張り込まれることで、特に中国山地で存続が危ぶまれる地域が出現しました。そのため地方の政治家の方たちを中心にこのまま放っておいてはいけなく、なぜ人がいなくなるのかということで、単純に考えられたのは、生活インフラの整備がものすごく遅れている、そういうお金がない、ということでした。そして少しでもそうしたところを支援しようと、議員立法で、どちらかといえばハード設備、道路だとか集会施設を整える、という最初の過疎法ができました。

10年の時限立法でしたが、過疎債という、これはもう関係者はよくご存知ですが、借金をして事業を実施し、償還の7割を地方交付税で補填してくれると。そういう前例のない法律を、今から思うとよく作ったと思います。今でも政府の補助事業はたくさんあります。日本はどちらかといえば、国がまずお金を握って地方に配分する。そのときに国の事業としていろんなことをやるわけですが、そうした国の補助事業の場合、細かいところまでルールが決まっていて、市町村は勝手にそれを柔軟に使えないところがありましたが、この過疎債は市町村の主体性が基本にあるということも、過疎市町村にとっては素晴らしいことでした。

その後この法律は10年経って、やっぱりまだ必要だということで、次は過疎地域振興特別措置法、さらに10年後には、過疎地域活性化特別措置法というように1980年、1990年にそれぞれ新しい法律に変わると使える対象が、相変わらずハード整備中心でそこまで大きく変わっていませんが、少しずつ拡充されています。例えば振興特別措置法の時には地場産業の施設にも使える、あるいは観光レクリエーション施設にも使えるように拡張されました。活性化特別措置法の時には、港は漁港に限られていたものが普通の港湾に使えるようになるとか、あるいは下水処理施設にも使えるようになるというように対象が少しずつ拡充されています。法律の細かいところまで読む機会はないと思いますが、そういう流れがありました。

総務省に過疎問題懇談会というものがありまして、私は一昨年まで座長を務めさせていただき、現在は小田切先生が務めておられますが、その懇談会で法律を変える3年ぐらい前から少し突っ込んだ議論をするというのが流れとなっていました。2000年の第4次の過疎地域自立促進特別措置法ができる3年ぐらい前に、私は初めて過疎問題懇談会に入れていただきました。

私が常々思ってきたことは、過疎地域というのは、そこに住む人のせいで人口が減っているわけではないということです。都市がものすごい成長を遂げ、とにかく行けば仕事があるということでどんどん人を引っ張り込んだ。そして元の地域よりは賃金が高いため、もちろん生活費も高いのですが、片方では人口が減り、あまり財政的に余裕がない、税収入の元がそんなにできないということで厳しい状態にあるわけですが、それは何も自分たちが悪いわけではない。それは一つの自然の流れなのだということが根底にあり、もちろん国が色々支援するわけですが、単に困っているだけの地域ではないのです。美しい自然の中で人が暮らしてきた。そこでは自然をうまく扱って、人間の技が育って、その暮らしというのは成り立っている。そうした営みというのは都市にない価値、要するに人間が到達した別の価値ではないか、ということ私はずっと考えてきました。

日本の自然には実は大変な価値があり、山には木が生えています。当たり前だと思われるでしょう。それは山をそんなに使わなくても、平野で田んぼをつくれば相当の人が生活できたからです。そしてなぜ田んぼができるかという、夏に水があるからです。暑い時期に水があるというのは、実は農業にとってどんなに素晴らしいことか。こうした人の営みというのは、都市にない価値があるということを懇談会で言いました。

その当時は、価値はあるよね、という程度で共通理解はなかなか得られなかったのですが、ただ、過疎地域にどんな役

割を果たしてもらおうかということで、一応当時の過疎問題懇談会としては共通理解を得ました。まず多様で美しく風格ある国づくりへの寄与、都市とは違う美しく風格ある国土というものが日本の各地にあり、それを支えているのは、過疎地域の人たちです。それから、国民が新しい生活様式を実現できる場としての役割、これは現在都市から過疎の村へ移り住む人が結構出てきています。総務省がお作りになった地域おこし協力隊というのも随分増えました。都市の暮らしを見る、田舎の暮らしを見る、自分にとってどっちがいいか。そうした新しい、多くは都市の人にとって、あるいは過去から生きてきた過疎地域の人にとっても、過疎地域という場をどう使うかということで、新しいやり方ができる場なのだとすることも当時言ったように記憶をしております。自然の使い方も進歩します。そして、高齢化が進んでいるところで高齢化社会はどうあるべきか、ということも考えたらどうかということで、三つの項目を当時過疎地域の役割として整理をしました。それまではそうした議論はあまりなかったようです。

そして2000年に10年間のやはり時限立法として、第4次の過疎地域自立促進特別措置法ができたわけです。ただ10年経った時の民主党政権は過疎行政にあまり馴染みがなかったという失礼ですが、過疎に関心のある議員さんが少なかったということで、過疎はもういらぬのではないかということを使う人もいたようです。あくまで自由民主党は、過疎法は10年間また作るべきだということをおっしゃったが、野党であったわけです。そうした中、民主党政権はとりあえず3年だけ過疎法をそのまま延長し、その間にまた議論しようということだったと思います。しかし自民党は3年ではだめだと、10年だということで、その辺の政治的な駆け引きまでは分かりませんが、結果的に6年延長されることになりました。その時に総務省の過疎対策室はただ延長するだけではなく、この機会に中身をもうちょっと充実させようということで頑張られたと思います。そういう政権交代のさなかで、私も民主党の幹部に過疎法はなぜ必要なのか、とレクチャーをするため呼ばれたこともあります。

そうこうする中で過疎法は6年延長されたのですが、これは当時の過疎対策室長がただの延長ではなく拡充なんだということを強調しておられました。もちろんそれは国会の了承を取り付けての話です。このとき重要なことは、過疎債をソフト事業へ使ってもいいという条文が、当時の法律12条だったと思いますが、生まれました。拡充の最たるものは、このソフト事業への充当だったわけです。

今日も人材という話は先ほどから出てきておりますが、地域を作るのは人、良くするのは人、人が力をつけなければ何にも生まれぬと思っています。ですから人は学びそして成長しなければいけない。その地域にふさわしいものが何であ

るかということを考えてそれを作っていく。そのためには力が必要です。力をつけなければいけないということで人を育てるといのは、実は過疎地域で最も必要なことだったはずなのですが、そういうことがようやくこの時の拡充で可能になります。その後ソフト事業を活用しておられる過疎自治体は多くなり、今ではかなり使われるようになってはいます。その後自民政権に戻ったため、6年延長という状態に置かれていた過疎法はさらに今度は5年延長されました。そのため2021年までとなりました。以上がこれまでの過疎法の歩みとなります。

それではここで私が訪れた全国の過疎地域の写真を少しお見せしたいと思います。

1番目の写真は島根県の写真で、これがまさに日本の農村の究極の姿だと思ってください。山があって木が生えています。下の平らなところが田んぼです。間に一軒家があります。家の周りの田んぼを耕してきたわけで、そんなに家は増えないのです、農村というところでは。増えたら農地が足りなくなりますので。これが究極の日本の農村の姿になります。これはこれで大変豊かな農家だったはずですが。ただ米の値段が下がり、他の賃金が上がり、いわゆる生活水準が上昇し経済が成長する中で、田んぼだけではなかなか良い暮らしができなくなっていました。

この写真は岩手県です。中国地方から東北、岩手県へ行っても山があって木が生えていて、家はかなりの数ありますが田んぼがある。近くに勤め先があれば、次男に近くに家を建ててあげるといこともだんだん増えていきました。このように基本は一緒です。

次は宮城県の栗原市、かつて過疎で表彰を受けたところですが、この山に木があるということは、ヨーロッパや中国に行くと普通ではないんです。ヨーロッパでは家畜をたくさん飼って山で放牧するので山の木を結構切っています。このように日本は田んぼだけでやってこられたので山に木があるのだということは、基本的に知っておいてください。宮城県の栗原市あたりに行きますと、刈った稲をこうやってくいにかけます。美しいですね。ただ面倒ですよ。だからだんだんやらなくなる。いい状態を作ろうと思うとどこか手間がかかります。ただこれが美しいと思えるかどうか、それが問題なのです。それが方々に見聞を広げて人間が感ずることなのです。

この写真は輪島の千枚田で、輪島も今は過疎地域になっています。1回地震で崩れたりして修繕する前のもので、これはものすごく小さい田んぼがあります。稲が5株しか植えられないような田んぼまであります。

要するに良い場所が田んぼで埋まってしまうと大変なところまで頑張って作っていった、それが棚田というものです。

基調講演「過疎地域の使命」

この写真は徳島県の今は三好市、かつて東祖谷山村という徳島の山奥です。ここは斜面に水がないので棚田がありません。畑だけです。こんな集落もあります。今は伝統的建造物群保存地区になっているようです。

次は変わったところをお見せします。瀬戸内海の大崎下島という島ですが、旧豊町、今は呉市になります。今は一部過疎ですけど、みかん畑が山の上まで。これは田んぼができないところで人間が頑張った結果です。みかん畑がそこだけでは足りないで周りの島にまで作りました。これは周りの島にみかんを作りに行くための船です。漁船ではありません。

こんな例もあります。もちろん大変な過疎地域で、愛媛県の南の方、宇和島市の遊子というところ。細かい地名は水荷浦といいます。じゃがいも畑です。よく作ったものですね。人間というのは自然の中で本当に頑張って色々な景観を残してきました。全部守ることはもちろん難しいと思います。この畑も大分荒れかけていたのを早稲田大学に行っていた地元の女子学生が、この畑守ろうよと言って、それでおじいちゃん達も頑張って「また作るか」といって作り出されました。これが今ちゃんとあるかどうかは、私は残念ながら確認しておりません。あって欲しいと思いますが、荒れているかもしれません。放っておいたら荒れます。これはもう20年ほど前の写真ですから。

このように人間というのは、その土地で生きるということで随分頑張ってきたのだなと思います。過疎地域で生きるということは、何かをやはり頑張らないといけません。都会の人が楽をしているわけではありません。都会の人は都会の頑張り方が、田舎の人は田舎の頑張り方があります。満員電車でぎゅうぎゅう詰めになりながら会社で遅くまで働くという都会の人の頑張り比べ、田舎の頑張り方は違う。その違うということが大事で、自分のところは何を頑張ればいいのかということが重要になります。

こうした風景自体が今や観光地になっている。この写真は北海道の真ん中、中富良野という町の富田さんという農家だったと思います。花を綺麗に色分けしてこんなに素晴らしい状態を作っている農家もあります。

このように過疎地域にもいろんなところがあり、いろんな頑張りがそこで求められています。

第3項目は「半世紀前に過疎法が生まれたことの現代的意義」についてです。過疎法は、私は世界に誇っていい法律だと思っています。2015年に国連サミットでSDGsという国際目標、貧困や健康や地球環境等に関する17の目標と169のターゲットが定められました。その根本には世界の誰1人取り残さないという思想があります。

そうしたものが2015年に生まれたのに対して、日本の過

疎法はこれに先立つこと45年前です。日本の市町村、どこも取り残さないという発想が基本にあると思います。放っておきませんよ、地域が減んでいくのを国は黙って見ていませんよ、という法律です。基準を定めて支援しなきゃいけませんので、人口減少と財政力指数、財政力指数というのは、インフラの整備の力にももちろん関わりますが、それを基本的な指標として最初の過疎法ができました。この過疎法が今の日本で半世紀以上も継続している、ニュアンスが少し最近変わってきていますが、そこに大きな価値があります。

そして2021年に新しい過疎法ができました。これは今から申し上げますが、少しセンスが変わってきています。私が従来申し上げているような、過疎地域には過疎地域の価値があるのだと、単に困っているような地域ではありません、ということがようやく法律のセンスにも取り入れられてきています。これが第4項目です。

「過疎地域の持続的発展の支援に関する特別措置法」、長い法律の名前です。持続的発展という言葉は、SDGsにおける「SD」、サステナブルディベロップメントのことです。業界ではよく持続的開発といいますが、開発というとどこかをひっくり返して掘り返すようなイメージがありますのでわれわれは持続的発展と言っています。今回行政でもそうした言い方を取り入れられ、世界的にサステナブルディベロップメントという言葉が時代のベースにあるということを反映しているのだと思います。

今度の法律には格調高く、過疎地域の価値に触れた前文があります。日本国憲法にそもそも「日本国民は～」という格調の高い前文がありますね。それをさっと言いますと、「過疎地域は、食料、水及びエネルギーの安定的な供給、自然災害の発生の防止、生物の多様性の確保その他の自然環境の保全、多様な文化の継承、良好な景観の形成等の多面にわたる機能を有し、これらが発揮されることにより、国民の生活に豊かさや潤いを与え、国土の多様性を支えている」とはっきり書いてあり、第1条では人材の確保及び育成ということが最初に出てきます。今までの法律とはかなり違います。第4条の対策の目標でも、多様な人材を確保し、育成することということが最初にあります。これには生活インフラの格差がかなり改善されたことも背景にあると思いますが、地域の発展を人が作る、ということが普遍化されたことの意義は大きいと私は大変喜んでおります。私達が前の年に作った提言に今度はかなり基づいて法律を作っていただきました。

過疎地域は何を目標とすべきか、豊かな少数社会だというのが、第5項目です。

人が減って困ったということではなく、人は少なくとも豊かになれるのだということを信じてそれを作っていく。日本全体の人口が減っている、ですからどこかから来てもらおう

と思っても簡単ではないのです。もちろん人が入れ替わるということは必要で、都市からそれなりに入ってきてもらわなければいけません、そう甘いものではないということです。

私がこの20年言ってきたことは、人口減少を嘆くのではなく、少数の人間が広大な空間と資源を使う、活用することをめざす、それにはそれなりの力と知恵が必要です。豊かな少数社会を目指すべきだということを私は25年前の本で書いています。その思想は一貫して変わっておりません。その「地域を活かす」という本は電子書籍にもなっていますので、読みたい方はネットで探してみてください。

都市経済の基盤は人の数です。そして効率です。それらが自由競争の中で育つ。だから淘汰もある、失敗もある。そういう都市が成長を続けた時代は遠い昔だと思います。今や都市、特に大きい都市は、「格差」「貧困」「孤独」などの不幸をも量産していると理解しております。孤独で悩んでいる人は多いです。小さな社会では人と人が支え合っている状態を作ることが可能です。ですから、パワーとスキルを持つ人の参入、それが新しい仕組みの創出に繋がる。地元の人も成長しなければいけません。今や多くの指標で日本という国の地盤沈下が目立つ時代です。そのため、都市に頼っている訳にはもう行かないぞという思いも必要だと思います。

過疎地域が自分で、幸福感のある地域生活、ここはいいところじゃないか、俺たち頑張っているよな、という状態を作ること自体がこの国の価値を高めるのだと思ってください。都市は最近やばいのです。日本はいろんな経済指標で下の方に落ち込んでいます。

そういう“大都市にも小さな社会に関心を持つ人が増える”というのが第6項目で、地方への移住に関心を示す人が増加している。地域おこし協力隊や地域おこし企業人（現在の地域活性化起業人）、こうした制度は完全に定着し、後継者がいないなという時に、地域おこし協力隊にできそうな人がいれば、あなたこれやったら、というケースも結構出てきているようです。それから協力隊の若い人には、田舎の濃い人間関係に感動するような報告も多くあります。田舎のよさを取り上げたテレビ番組も増えています。みんな親切ですね。「ポツンと一軒家」なんて見ているといかに田舎の人が親切か。それはやはり人生に余裕があるのです。それはそれで大変な幸せなのです。

続いて第7項目へいきますが、「豊かな少数社会への道」と書きました。基本的なことだけが書いてあります。まずは経済的活性化。小さな社会では効率的な分業というのは成り立ちません。都会の真似をしては駄目です。そのため、複合的にやるのが基本です。何でも請負う企業が村にあってもいいですね。何でも屋さん。私は村には必要だと思います。そ

れだけの能力が人間にあるのです。季節の推移も必要です。田んぼを作っていたら冬は何をするのか。そういう生産体系を考える必要もあります。冬は別の建設業やたつていいわけです。

人口減と高齢化により自然の活用というのが、退化しています。ここを何とか建て直す、新しい人材とスキルで今まで使えなかったような土地も、こうやれば使えるよというような新しいチャレンジが必要です。地域おこし協力隊などの若者の新鮮な目も力になります。そうしたことから、地産地消を軸に豊かな経済循環をつくり出すことを目指そうと書いてあります。

小さな社会では誰が何をできそうだと、人のことが見える、これが一番の価値です。あの人ならこういうことでできそうだと、自分も頑張ろうということです。そして人材が場を得れば、蛮勇を振るって成功するということも多いと。

それから地域社会の社会的活力についてもぜひ考えて欲しい。経済のことは誰でも考えますが、社会そのものの価値、地域社会のあり方、地域の居心地がいいか、ということです。

今までの表彰地域にも幾つもの例があります。和歌山県かつらぎ町天野の里では移住者と住民が非常にいい関係を作り、出て行く人もいますが移住者がどんどん増えています。それから、去年の表彰の長野県の根羽村は、移住コーディネーターとなった人が都会から移住してきて、特にSNSを駆使して、奥さん達も一緒になって新しい社会関係を構築していました。これも去年表彰ですが、飛騨市のヒダスケでは、遠くの人が地元へお手伝いに来ると。何の褒賞もなく、交通費を出してお手伝いに来てお互いが盛り上がる、そうした関係も世の中にあり得るのだと、人の役に立つことがうれしいという人達もいるということがわかりました。

それから交流による刺激ということで、かなり前ですが、高知県の津野町の森の巣箱という、山間集落で宿泊施設とコンビニを運営し、大変評価が高いようなところもありました。施設は廃校になった小学校舎を活用しており、村の人がいつも訪れて一緒に歓談します。そうやって交流によって自分たちが育つということが大事です。

これはもっと昔の表彰ですが、高知県の北のほうに大宮産業という会社があります。集落でガソリンスタンドとコンビニを運営する草分け的な存在です。今では全国で行われていますが。

豊かな少数社会への道ということで、豊かな自然ももとより過疎地域の価値であります。我が国の自然がいかに豊かであるかということです。過疎地域では自然をきめ細かに利用して、何とかそこで暮らしてきた。これをツーリズム等の経済活動に活用することが大きな課題だろうと思います。

これは数年前に表彰した新潟県粟島浦村という、粟島とい

基調講演「過疎地域の使命」

う佐渡島の北のほうにある小さい島にある村です。そこでは潮風留学といって、子供が少ないものですから、小中学生の時から留学生を募集して一緒に生活しています。馬の世話をしながらいい暮らしをしています。ここでは生き物が好きな留学生を募集して馬の世話をしてもらっているのです。このように中学生が取ったわかめを売店で売っています。

そろそろ時間が来てしまいましたので、最後に過疎地域の使命ということで、まとめさせていただきます。

過疎地域は日本の経済がものすごく成長した時代に、都市へ人が吸い込まれるように、どんどん人が減っていき、条件不利地域とかつては言われました。都市から遠く不便だと、便利なものがないということで生活インフラに対して支援が行われてきたわけです。しかし、人は減りつつも土地に密着した暮らしを何とか維持してきたということで豊かな自然が保たれています。今や日本の経済指標の多くは相当下位で、残念ながら日本がトップだった時代というのは遠い昔です。そうした中、過疎地域というのはわずかな支援で生き抜いてきました。過疎債は皆さんにとっては大変使い勝手がいいと思いますが、国全体の総額としては大した金額ではないと思っております。

そうした過疎地域が豊かな少数社会、自分たちも他人もそのように見られる、そんな社会に置き換わるということが、日本という国への最大の貢献だと思います。都市は厳しいのです。何とか生き抜いてもらわなければいけません。面積的に広大な面積を占める過疎地域が、自分たちは幸せだよという状態を作ることが、日本国が世界の中で価値を高めることになるのだと私は考えているわけです。

日本の隅々までしっかりした暮らしがある。そして自分のところはいいとこだよねと、他人も都会の人も言うてくれる、そんな地域をめざしましょう。皆さんの頑張りでそうなっている地域もたくさんあります。みんながそうした認識を持つ。大変だから助けてねということではなく、いいところだよねとみんなで言える、そうした地域に置き換わるのが、日本国という国が、大きな物差しで、単なる経済指標ではなく、大きな物差しで世界から敬意を払われる、日本はいい国だよねと世界から言われるようになる、それこそが目標だということで、私は今日の講演を、それこそ“過疎地域の使命”だということで終わらせていただきたいと思います。ご静聴ありがとうございました。



パネルディスカッション「ウェルビーイング先進地域 ～多様な人材が創るこれからの地域」

コーディネーター

指出 一正 氏

『ソトコト』編集長

『ソトコト』編集長。富山県「くらしたい国、富山」推進本部本部員、島根県「しまこトアカデミー」メイン講師、山形県小国町「白い森サステナブルデザインスクール」メイン講師、和歌山県田辺市「たなこトアカデミー」メイン講師、福島相双復興推進機構「ふくしま未来創造アカデミー」メイン講師、奥大和地域誘客促進事業実行委員会、奈良県、吉野町、天川村、曾爾村「MIND TRAIL 奥大和 心のなかの美術館」エリア横断キュレーター、群馬県庁31階「ソーシャルマルシェ&キッチン『GINGHAM (ギンガム)』」プロデューサーをはじめ、地域のプロジェクトに多く携わる。内閣官房、総務省、国土交通省、農林水産省、環境省などの国の委員も務める。経済産業省「2025年大阪・関西万博日本館」クリエイター。著書に『ぼくらは地方で幸せを見つける』（ポプラ新書）。

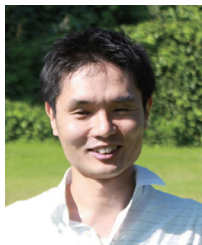


パネリスト



藤田 とし子 氏 まちとひと 感動のデザイン研究所 代表

大学卒業後、大手流通グループ、クチコミ系マーケティング会社等を経て、2001年、『かしわインフォメーションセンター』の事務局長、センター長（2019年～）。市民参加のまちづくりとクチコミを活かしたブランディング戦略で中心市街地活性化事業を展開。（株）全国商店街支援センター事業統括役時代（2010年～）には地域商業再生と新たな地域リーダーの育成に尽力した。この20数年、一貫して持続可能なまちづくりにこだわり、【掘り起こせ！地域の宝プロジェクト】として市民起点の『まち歩きMAPプロジェクト』を全国150エリアで展開。町衆の心に【まちへの誇りと愛着】を醸成し、次世代人材の育成に力を注いでいる。



金子 知也 氏 公益社団法人 中越防災安全推進機構にいがたイナカレッジ マネージャー

中越地震により過疎化が加速した新潟県中越地域の農村地域で都市部の若者を受け入れるプログラム「にいがたイナカレッジ」を2012年に立ち上げる。よそ者が地域課題を解決するのではなく、地域の人々と関わりながら日常を過ごすことで、地域に気づきを与える等前向きな雰囲気を生むきっかけ作りを重視したプログラムを設定。プログラムへの参加をきっかけに定住する人も多くみられるようになり、中越地域のみならず県内各地に活動の輪を広げている。



島田 優平 氏 (一社) ジソウラボ 代表理事

2008年より井波にもどり家業の林業に携わる。近年は南砺市の推進するエコビレッジ構想に呼应し、森林をキーワードに人と人との関係性や地域の方向性について考え、事業を通じて地域に貢献できるよう各種事業に参画している。2017年には（公社）となみ青年会議所理事長を歴任。また、日本遺産の認定をうけた地元井波地域において、井波日本遺産推進協議会ワーキンググループ座長として、日本遺産関連事業の推進。その事業をきっかけとしてジソウラボを有志で設立し、地域における人づくり事業を通して、地域活性に取り組んでいる。好きなことは人との出会いや旅行。



佐藤 みどり 氏 NPO法人立山 クラフト舎 代表理事／陶芸家

1983年生まれ。2002年 Keith Rathertの器に惹かれ陶芸をはじめ。愛知県瀬戸市を中心に陶芸を学び、2008年以降、個展・グループ展にて作品発表を行う。2014年富山県立山町に移住。3年間立山町地域おこし協力隊として活動。自身の作家活動の経験から、全国からもの作りの作家が集うクラフトフェア「立山Craft」を主催（2015年以降毎年開催）。富山県を代表するクラフトイベントとなる。2017年NPO法人立山クラフト舎を設立。代表理事を務める。立山町に築窯。2019年より作家活動を本格的に再開。富山県成長戦略会議 真の幸せ（ウェルビーイング）戦略PT委員、「くらしたい国、富山」推進本部本部員、とやま未来創造県民会議委員、富山県中山間地域創生総合戦略検討会委員。

「地域社会～」

指出／ここからは『ソトコト』編集長の指出が司会進行を務めさせていただきます。

まず、先ほどの宮口先生の基調講演、大変良かったですね。せっかくですので、皆さんにも感想を一言聞かせてもらえたらと思います。藤田さんどうですか。

藤田／お話の内容が本当に染み渡り、最後は涙が出そうになりました。特に「過疎地域は少しの支援で生き抜いてきた地域で、過疎地域は豊かな少数社会に置き換わることが国への最大の貢献」というフレーズが心に響きました。

指出／ありがとうございます。では金子さんいかがですか。

金子／過疎地域の歴史伝的なお話から、宮口先生の過疎地域への思いや願いを改めて聞かせていただき、私も新潟の中山間地域、過疎地域でいろんな活動をさせていただく身として、決意新たに頑張ろうという力強いエールをいただいたかなと思います。

指出／ありがとうございます。では島田さん。

島田／率直に過疎地域に生まれて良かったなと思いました。あと近代の富山県は売薬さんがエネルギーに目を向けて発展を目指した、というのは非常に印象的で参考にしたいと思いました。

指出／ありがとうございます。では最後に佐藤さんお願いします。

佐藤／過疎地域に移住してきた身として、過疎地域こそが豊かな少数社会という言葉がととも胸に響きました。豊かさの価値が都会と過疎地域とではガラッと変わったことを実感していましたので、過疎地域にしかない、過疎地域だからこそ感じられる豊かさにもっと目を向けていきたいなと感じました。

指出／ありがとうございます。それぞれ想いを秘めたところがたくさんあるかと思います。また交流会の時にいろいろな話ができたかなと思います。では早速始めていきましょう。ちなみに僕はルーツが富山です。黒部出身のおばあちゃん、そして親戚がみんな魚津にいますので、子供の頃から実家のある群馬県の高崎市から、あの頃は車で行くに相当時間がかかったのですが、富山に来て美しい海の光景を常に感じていました。ですので、地域の豊かさを測るときに地域の幸せとは何だろうということを考えますが、それはその辺りが原

点になっていて、今の仕事に繋がっているのかなと考えています。

今日はウェルビーイング先進地域ということで、富山県はウェルビーイングをビジョンとして標榜されており、「幸せ」とも訳されますが、この「多様な人材がつくるこれからの地域社会」をつくり、維持していくときに、4名の皆様の取り組みに大きなヒントがあるのではないかなと考えています。

まず皆様の自己紹介と取り組み、それから過疎地域の魅力などについて聞かせていただいて、それから大きい議論として二つ考えようと思っています。実際にその多様な人材をどう呼び込めたいか、それから呼び込んだ後にどうすれば持続的に呼び込むことができるのか、そういったことで話を進めていけたらと思います。では、よろしく願いいたします。

まず、藤田さんからお願いします。

藤田／「まちと人 感動のデザイン研究所」の藤田と申します。

私は約20年間、まちづくり・地域活性化の分野で情報発信と新たな担い手育成を主軸に、地域の皆さんの伴走支援をさせていただいております。

最初に、私のまちづくりの原点を少しお話しします。

先ほど宮口先生のお話の中で、1970年に法律ができて、全国の過疎地域を何とかしていこうという動きが始まったとお聞きしました。

私は東京の日本橋、東京駅から歩いて5分の高島屋という百貨店のすぐ隣の商店街で生まれました。

皆さんは想像できないかもしれませんが、その時代に都会のど真ん中でも空洞化がどんどん進んでいました。

理由は日本の高度成長に伴う都心の再開発によるまちの再編で、その波に飲まれ、私の出身中学校は他の学校と合併し、形をなくしました。

また、私が住んでいた街区も再開発で移転を余儀なくされ、商店街や町会の皆さんとも散り散りバラバラになりました。帰るふるさとがなくなるということはどういうことか、皆さん、イメージできますでしょうか。地名もあり駅もあるのですが、その場所に立っても懐かしい風景はなく、会いたい人もいません。

大人になったとき、自分が根無し草になったようで、時折不安だったり悲しかったり、もやもやしたり、そんな気持ちになりました。

その後結婚し、千葉県柏市に移り住み、4人の子供を育てましたが、移住先のコミュニティになかなか溶け込めず、このまちを好きになれない違和感もあり、そこでまた、もやもやしていました。

そんな中、母親である私が子供たちのふるさととなる柏を好きになること、「このまちに帰ってきたい」、「何かあってもここに来たら落ち着く、力をもらえる」そう思えるまちづくりがとても大事なのではないかと感じるようになり、そのことが私のまちづくりの原点であったと思います。

その後、地域情報紙の記者をしていたご縁で、2001年に開設された「かしわインフォメーションセンター」の事務局長を務めることとなり、まちづくり事業にもかかわることになりました。

当初、柏の魅力をいろいろな方に尋ねたのですが、どなたも「特にないな〜」と答えるばかり。とはいえ、お気に入りのお店や人、大好きな居場所などがあるはず。その「お気に入り」がどんなことか取材し、市民自身の言葉で発信してみてもどうかと考えました。ただ、素人が思いを文章にまとめるのは難しいので情報誌の発行は断念し、代わりにみんなの「お気に入り」を訪ね歩く「まち歩きMAP」を作ろうと有志を募り、「掘り起こせ!地域の宝」地域の宝「まち歩きMAP」プロジェクトが誕生しました。

プロジェクトを進めていくと、これまでは「魅力なんて何もないよ」と無関心をよそっていたメンバーの目の色が変わりました。楽しそうに取材に飛び回り、発見したことを嬉しそうに報告し、完成したMAPを嬉々として配布します。受け取った人からは「楽しそうなまちだね」「行ってみたいな」などの反響があるものですから、ますますやる気が出てくる。おかげで、柏市では毎年1作品、5年連続で発行することができました。

その後各地からお声掛けをいただき、これまで150地域でプロジェクトを展開させていただいています。

一方、地方を訪れるうちに、この町には若者がいないとか、担い手がないという声も聞こえてきました。そこで、今度はSNSで「地元を元気にしたい若者、集まれ」と呼びかけたらどうだろうと思いつき、若者の流出が進む埼玉県寄居町ではあえて『若者会議』を立ち上げ、担い手育成に取り組みました。

同会では都内で働く若者達が月に1度帰郷し、活気を失った地元を何とかしようというアイデアを出し合い、まち歩きMAPを作り、イベントを企画・開催する。最初は気のない素振りのメンバーも「寄居ってこんなに面白い」「寄居のいいところをもっと発信したい」と語るようになりました。

また、栃木県日光市の空洞化が進む中心市街地エリア（今市）では、商店街の跡取り達が7人集まり、『歩きたくなるまちづくり委員会』を結成。地名から101個の自慢できるエピソードを集めようと取材、編集に取り組み、住んでいるからこそ知っている、とっておきの話題を掲載した『マイイチ☆ピカイチMAP』を発行しました。その後、同委員会は世代交代を

繰り返しながら、今でも地域活性化の活動を続けているそうです。

私はこれまで、地域の方々がまちに対して誇りと愛着を感じ、自ら発信していく「しくみ」と「しかけ」そして人材の発掘育成ができたらと思い活動してきました。長くなりました以上です。



指出／ありがとうございます。では金子さん、お願いいたします。

金子／新潟から参りましたイナカレッジの金子と申します。よろしく申し上げます。

私は2012年から新潟県内の中山間地域で、外から人を受け入れるプログラム、イナカレッジという取り組みを立ち上げて活動しています。

私たちの原点となっているが2004年に中越地震が発生した際の経験で、当時新潟県の長岡市中心とした中越地域にたくさんのボランティアの人たちが訪れ、家の片付けや復興のイベントのお手伝いをする中で、手伝ってもらって役に立った、助かったというだけではなく、受け入れた地域の人たちとボランティアの人が一緒に汗を流す、時間を過ごす、あるいはご飯を食べるといった交流が積み重なることで、お互いに元気になっていくような状況がありました。

これは地域の人にとっては、「〇〇ちゃんが来てくれて嬉しい、〇〇さんに会いに行きたい」という関係性ができ、それによってお互いがお互いに元気になっていく経験となりました。

そうした経験があった後、地震によって人も減り高齢化も進む中で今後どのように地域の担い手を考えていこうかということで、2012年にこのイナカレッジを立ち上げました。

その際、地域の担い手とは何なのかと考えました。そして、そこに暮らしてもらうに越したことはありませんが、その暮らす、暮らさないという物理的な話以上に、先ほどのボランティアの話に通じるのですが、その地域に共感して地域の人と一

パネルディスカッション「ウェルビーイング先進地域 ～多様な人材が創るこれからの地域社会～」

緒に汗を流して活動する、そういう人材を増やしていくことがこれからの地域づくりには大事なのではないかということを考えました。

それを私たちは“多様な担い手”という言い方をしており、これは今で言う関係人口にあたるのかなと思いますが、こうした人たちを増やしてこうと2012年から活動をスタートしています。

地域に関わるにはいくつかの段階があります。

最初がその地域に関わるきっかけづくり。それから、そこで興味持ってくれた人が参加しやすい日帰りのプログラムや週末に通いながら地域で活動するプログラム、1ヶ月滞在して活動するプログラム、長期バージョンの1年間のプログラム、というようないくつかの段階に分け、いろんなプログラムを現在行っています。

簡単に紹介しますと、日帰りのプログラムでは米農家さんのお手伝いをしていただく人を募集し、それに対してお米でお礼をするというものがああります。これは農作業だけではなく、例えば米袋のデザインとか、ネットに載せる記事の取材、執筆活動、そうしたことをお米でやっていただく取り組みになります。

あるいは、1ヶ月間地域に滞在しながら、地域を紹介する冊子や動画を作ったり、何か調査をやったりするような滞在型のプログラム、あるいはその1年バージョンで、今は新規就農を希望されている方を受け入れる長期プログラムも行っています。

私たちの特徴としては、例えば1ヶ月間のプログラムで言うと、1ヶ月かけてこういう冊子を作ってくださいとか、こういう調査をやってくださいというゴールをあらかじめ定めているのですが、そのようなアウトプットを作っていくプロセスをすごく大事にするとともに、地域の人たちと外から来る人たちがたくさん関わる場をとにかく作っています。そうすると、こういうアウトプットができましたということと併せて、1ヶ月終わった後、集落の人たちが集まる機会が増えたとか、会話が增えたとか、集落の会合に若い人たちが出てくれるようになったとか、地域の中で前向きな変化が起きることがあります。それを私たちは副次的な効果と呼んでいます。

私たちは、外から人を受け入れて何かをするということも大事ですが、その地域の中にいろんな前向きな変化を起こせるような取り組み、そうした部分を大事にしながら、外部の人材を受け入れる、ということをやらせていただいています。以上です。

指出／ありがとうございます。では次は島田さんと佐藤さんお願いします。島田さんと佐藤さんは富山の方です。では島田さんお願いします。

島田／南砺市井波から参りました。明日分科会で井波へ行かれる方もいらっしゃるかと思いますが、そこでジソウラボという団体を立ち上げて活動しております。その活動の一部をご紹介します。

「次の世代に選ばれる地域」「成長できる環境がある」「つくる人をつくる」をテーマに取り組みを行っています。そして人材輩出のまち南砺市井波と言われるようになればいいなと思いい活動しています。

井波には630年の歴史があります。そして井波彫刻という250年に及ぶ伝統工芸の技術もあります。

私の先祖は利賀村という過疎地から井波のまちにおりてきて事業を始めました。先祖もそういう意味では、山に関わり生きてきたということが記録に残っています。

井波は2018年に日本遺産というものの認定を受けまして、それからまちの動きが変わってきたように思います。

私もそのときから具体的にまちづくりに関わり始めたのですが、通常は日本遺産推進協議会という協議会を作って物事を進めていくことが多い中、私たち若い人たちにもその取り組みに関わって欲しいということで声をかけていただきました。年配者の方から初めてそんな声をかけられたのですが、一緒に関わってほしいということでワーキンググループを立ち上げ、そのお世話もさせていただきながら、30人ぐらいで議論したのがスタートになりました。

そこから派生してジソウラボという団体を作らせていただきました。

井波には歴史があるとお話ししましたが、歴史があるからこそ、これまではこうしてきたとか、伝統はこうですということや、“土徳”としてご先祖様やその土地に感謝するという精神があり、それ自体はいいことなのですが、推進力や今後どのように発展させていくかという力が弱い。そのため、これから私たちが特に力を入れていかないといけないのは、“ing”という実行力や実践力であり、そこを高めていく活動をしたいということで、“ジソウ”という、これは造語で主に自分で走るということがメインですが、いろいろ組み合わせでそう名付けた団体を立ち上げました。

若手といっても私たちは40代ですが、異業種のチームを作りました。これまで地域を見ていると、私たちもそうですが、同業者で組合を作ったり団体を作ったりということはたくさんあっても業種を超えて何かを実施できる団体がなかったので、異業種混合の団体を立ち上げ、特に木彫刻師さんも一緒にまちの取り組みの中に入れていただいたことが大きかったと思います。

メンバーの強みは多業種、多拠点、経営者、デジタルということで、一見一部の人でしかまちづくりできないのではないかと思われがちですが、やはりキーになるポイントを持った人たちがまずはやってみることが必要だと思っていて、今東京に住んでいてももう一生井波には帰ってきませんと言っているけど南砺市に貢献したい、ということで関わってくれているメンバーもいます。

宮口先生のお話にもありましたが、人を残すことが重要であり、さらにその人というのは事業がなければ育たないということを昔の方が言われていることから、事業を地域で起こしていくことにチャレンジしました。

井波彫刻は230年続いています、230年前に前川三四郎さんという木彫刻師の人が来たことによって井波彫刻が230年続き、いま井波彫刻師は200人ぐらいいるのですが、その200人の彫刻師が生まれました。ということは、今、前川三四郎のような人材を育てれば、100年後200年後にそうした人材が残っていくのではないかとということで、そうした人材を地域から輩出していけるような仕組みを作りたいと思い取り組んでいます。

そしてそのためにまず文化の源泉となる人材を地域で育てたいということで、まちでパン屋さんをやりたい人、パン屋さんができる人を募集したところ2週間で来ていただきました。また、交通の取り組みも一緒にやろうということで募集し、来ていただきました。

他にもクラフトビールをやりませんか、できませんか、一緒にやりましょうということで来ていただいています。

そして井波彫刻を支える糸鋸土さんも育てるということで来ていただきましたし、コーヒー屋さんをやりませんかと募集したところ、来ていただきました。

このように私たちの方から社会に向かってこういう地域でこういうことをしませんかと投げかけると、やはりこういう時代ですので、いろんな方が反応を示していただいて、今は5つの事例があります。

そして現在はジソウラボという団体のほかにも色んな団体も立ち上げて活動しています。

その成果なのか分かりませんが、7年間で南砺市井波地域に42件のお店が開業するという結果も出ています。以上です。



指出／島田さんありがとうございます。では佐藤さんお願いします。

佐藤／NPO法人立山クラフト舎の佐藤と申します。

私は20代の頃は陶芸の活動を軸として生活していました。そして2014年から富山県立山町の地域おこし協力隊として活動する中で、全国からものづくりの作家さんが集うクラフトフェア、「立山Craft」というイベントを企画しました。現在はNPO法人としてイベントを続けており、このイベントは富山だけではなく、北陸を代表するクラフトフェアに成長しています。

私が地域おこし協力隊として入った新瀬戸地区がどのような地区だったかといいますと、220世帯程の小さな集落で、3年前に保育園が閉校となり、翌年に小学校の休校が決まったという中で移住しました。

なぜここへ来ることになったかといいますと、元々その土地には越中瀬戸焼という焼き物があり、この土地で陶芸をする人を地域おこし協力隊として募集するというお声がけをいただき、それがきっかけでした。

しかし来た当初は色々な混乱があり、そもそも陶芸家の人が自分を呼んだわけではないということを知り、一旦陶芸を封印して陶芸以外の活動をすることにしました。

そして今まで陶芸しかしてこなかった自分には一体何ができるのか。今まではものづくりをしてきて、これから先もやりたいのはものづくりだけど、何ができるのか。そうした中で、今まで出店する側であった「クラフトフェア」と「地域活性」が初めて結びつきました。自分にできる地域おこしはこれしかない。

移住して約1年後、立山Craftの初回が開催されました。最初の来場者は2日間で8000人ほどとなりました。

北は山形、南は熊本から全国の作家さんが集い、フードや音楽もあり、あと大切な要素として、地域からの出展ブースを設けていただきました。

現在地域の理解を得てイベントを開催できているのは、この

パネルディスカッション「ウェルビーイング先進地域 ～多様な人材が創るこれからの地域社会～」

時に地域の皆様が当事者として参加して下さったことが大きいなと感じています。

そして回を重ねるごとにいろんな要素を盛り込み、途中から入場料も取ることで自走する形になっています。9年の間にはコロナ禍もありましたが、その中でも火が消えてしまわないようないろんな規制がある中でも開催を続けてきました。少し遡りますが、当初の目的だった陶芸の作家活動は、住居と工房を整えた中で製作を再開し、少しずつ軌道に乗っています。

地域おこし協力隊の期間はこの土地がたくさんの人の縁を結んでくださいました。

そしてこの3年間は決して遠回りではなく、この土地で活動していく上での近道だったんだと今なら思うことができます。

この土地について少しご紹介させていただきますと、元々この土地には一つの中学校、四つの小学校があるエリアでした。

一番多い時には全体で1000人ほどの子供たちがいたと聞いていますが、順々に休校となり、すべての学び舎が2019年までになくなりました。

しかし、越中瀬戸焼の方々が「かなくれ会」という団体を結成してイベントを始めたのを皮切りに、魅力的な古民家が貸しスペースになったり、立山Craftが生まれたり、国内外で活躍する和紙作家さんが工房を構えたり、移住者さんが集える牧場を作ったり、ハーブを使った癒しの施設が民間で生まれたり、ITの拠点が生まれたり、あとこれは主人の活動なのですが、林道を走るEバイクツアーが始まったり、世界に向けた日本酒の貯蔵所が生まれたり、魅力的な要素が一つ一つ生まれています。

そんな中で私が今感じているのは、地元の人新しい事業や人の流れについて人間さや新聞からしか情報が入ってきませんが、それは不信感からスタートすることに繋がってしまっています。一方で、新しく事業を始める方は思いを伝えたい、地元の理解を得たいというところがあります。移住してもうすぐ10年ですが、私はこの接着剤、つなぎ役になっていきたいなと感じています。私からの自己紹介は以上となります。

指出／4名の皆様ありがとうございます。皆さんお聞きになってお感じになられたかと思いますが、この4名はそれぞれ場所を作っていらっしゃる方です。場所というのは空間のこともありますし、状況のこともあります、プレイスメイキングといえます。

1人でも居心地がよかったり、みんなが集まって楽しかったり、そういう場所を作っている皆さんが、人を呼び込む活動

をずっと続けていらっしゃいます。過疎地域でいま大事なことのひとつとして、外からの人たちが集まって、そして中の人たちとやかに持続的に地域の盛り上がりを作っていくのかということがあります。その中でまずお話を聞きたいのは、皆さんそれぞれの地域で外からやってくる人たちをどう呼び込んできたのか、それは中の人への気づきかもしれないし外に対しての呼びかけかもしれませんが、そのあたりをぜひお聞かせください。順番に行きましょうかね。藤田さんお願いします。

藤田／私が伴走支援に入っているのは過疎地域だけではありませんが、外から人を呼び込もうという発想がない地域も数多くありました。

そんな中で大事にしているのは、地元に関心のない人たちも巻き込んで、足元に埋まっている地域の宝を掘り起こし、まちの魅力を再発見し、自ら発信していく気運を醸成すること。まち歩きMAPプロジェクトはその第一歩なのです。

市民有志で作るまち歩きMAPは正直、完成度は今ひとつ。デザイナー候補がいなければ手書きになります。それでも、とにかく地域のみんなが総力結集で、一つのものを作る。完成度よりプロセスが大事で、何かを発見したり感動を共有したりすることでまち想いのネットワークで上げていくということが大切だと考えています。

手作りのマップは見栄えは今ひとつですが、それでもメディアになります。いろんな場所で配布し、様々な人に見ただくことで、地域外の人も面白そうだと訪ねてきます。その人達の「この町すごく面白いね」とか「こんなとこあったの」といった小さなつづやきがメンバーに届けば、大きな励みになりますよね。

今までは「何もない」と思っていた「通り過ぎるだけの町」でも、外から見ればそんなに喜んでいただけるのだという発見はその先の活動の原動力になりますし、自信をもって発信していくことで外の人を呼び込む力ともなります。

指出さんが仰っておられた交流人口の最初のタッチポイントづくりみたいなことを大事にしてきましたし、そこから広がっていけばいいなと思っています。

指出／藤田さん、大切な気づきをありがとうございます。

愛の反対は無関心とよく言われますから、無関心ということは自分の地域を愛していないのだなと僕は思ってしまうので、それを考えないといけないですかね。

では、先ほど佐藤さんの接着剤の話もすごくいい話だなと思ったのですが、まさに仕事として接着剤をめちゃめちゃやっているのではないかと。金子さんお願いします。

金子／地域に外から人を呼び込もうというときに、地域の人たちみんながそうだそうだ、やろうとなっているのが理想ではありますが、現実はそのことないですね。

例えば、集落単位で私達もやるのが結構多いのですが、正直な話、少ない時は1人2人、多いときでも5人ぐらいの、こういうことをやるのはやっぱり大事だね、と前向きに考えてくれる人たちとスタートするところから現実的にはやっています。

ただし、先ほど1ヶ月のプログラムというのも紹介させていただきましたが、スタート時点では前向きな数人の住民の方と一緒にスタートしても、1ヶ月間滞在して活動する中で、とにかくいろんな地域の人を巻き込んでいく、例えば、ひとり暮らしのおばあちゃんのところにお茶飲み行ったりとか、一緒に仲良くなってご飯食べたりとか、あるいは一緒に汗をかく共同作業をしたりとか、とにかく滞在している期間にいわゆる地域のリーダーじゃない人たちもガンガン巻き込んで一緒に活動していくということをしごく心がけてやっています。そうするとプログラムが終わった後に振り返りした際、皆さん前向きな意見がしごく出やすくなったりとか、この間はこうだったけど本当はもう少しこうやってあげた方がよかったなとか、次に向けた建設的な話が出てきたりします。

本当に数人からのスタートなのですが、終わってみたら何か勝手に巻き込まれていって、じゃあ次はもう少しみんなでがんばろうと、そういう機運をやりながら作っていくことを意識して実際に活動しています。

指出／ありがとうございます。知らず知らずのうちに巻き込まれているみたいなの。

金子／そうですね。巻き込み力がある人は大歓迎、そういう感じでやっています。

指出／勉強になります。ありがとうございます。では島田さんお願いします。

島田／外から人を呼び込んだ事例を5例挙げましたが、私たちがやったことは、やはり全国各地みんなが呼び込んでいる中、ほかとの違いを出さないといけないということで、まず自分たちがどんなまちに暮らしたいかというコンセプトを考えました。

そのコンセプトに基づき、こうした人たちがこの地域に来て欲しいということ、具体的な事例を挙げて、最初の事例だったらパン屋さんですね、この町でこういったパン屋さんやりましょうということを具体例を挙げて、私たちが求めている人材はこういう人ですと呼びかけています。あと、私たち

の特徴として、呼び込んだ後もずっとここにいてくださいね、ということではなく、その人の生き方を尊重し、もしこの地からまた旅立つのであれば応援しますという形で、あくまでも私たちは来てくれる人の伴走者であるということを外部の人にお伝えしたところ、比較的短い時間で反応をいただいた例があります。

指出／井波の例で、あれだけの店舗が門前にできていったというのは、急にスピード感が出てきたのでしょうか。それとも数年で何軒かずつ広がっていったのでしょうか。

島田／そうですね、やはり7年くらいはかかっているのですが、最初のうちは1、2、3と徐々に、その後5、10といった感じで一気に伸びていきました。きっかけはあるのですが、それお話しすると長くなるので明日の分科会でお話したいなと思っています。

指出／ありがとうございます。では佐藤さんいかがですか。佐藤さんの視点からお願いします。



佐藤／田園回帰の流れをどうやって地域に取り込むか。私は取り込まれた方なのですが、いま思い返すと、地域の自治振興会の会長さんが立山Craftの実行委員会の中に入ってくれたことが一番大きかったなと感じていて、いま島田さんやジソウラボが担っている役割が一番大事だなと思います。先ほどの接着剤の話とかぶりますが、やはり結びつける人を大切にしていきたいなと思います。

指出／佐藤さんやそれこそ実際にフェアに参加してくれる方々は、何を地域の面白さとか魅力として来られる方が多いのでしょうか。それもちよっと聞いてみたいですね。

佐藤／手付かずであったところが新鮮に映っているのではないかなと思います。景観を邪魔するような建物がなく、ある

パネルディスカッション「ウェルビーイング先進地域 ～多様な人材が創るこれからの地域社会～」

程度集落として人が減少していく中で、いちプレイヤーになりやすい環境であると思います。

指出／それはきっと過疎地域と言われる地域にはかなり共通してある場所ですかね。

佐藤／そうですね。

指出／ありがとうございます。外から来る人を取り込むといった話のキーになるところを皆さんにお話しいただいたのですが、逆にですね、外から来る人は本当に必要なのかという問いをしたいと思います。外から来る人がなぜ必要なのか、もし皆さんの中でうすらとでも答えのようなものがあれば教えてもらえると嬉しいです。藤田さんお願いします。

藤田／実は私の次男は、富山県氷見市の地域おこし協力隊でお世話になっています。地元の方々が思う当たり前の風景や何も無い、面白くないといわれる日常も、よそから氷見に移住した次男には、とても魅力的に見えるんだそうです。都会にはないものがたくさんある、と…。

次男は最初、商店街活性化のお手伝いしていましたが、町会ごとにお祭りがあって山車があって、いろんな歴史があって、本当に「目からうろこだ」と帰省するたびに、生き生きと話しています。そんな氷見自慢を語る次男のことを、おそらく地域の方もすごく温かく見守ってくださっているのではないかなと思います。

よそ者が発見した魅力を地元の方がスッと受けとめることで、改めてまちに対する誇りと愛着を感じることでしょうし、それならもっと発信しようとなれば、よそ者が魅力発信の起爆剤にもなりますよね。そしてそれを受けとめた人たちが、さっき佐藤さんも仰っておられましたが、よそ者と一緒に、じゃあ!と言って後押ししてくれる人、一緒に走ってくれる人として集まってくれば、まちの活性化の動きが変わってくるのかなと、そんな気がしています。

指出／ありがとうございます。では金子さんはどうですか。

金子／少し具体的な例で話をさせていただきたいと思います。私が今持っているものが何かといいますが、集落の75歳以上のおばあちゃんたちの人生を振り返るとい聞書集を大学生たちが1ヶ月間かけて作った成果物になります。この冊子をつくるにあたって大学生2人が20数世帯の小さな集落に1ヶ月滞在したのですが、その学生たちが1ヶ月間かけて何をやったかという、まずそうした人生の話を聞く

ので、まずはちゃんとおばあちゃんたちと仲良くなって、話をしてくれる信頼関係を築こうというところからスタートしました。畑仕事を手伝い、偉いなと思ったのですが、いただいたかぼちゃをシフォンケーキにしてさらにおばあちゃんに返すとか、そういうことをやった上で、インタビューして冊子にまとめていきました。

そして1ヶ月が経って大学生がいなくなった後に何が起きたのかという、集落のインタビューされたおばあちゃんたちが区長さんのところに来て「自分たちはもう後先短いけれども集落のために何か役立てることがあったら言って欲しい」と言われたそうです。

それに対して区長さんはすごく感謝しておられました。ちなみに、その当時参加者した大学生の1人は卒業した後その集落に戻ってきて今定住しています。

何が言いたいかといいますと、このようにおばあちゃん達が自分の言葉で、地域のために何かやりたいという、そういう気持ちを引き出したのがその大学生2人の言動なのかなと思います。

さらに小難しく言うと、そういった地域の主体性みたいなものが、やはり外部からくる人材がいろいろ活動することで、今のおばあちゃんじゃないですが、自分たちでももう少しこういうことをやりたいとか、地域のためにこうやって動こうとか、もうちょっと頑張ってみようとか、そういったものが生まれやすくなるのかなと活動していて感じます。

指出／具体的な例をありがとうございます。きっと宮口先生や小田切先生、関司先生がお考えになっている内発的発展みたいなところなのかなと思いました。では島田さん、いかがでしょうか。

島田／外からの人は本当に必要かということで、私たちは日本遺産というものの認定を受けた際に改めて井波の630年の歴史を振り返ったのですが、発見がありまして、それは何かというと、井波の変化が起きたときには必ず外部から来た人が活躍するということです。その歴史は現在にも紡がれており、近年地域で活躍している3世代ぐらいの方を見てもお嬢さんが非常に多いです。

そのため、やはり外部の人が変化を起こすということが必要なのではなく、外部の人の活躍がなければむしろ変化が起きないと思っています。

ですので、私たちはそういった外部の人の変化を地域が支えるという仕組みのために活動すると、やはり外部の人の力が必要といいますが、必然的にそうなると思っています。

指出／割と補完的に働き合うという感じですかね。では佐藤さんいかがですか。

佐藤／人の出入りが無い、滞っている空気を新しい人が入ることで風が入り循環していくようなイメージでいるのですが、しびれがない、何も知らないからこそ行動ができるというのがやはりよその人であって、またそのよその人が他の地域を知っている中で、この土地はとても素敵ですよ、と力強く心の底から言う言葉が、地域の方の自信の回復に繋がるのかなと思います。そうした意味でよその人は必要だと思います。

指出／ありがとうございます。今皆さんからお話しいただいたように、外部の人たちが関わらない環境よりも、訪れたり居たりする方がはるかに良いことだと改めて感じました。そもそも日本ではほとんど外圧でおしゃれやファッションが決まっていますよね。自分たちの中でようやく生み出しはじめていますが、大体はアメリカやヨーロッパ、東ヨーロッパから来たものが文化になって、ソーシャルなアクションとかも大体が輸入しているものが多いですよね。それを肯定的に捉えれば、外から来るものに刺激を受けて、中の人たちが自分のオリジナリティのもとで地域を盛り上げていく、という構図は非常に分かりやすいのではないかなと感じました。

では次の質問にいききたいと思います。

こうやって地域の活動とか、それから社会的なところで盛り上がりを作ろうと現れる人達が単発で現れる場合は結構作りやすいと思います。イベントをやりました。1万人来ました。でも明日にはいません。みたいなことは往々にして起きやすいのですが、4名の皆さんの着実な取り組みはそういった形ではなくて、地域との関わりを段階的に踏んでいる、関係人口的な形の方々をすごく育てられているなと思います。

では外からやってくる人たち、あるいは中の人たちのモチベーション、両方含めて、外からやってくる外部の皆さんを取り組む流れをどう持続させるか。サステナブルですよ。どう持続させたらいいのかというところをぜひ教えてください。

誰か最初にしゃべりたい方いらっしゃいますか。では金子さんからいこうかな。



金子／そうですね、外部の人がどうやったら関わり続けてくれるのかということの一つで言いますと、先ほど中越地震時のボランティアの話もさせていただいたのですが、〇〇ちゃんに来てくれて嬉しいとか、〇〇さんに会いに行きたいという、そんな関係性になったらいいな、築いていきたいなという思いが根底にあります。

そうすると、何かがあるからというよりは、実際にあるのですが、自分が進路で迷ったりしたときに、その地域の人に相談に乗ってもらったりとか、あるいはリフレッシュしに地域に来たりみたいなの、そういう関係性が築けるといいなと考えています。

じゃあどうやったらその関係性が築けるのかという話ですが、地域への共感というのは、一緒に過ごす時間と一緒にかけた汗の量に比例するのかなと自分たちなりに思っています。そういった意味では、プログラムをやっている時に一緒に何かをする共通体験や成功体験、それはどんな小さなことでもよく、例えば草が芒々だった神社がみんなで苦労しながら草刈をして綺麗になったね、ということで全然よいのですが、そうしたことをこのプログラムをやっていく中で色々なところにちりばめるように心がけています。

また、内部の人たちが関わり続けたい、受け入れ続けたいと思えるかどうかもやはり同じで、外の人と一緒に何か活動する中での、やって楽しかったよねという成功体験、その積み重ねが重要だと思っており、それをすごく意識しながら、実際にプログラムを進めることを心がけています。

指出／ありがとうございます。具体的な話でもとても参考になります。では島田さんどうですか。

島田／私の場合、現在事業をされる方を呼び込むという点で外部の人を意識して話しますと、私たちは事業に持続性のある人々を輩出していきたいと思っているので、少し矛盾しますが、この地でずっと商売をして欲しいというよりも、事

パネルディスカッション「ウェルビーイング先進地域 ～多様な人材が創るこれからの地域社会～」

業として継続性を持ってやってくればこの地を離れてもらってもいいと思っています。

まずは持続性を持ってもらえるよう地域としてのサポート、伴走を考えているという側面があり、また、私たちの地域としての持続性という意味では、そうした事業に持続性のある人の輩出が流動的に起きて走り続けることが必要だと思っています。そのため、その人のプレイヤーとしての役割や、その人にとっての持続とは何なのかということを考えながら、やはり外部の人、事業者が地域に来て一番不安なのはやはり孤独感というところなので、そこをサポートして、まずは続けてもらうことを意識して活動しています。

指出／その孤独感を解消するために具体的なコミュニケーションとしてはどんなことをやっておられますか。

島田／少し昭和な話になりますが、飲み会をして日頃のストレスを発散してもらうなど、商売以外のプライベートな時間を共有し、一緒に話すことを重要視しています。

指出／ワークライフバランスというよりワークライフミックスみたいな感じですかね、きっと。では藤田さんお願いします。

藤田／私は仕事上、地域おこし協力隊の皆さんの相談やアドバイス事業も行っているのですが、その側面から少しお話しします。

地域おこし協力隊の悩みとして、自分のミッションが何だか分からないという人が実は結構います。タイムカードを押して決められた時間に出勤するも、何をしたいかわからず右往左往。地域の人からは「何のために来たのか」とも言われてしまう。少なからず地域おこし協力隊員は地域に貢献したい、まちづくりのお手伝いをしたいと志願されてきたと思いますが、先ほどの孤独感にも繋がりますが、地域に受け入れられていないという思いが募ると3年間の任期を続けることがすごく難しいという話をよく聞きました。

一方で、受け入れられている実感があると表情も活動の仕方も変わっていきます。次男の場合、移住直後から飲み会に誘っていただいたり、お惣菜を持ってきて下さったり、父代わりです、母代わりですとってくださる方が周りにいて、温かく居心地が良いところで安心して働いていたようでした。今は卒業して移住コーディネーターをやっているのですが、去年には地区の祭りの総代に入れていただき、それは嬉しそうな声で電話してきました。「総代に入れた。だから僕は祭りの時期は絶対どこにも行けない。千葉には帰りません。」と。地域の皆さんとの心の信頼関係がしっかり築ければ、外から

来た人も根づいていくのかなと思います。

先ほどお話しした寄居の若者会議の卒業生の1人は、南伊奈で地域の教育関係の活性化のお手伝いをしており、そこで結婚して地域の皆さんに結婚式を挙げてもらいました。

何よりも地域の皆さんが興味を持ち関心を寄せ、ちょっとのおせっかいをしていただくことが、外部人材が地域に根ざした持続可能な活動を行う上で大きな力になるのではないかなと思っています。

指出／素敵なお話をありがとうございます。では佐藤さんお願いします。

佐藤／ちょっとのおせっかい、すごくありがたいと常々思っています。玄関を開けると大根や栗が置いてあったりと大事にしてもらってありがたいなと思っています。

少し話は変わりますが、イベントを運営していて感じるのは、運営する世代がその世代を呼ぶということです。立山Craftは子育て世代やお子様がとても多く来場されているのが全国のクラフトフェアの中でも特徴的なのですが、これは運営する世代が私も含め子育て世代だからだと感じています。高齢の方が開催するイベントには、やはり年齢層が高い方が来場され、行政の運営されるイベントにはやはり行政の方が多く参加されます。

これは地域運営も一緒だと思っていて、地域に若者や女性、移住者を取り込みたい、来て欲しいという思いがあるのであれば、ぜひ運営側も若者や女性や移住者を話し合いの場に呼んで欲しいなと思っています。それが活性化に繋がる大事な要素だと思います。

指出／ありがとうございます。実はこのあと聞きたいと思っていたことにリンクしたコメントをいただけてうれしい限りです。

僕は2008年にNPO法人ETICの方にお声がけいただいて、地域若者チャレンジ大賞という表彰の審査員とメンターをずっと務めさせてもらっていたのですが、その当時まちづくりとか地域づくりをやっている、格好いい若い皆さんが20代の半ばから30代前半でした。その皆さんが、まさに今お話があったように、佐藤さんのようにライフステージが変化して若い子育て世代の皆さんになられていて、30代40代の方にシフトしていきました。

今一番まちづくりや地域づくりで活躍しているのは30代40代で、島田さんが言われたように、30代40代は両方の視点からまちを作っていくことができる力や若いセンスがあって、一番良い世代だと思います。

こうした30代や40代が各地に現れた結果、ローカルイノ

バージョンと言われるものがかなり広がったと思います。おしゃれなカフェがこれだけできる時代を2008年に想定できていませんでした。

一方、ここに経年の課題もあります。30代40代の時は全然良いと思うのですが、例えば1998年にNPO法が成立してからかなり時間が経っており、当時は若者だった70代ぐらいの方がNPOの現役のリーダーだということも珍しくなく、そうしたNPOから、世代がそのまま持ち上がり、最近新しい人たちが入ってこなくて、実際に呼び込んでなかなか来てくれないという相談をよく受けます。

ここで4名の方にぜひお聞きしたいと思います。

世代をずらしていく、その地域に新しい、若い世代が入っていくためにどのような活動をするか。また、自分たちが中心の世代からさらにオフセットして、世代を下げるためにどうしたらいいでしょうか。少し難しい質問ですが、ぜひ果敢に教えてください。

金子さんからお願いします。

金子／新潟でも同じような状況がたくさんありますが、上の世代の方が頑張っていてやってこられた活動をそのまま引き継ぐ、代替わりすること自体あまり考えない方が良い気がしています。若い人たちがやりたいのであれば若い人たちがやりたい団体を作ることが必要なのかなと思います。

また、新潟のいろんな人の顔を具体的に思い浮かべるとするのは、年配の方、ベテランの方の中に若者に理解を示してくれる方がいらっやると非常にスムーズに移行できます。それこそ先ほど表彰を受けた山古志村さんはまさにそうですが、若い人は若い人の団体で、それをベテランの人たちがしっかりサポートしてくれているという形が理想かなと思います。

一方、そうではないところも少なからずあり、そういう団体ではその世代の間に入って防波堤になる役割の人も必要なのかなと思います。

指出／ありがとうございます。大変参考になりました。藤田さんいかがですか。

藤田／まちづくりの文脈は一本ではないので、その地域ごとにいろんな年代によるいろんな形の関わり方があると思います。

3年前から総務省の地域力創造アドバイザーを拝命しており、茨城県の過疎地域である利根町に入らせていただいています。高齢化率が42.5%となり、子育て世代が少なく、小中学校はそれぞれ一校という地域です。

個人商店も減少していく中で、町が考えたのは、起業塾など

人材育成事業を実施するとともに空き店舗を活用したチャレンジショップを用意すること。希望者はここで修行し、契約期間終了後は利根町で出店を目指すことを条件に公募したところ、現在2人の方が挑戦しています。

現在の出店者は元看護師の子育てママ。地域に乳幼児やママがゆっくりできる場所がないので、乳幼児とママさんがリラックスできるカフェを創りたい!と開業されました。

当初は「利根町でそんなカフェを開いても、お客さんは来ないよ」といわれていましたが、蓋を開けてみると20km、30km車を走らせてお客さんが来られます。ハイハイしかできない赤ちゃんのために板の間でゆっくりできるスペースを用意し、PRスペースを設置し、利根町の見どころや特産品など、帰りに立ち寄っていただけるお店の紹介などもしています。

また、先ほど佐藤さんがおっしゃられたように、同じ年代の人から「このお店でヨガ教室をやらせて」など、この場を借りて〇〇をしたい!という声も集まっているようです。

今の時代はSNS等を活用した情報発信ができるので、足元に若者がいなくても大丈夫。

地域活性化の担い手として手を上げる人がいましたら、ぜひ活躍できる場をご提供いただければと思います。

また、年齢を重ね活動がしんどくなられた方には、若い世代が生き生きと活躍できるよう、サポートをしていただければいいなと思います。

指出／チャレンジショップいいですね。ありがとうございます。では佐藤さんお願いします。

佐藤／若い世代が提案する新しい視点、アイデアを信頼して任せてあげる。その後押しをしてあげる。そして若い人たちに小さな成功体験をつかさせてあげて欲しいなと思います。

指出／立山Craftはまさにその象徴のような感じで広がっているようにお見受けします。では島田さんいかがですか。

島田／これは僕たちも本当に大きなテーマだと思っていつも議論しています。明確な答えは正直ないのですが、私たちが気を付けているのは、弱音を吐かない、ネガティブなことを言わないということで、そういった雰囲気をつくり出して、まちの人たちにそれを感じてもらえるように心がけています。

私たちが今やっている団体もいち早く次の世代へバトンタッチして、私たちの団体から次の世代の団体に渡していくという、そういう手離れを早くしていく流れを作りたいなと思っていますが、自分に置き換えたときに、じゃあ10代からまちの

パネルディスカッション「ウェルビーイング先進地域 ～多様な人材が創るこれからの地域社会～」

ことを考えられたかという、やっぱり厳しいです。

30、40代になって初めて自分がどうあるべきかみたいなことを考えるので、そこへ来るまでは楽しい環境があるよということを示しつつ、然るべきときにまちと向き合ってくれる流れを作っていけたらいいなと思っています。

実際どんな現象が今起きているかという、呼び込んだ5名は大体同じようなコミュニティの中で活動しているのですが、実は募集した時に私たちは面接して選考させてもらっていて、年齢制限も設けていました。

年齢制限を設けたのは年齢が高いと文化の源泉になりにくいので若い人に来てもらいたいという理由だったのですが、そうすると、若い人たちのコミュニティができ始め、自分たちで商店街を作ってそこでお祭りみたいなことをやろうという話になっています。

先ほどの話ではないですが、自分たちの子供に代替わりするという発想ではなく、若い人たちがやりたい団体を作る、そんな形でやっていくと、おのずと若い人たちのコミュニティが生まれていくのかなと思います。

地域の子供達の人数はかなり少ないので、彼らだけにその地域を背負わせるというのはやっぱり重いですし、僕たちもそんなことを言われたこともないので、そういったことは自分でまちの中で感じ取っていつてもらって、使命を持ってやってもらう流れを体現していくことが今僕たちのできるのかなと思ひ活動しています。

指出／ありがとうございます。議論が止まらない雰囲気になりつつありますが、そろそろまとめに入らないといけない時間になりました。

宮口先生が過疎地域という場所は美しい自然の中の営みであり、都市にない価値を持つと仰ってくださっていたのが、僕の中でとても心強く感じました。

過疎地域の魅力といえぱいっぱいあると思うのですが、今回のテーマはウェルビーイングです。ウェルビーイングというのは、身体的にも社会的にも精神的にも良い状態にあることのように訳されがちなのですが、一言で言うと幸せである時間がいかに長く続くかみたいなことだと思います。

僕は意識してご機嫌な状態と訳していますが、過疎地域がご機嫌な状態にいるためにはどうなっていけばよいのか。その辺りを一言ずつ、4名の皆さんにいただけたらと思います。では藤田さんから行きましょうか。お願いします。



藤田／ご機嫌な状態、すごくいい言葉だと思います。ウェルビーイングという、はてなと思ってしまう人もいますが、私が私自身でいられる場所、私がご機嫌でいられる場所＝過疎地域だったら頑張らなくていいのではと感じます。

一方で、この村ではこれを守ってもらわなきゃいけないとか、この条件をのんでくれないと困るなど、移住者にくぎを刺し、すったもんだがあったというニュースを聞いたことがあります。ご当地の皆さんもウェルビーイング、すなわち私が私であるご機嫌な状態で迎えていただくことが必要ですね。

そして、みんなが今ある資源を大切に、地域の暮らしを楽しむ。楽しんでウキウキワクワクしている様子を多くの人に発信していく。それがすごく大事なのかなと。

ウェルビーイング、とても素敵だと思います。ぜひそうなったらいいですね。

指出／ありがとうございます。では金子さんいかがですか。

金子／やはり地域のそこに暮らす人たちが自分の地域に、人それぞれで良いと思うのですが、誇りを持てる地域であることがご機嫌な状態なのかなと思います。そして、外から来た人にもこの地域ってこうなんだよと前向きに伝えられることが重要だと思います。

もちろん楽しいだけでなく辛い厳しい局面もいっぱいあります。例えば、新潟県内のある市町村でアンケートとったのですが、高校生でまちを出たい、卒業後に出たいという人が95%ぐらいいて、そのうち3分の2がもう戻って来たくないと回答しました。その数字が多いのか、割合が高いのかという問題もありますが、実はその親の世代にとったアンケートを見ると、病院がない、店がない、不便しかないといったネガティブな意見ばかりしか出てきません。そういう親の元で子供が育てば子どもの結果も当然そうなります。

もちろん厳しい局面があることも事実ではあるので、うちの

まちにはこういう良いところもあるよね、と少し発想を切り替えることが必要だと思います。それができると地域に誇りが持てたり、こういう大変なところもあるけど、こういう楽しいこともあるよ、と思えたりするのかなと思います。そして、そうしたことをちゃんとと言える地域がご機嫌な地域なのかなと感じます。

指出／ありがとうございます。視点を変える大事さをご指摘いただきました。では島田さんお願いします。

島田／地域がご機嫌な状態ということで、小さな幸せになりますが、私たちの地域は7000人ちょっとのまちということもあり、挨拶を交わせるまちであることが非常に気持ち良いなと思っています。子供たちやお年寄りとおはようございます」「こんにちは」とか「ご機嫌どうですか」と言い合える仲がある場所というのは非常に居心地が良いといえますか、幸せだなと感じる部分があります。

明日分科会で見ていただくのですが、グリーンスローモビリティ（※時速20km未満で公道を走ることができる電動車を活用した小さな移動サービス）が実証実験でまちなかを走っています。乗っている人が子供たちと挨拶を交わせるぐらいゆっくりしたスピードなのですが、そこで子供たちが登校時歩いていたりすると、「こんにちは」と言ってくれて、これに対して挨拶ができていいね、とおじいちゃんおばあちゃん達が言われているとお聞きして、自分自身もそうですが、そういったコミュニティがあるというところが、私は地域としては居心地がいい場所かなと思っています。

また、個人的には、自分のやりたいことに挑戦できる、自己実現できるという地域が幸せなのかなとも思っています。

指出／ありがとうございます。では佐藤さんお願いします。

佐藤／島田さんのご意見と少し近いのですが、人との繋がりが一番ウェルビーイングを感じるうえで大事なかなと思っています。

移住の視点でも、やっぱりおいしい食べ物があっても、美しい景色があっても、それよりも人との出会いが何よりも心が動きます。

皆さん富山県のウェルビーイングの指標がお花になっているのをご存知でしょうか。

地域に根を張って、家族や友達の繋がりの中で芽が出て葉っぱが茂って、その上で自分らしさや生きがいの花が咲くという、ご機嫌な自分が実現されるというのが富山県の指標にもなっています。やっぱり地域との繋がりが、それが大事かなと思います。

指出／富山県の素敵な例えをありがとうございます。佐藤さんがお話されたようにその土地があるから花が咲くということを見ると、過疎地域にはその豊かな土地、土があるのだろうなと思いました。

長きにわたって4人の皆さんとトークセッションを行ってきまして、この後質問の時間も取りたいと思いますが、1回まとめに入りたいと思います。

過疎地域という言葉で括ってしまうと、いろいろな視点が現れると思いますが、一言で言うと今の都会の若者たちは過疎地域にゾクコンです。めちゃめちゃ好きです。

もう大好きでたまらない、どこに行ったら良いかわからない、指出さん地名を教えてよ、という感じです。ですからどんどん過疎地域に引っ張って行ってください。

なぜそこに惹かれるのか、それは富山の中山間地域をはじめ、自分が知らない世界がそれだけあって、自分が伸び伸びとできるところがあるからなんですよ。

それを気づかせてくれるもう一つのステップ、ラストワンマイルみたいなものを僕たちはもっと作らないといけなかなと思いました。

今日のテーマの中では「外部人材」がキーワードになりましたが、地域が幸せになっていくためには地域の皆さんのモチベーションが上がることも大事ですし、そのモチベーションが上がるためには鏡効果として外からやってくる人たちが必要だということについて、たくさん議論がなされたのではないかなと思います。

いずれにしても、内発的な発展という言葉が示すように、自分たちのまちのことを、地域のことを誇りに思って、面白がって、もうすぐいい場所だよ、ということをおんなが声を出して伝え合うことで理解が広がっていくのかなと思います。

ウェルビーイングとハッピーというのは両方とも幸せを指す言葉ですが、微妙に違ってきます。ハッピーを短期的な幸せと言われている。一方ウェルビーイングは中長期的な幸せと言われている。

さっき佐藤さんが仰ってくださったような、一晩のうちに花を咲かすわけではなく、種から芽が出てそれが成長して花を咲かせるということは、まさに中長期的な幸せですよ。過疎地域のウェルビーイングの幸せというのは、きっとこの中長期の幸せを外から来る人と中の人がお互いに糸のように絡み合いながらできていくといいのかなと思いました。

ここで一度トークセッションの方は終わりにしたいと思います。10分間確保しましたので、聞きたいこと、質問したいこと、感想などあったらぜひ、マイクを持っていきますので挙手していただけますでしょうか。

パネルディスカッション「ウェルビーイング先進地域 ～多様な人材が創るこれからの地域社会～」

参加者／藤田さんにお伺いしたいのですが、一連のお話の中で「地域の人には大したことがない風景であっても、よそから見た場合には大変違って見える。地元の方には無関心ということを克服して、関心を持つようになってもらいたい。」と仰っておられたように、最終的に大切なのは、地元の人々がその地域に対する誇りと愛着を持つということであり、そこが過疎問題を考え、過疎地域が豊かな少数社会となるための一番根本でもあると思っております。

そのために藤田さんや他の方も悪戦苦闘されてきていると思うのですが、その中で、地域の方々に誇りや愛着を醸成する、あるいは再確認してもらうために、こういうやり方、あるいは仕組みというものが一番効果的じゃないかなとお感じになっておられれば、教えていただければと思います。

またもう1点、地元のそうした取り組みに対し、特に地元の市町村と一緒にやってこういうことをしてくれればいいのに、あるいは後方支援してくれれば良いのに、と感ずることがあるとすればそれはどういう点か、という二点をお伺いしたいと思っております。

藤田／実は自分のまちを好きじゃないという人より、心の中では好き、あるいは自慢に思っている人の方が多いように思います。でも皆さん、なぜか奥ゆかしくて言えないのです。

それなら堂々とまち自慢ができるよう、まずは「私のお気に入り」を発信できるツールを、ということではじめたのがまち歩きMAPプロジェクトでした。

もちろん、表現方法はマップに限らず、かわら版のような小さな情報紙でもいいでしょう。まず思いを「手に取れる形」にすることが大切です。

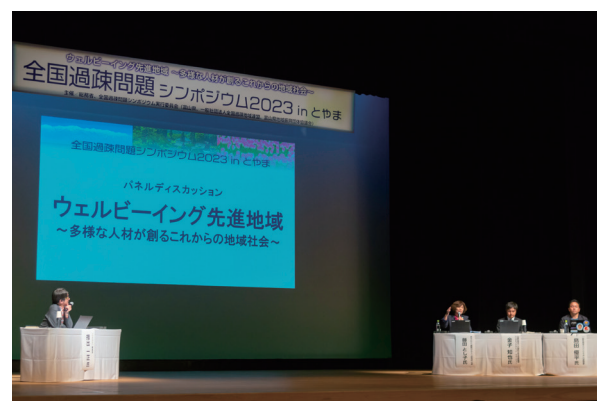
行政や支援機関の皆さんにお願いしたいのは、それを実行するために必要な印刷費の支援や、会議室など活動の場を提供していただけると助かります。あとは市民に任せていただいで…。

また最初の質問に戻りますが、「このまちには何もなし」とおっしゃる人がいるならば、その方にガイド役をお願いし、即席のまち歩きツアーに出かけてみてはいかがでしょうか。おそらくガイドさんは張り切って、「今は〇〇だけど、昔は〇〇だった」とか「あそこの店主はむちゃくちゃ面白い!」「この和菓子店は創業100年以上、すごいでしょ」など、地元ならではのとおきの話をしてくれるはず。そして、同行した人たちも知らず知らずのうちに、改めてまちの魅力を再発見することができるでしょう。

MAPづくりもまち歩きツアーも地味ではありますが、まちに対する誇りと愛着を醸成するにはうってつけの活動です。協力してくれる人が3人いれば、すぐにできると思いますよ。そこから少しずつ共感の輪が広がり、やがて「このまち大好

き」な人たちが集い、まちの元気づくりにつながっていくと思います。

指出／お答えありがとうございました。ちょうど時間になりましたので、ここでパネルディスカッションは終わりにしたいと思います。藤田さん金子さん島田さん佐藤さんありがとうございました。



次期開催県挨拶



安藤 明範 氏

山梨県総務部次長

皆さま、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、山梨県の安藤と申します。次期開催県を代表いたしまして一言ご挨拶を申し上げます。皆さま大変お疲れのところかと思いますが、もう少しだけお時間をいただきたいと思っております。

本日はここ富山県におきまして、「全国過疎問題シンポジウム2023 in とやま」がこのように多くの参加者のもと盛大に開催されましたことをお慶び申し上げますとともに、この素晴らしいシンポジウムに参加させていただいたことに感謝申し上げます。

先程、基調講演をいただきました宮口先生、そしてパネルディスカッションからは、示唆に富む大変意義深いお話を伺うことができました。

開催に当たりご尽力をいただきました総務省の皆さま、富山県の皆さま、関係者の皆さま、そして本日も登壇いただいた先生方に心から感謝を申し上げたいと思っております。

来年のシンポジウムは、私ども山梨県でお引き受けをさせていただきますが、今年はこの富山県の大会のように、素晴らしいものとなるよう準備を進めて参りたいと思っております。

ここで少し山梨県のご紹介をさせていただきます。山梨県は日本列島のほぼ中央に位置し、富士山、八ヶ岳、南アルプスなどの山々に囲まれた海のない内陸県でございます。県土の約78%を森林が占め、豊富な水と太陽の恵みが育んださまざまな農作物、ワインやジュエリー、絹織物など優れた県産品が「やまなしブランド」として、国内外で認知されております。

特に、皆様もご承知のとおり、その神秘的な魅力により日本人の心の拠り所として愛される「富士山」は、

平成25年6月に世界文化遺産に登録され、世界的な価値が認められています。

また、山梨県はフルーツ王国やまなしとも呼ばれておりまして、多くの果物が作られており、特に「ぶどう」「もも」「すもも」は日本一の生産量を誇り、シーズンには多くの人々が山梨のフルーツを楽しむために訪れております。そして、現在建設が進められておりますリニア中央新幹線が開業した暁には、東京から約25分でお越しいただけることとなります。

そうした山梨県におきましても、急速なペースで進む少子化により人口が加速度的に減少しており、総人口が約43年ぶりに80万人を下回るなど、まさに危機的な状況になっております。この人口減少という問題に対しまして、本年6月に全国初となる「人口減少危機突破宣言」を行うとともに、7月には、県内市町村・企業・団体の皆さまと「人口減少危機突破共同宣言」を行い、オール山梨の体制構築に向けた基礎的な環境整備を図る中で、将来世代を含めた県民一人ひとりが豊かさを実感できるやまなしの実現に向けまして、取り組みを加速しているところでございます。

来年山梨県で開催いたします全国過疎問題シンポジウムにぜひ多くの皆さまにおいでいただきまして、山梨県の歴史や文化、食なども堪能していただければと思います。

来年はぜひ山梨県へお越しください。お待ちしております。どうもありがとうございました。





第1分科会

朝日町

あさひコミュニティホール アゼリア

過疎地域持続的発展優良事例発表会

【コーディネーター】宮口 侗迪 氏 (早稲田大学名誉教授)

【発表者】総務大臣賞及び全国過疎地域連盟会長賞受賞団体

スペシャルトークセッション

「富山県朝日町発、日本の幸せづくり ～一人ひとりが住みたい場所に住み続けるために～」

藤野 英人 氏

(一社) みらいまちラボ合同代表、
レオス・キャピタルワークス株式会社
代表取締役会長兼社長 CEO&CIO



畠山 洋平 氏

朝日町次世代パブリック
マネジメントアドバイザー、
(株) 博報堂

過疎地域持続的発展優良事例発表会

コーディネーター

宮口 侗迪 氏

早稲田大学名誉教授

1946年富山県富山市 (旧細入村) 生まれ。

東京大学地理学科同大学院博士課程にて社会地理学を専攻し早稲田大学に勤務、1985年教授、その後教育・総合科学学術院長を歴任。2017年名誉教授。国土審議会専門委員、大学設置審議会専門委員、自治大学校講師、富山県景観審議会会長、富山市都市計画審議会会長を歴任、2021年3月まで総務省過疎問題懇談会座長として、新しい過疎法の制定に尽力、地方の発展のあり方について発言を続ける。1985年から富山市在住。『過疎に打ち克つー先進的な少数社会をめざしてー』(原書房) ほか著書多数。



過疎地域持続的発展優良事例発表団体 (発表順)

- | | |
|-------------|---------------------------|
| 全国過疎地域連盟会長賞 | 特定非営利活動法人 本と温泉 [兵庫県豊岡市] |
| | 家賀再生プロジェクト [徳島県つるぎ町] |
| | 昭和村 [福島県昭和村] |
| 総務大臣賞 | 朝日町MaaS実証実験推進協議会 [富山県朝日町] |

歓迎挨拶



笹原 靖直 氏

朝日町長

おはようございます。「全国過疎問題シンポジウム2023inとやま」分科会の開催にあたり、開催地を代表し、一言ご挨拶を申し上げます。

本日はご来賓をはじめ、全国各地から多くの皆様方に朝日町にお越しいただき、心から歓迎を申し上げます。また関係者の皆様におかれましては、平素から過疎地域の振興のため、格別のご尽力とご高配を賜っておりますことに深く感謝申し上げます。

朝日町は、富山県の東端、新潟県との県境に位置しており、海拔0mのヒスイ海岸から標高3,000m級の朝日岳・白馬岳など北アルプスの山々を有する、ダイナミックなパノラマが広がる自然豊かな町であります。人口は約1万人で、65歳以上の高齢者が45%を超えており、多くの地域が共通する少子高齢化、人口減少が喫緊の課題となっております。町としましては、豊かな自然から生まれる恵みや地域に根づく共助・共創の精神を町政推進の中心にすえ、子どもから高齢者までがいつまでも朝日町に暮らし続けたいと思える住みよい街を目指し、各種政策に取り組んでおります。昨今は、保育所から中学校まで連携した「朝日町型保小中一貫教育」やふるさと朝日町に誇りと愛着を持ち続けてもらうための「ふるさと教育」の充実、また高齢者の交通の利便性を高める共助・共創型交通サービスとして、本日事例発表の「ノッカルあさひまち」があります。その他、住民がより便利で豊かな生活がおくれるよう、デジタル技術やマイナンバーカードを活用した新たな住民サービスの創出にも取り組んでおり、持続可能な地域社会の実現を目指しているところであります。

本日の本分科会は、午前中は2部制となっております。第

1部は優良事例発表としまして、今年度の優良事例表彰団体である、特定非営利活動法人本と温泉様、家賀(けか)再生プロジェクト様、福島県昭和村様、朝日町MaaS実証実験推進協議会の4団体による事例発表が行われます。第2部では本会場オリジナルの内容として、レオス・キャピタルワークス株式会社代表取締役会長兼社長CEO&CIOであり、地域創生や起業家育成を目的として富山県朝日町をベースに、古民家の再生とふるさとの魅力発信を通じて地方再生に貢献されており、そうした取組を通じて富山県、そして日本を元気にすることを目的に活動しておられる「みらいまちラボ」合同代表で、現在、朝日町特命戦略推進監でもあります藤野英人様と、新しい行政スタイルとして官民連携を推進する当町におきまして、朝日町次世代パブリックマネジメントアドバイザーとしてご協力いただいております株式会社博報堂の畠山洋平様によるスペシャルトークセッションを予定しております。

また、午後からの現地視察では、朝日町の名物であるたら汁に舌鼓いただくとともに、日本の渚百選にもなっておりますヒスイ海岸が見えるヒスイテラスや、今年の7月に移転オープンしました「ふるさと美術館」を視察いただきます。また美術館内で、朝日町が官民連携を進めておりますDX取組事例の紹介などもさせていただきますこととしております。この機会に朝日町の魅力を体感していただければ幸いです。

最後になりますが、本日御参加の皆様のご今後益々の御活躍、御発展をご祈念いたしまして、歓迎の挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

第1分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

宮口／おはようございます。昨日に引き続きまして2日目ということで、楽しく有意義な会にしていきたいと思います。昨日も申し上げましたが、私は長年この表彰の委員長を務め、こうした分科会でも司会を続けてきましたが、今年でやめさせていただくこととなります。

これが最後の仕事となり多少感慨深いものがありますが、和やかに皆さんと進めさせていただきしたいと思います。それでは早速発表を始めていただきたいと思います。

今日は4団体に来ていただいています。まずは「特定非営利活動法人本と温泉」、それから「家賀再生プロジェクト」、「福島県昭和村」、ご当地である「朝日町MaaS実証実験推進協議会」の順番で発表をしていただきます。発表いただいた後、それぞれ質問を受け、最後にはさらなる質問、議論の時間を取りたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは早速「特定非営利活動法人本と温泉」から発表いただきます。よろしくお願いいたします。

特定非営利活動法人 本と温泉

【兵庫県豊岡市】

大将／おはようございます。兵庫県豊岡市城崎温泉の「特定非営利活動法人本と温泉」の理事を務める大将伸介と申します。今日はよろしくお願いいたします。

それでは「地産地読～100年読み継がれる本を作る～」ということでお話させていただきます。私達のまち城崎温泉は、兵庫県の北部、豊岡市の中にある温泉です。豊岡市は面積が約700km²、人口が8万人弱で、その中にある温泉地になります。年間約100万のお客様が越しになっています。城崎温泉は、まちの中心に大瀬川が流れており、その周りに七つの外湯が点在しております。そこをお客様は浴衣に下駄姿でそぞろ歩きをしながら、温泉情緒を楽しんでもらう仕組みになっております。

このことを「城崎温泉はまち全体が一つの宿」と表現させていただいており、駅が玄関、通りが廊下、旅館が一つ一つの客室で、外湯が大浴場、商店が売店で、城崎に住む者は皆同じ旅館の従業員であるという共存共栄の精神で、今まで約1300年続いている温泉地となります。そんなまちの中に、旅館の経営者の二世、跡取りの集まりである「城崎温泉旅館経営研究会」、通称「二世会」という団体があり、通常はおお客様の誘客ですとか、いろんな形でまちづくりを行っております。そして今から10年前の2013年が、城崎温泉として最もご恩のある作家である志賀直哉さんが城崎温泉に来て100周年という機会を捉え、城崎温泉には「歴史と文学といで湯のまち」という枕詞があることから、もう一度その文学というものでまちづくりを作り直そうと始めたプロジェクトがこの

「本と温泉」という活動になります。

城崎のまちの中で生まれたアイデアで本を作り、それを見に来てもらうということを城崎の新しい魅力として伝えたいと思い、今まで活動しております。2013年の活動開始以来、これまで4作品を創っております。まず1作品目が、『城の崎にて』『注釈・城の崎にて』になります。まずは志賀直哉が城崎に来られたことを記念した事業でしたので、『城の崎にて』を本として作り直しました。ただ、100年前の本なので、東京で怪我を負った志賀直哉は、なぜわざわざ城崎温泉に来たのかですとか、どういう心境で城崎に滞在していたのか、ということが本を読んだだけでは分かりにくいということで、注釈本をつけ、2冊セットでお客様に提供することにしました。少し小さい本になるのですが、これは浴衣の袖にちょうど入るサイズに作ってありまして、この本を読みながらまち歩きをしていただき、志賀直哉が見た世界と被せながら、このまちを楽しんでいただければという思いで一冊目を作りました。

2作品目は『城崎裁判』です。万城目学さんに書いていただいたのですが、この装丁は外側がタオル地、中の紙は濡れても破れず、すぐ乾く素材でできています。ですので、これを持ったままお風呂に入っていただき、お風呂の中で本を読んでもいただくような体験ができるようになっています。

3作品目が湊かなえさんに書いていただきました『城崎へかえる』です。子供の頃、城崎温泉に来て蟹を食べた、という作者の思い出をつづった本になります。作中に蟹を食べるとい印象的な表現があるので、この本自体も蟹の殻から身をむくようなつくりになっています。表面も少しざらっとしており、蟹の殻をイメージしています。

最後がtupera tuperaさんに創っていただいた『城崎ユノマトペ』です。先ほどもお伝えしましたが、城崎温泉は浴衣に下駄姿でまち歩きをするということで、下駄の音や人のざわつきが温泉街の魅力となっているので、いわゆるオノマトペです。ね、「カラカラ」とか「ガタガタ」というオノマトペを少しもじりまして、『城崎ユノマトペ』ということで、温泉街の音をこの中に書き込んでいただいております。

こうしてこれまで4作品を創っており、城崎温泉の中でしか売らないという形をとっております。いずれも独特な装丁で本屋の棚には並べられませんが、城崎のお土産屋さんとかで売ってもらう分には問題ないということで、今まで10年間で約7万部、販売総額としましては約1億円を町の中で売っています。普通のお土産屋さんや外湯、文芸館など城崎に関わりあるまちの中の店であればどこでも売っていただいても良いですが、まちの外では売らないということで「地産地読」、このまちの中で生まれてこのまちの中で買って読んでいただくということを我々の思いとして作っております。また、

作っていただいた作家さんとの縁を活かし、定期的に城崎に集まっていたきまして、作っていく過程や本の魅力を子供たちや城崎に来られるお客様に伝えていただくとともに、この町を本で表現するというをどうやって考えておられるのか、ということを積極的にPRしていただいています。

また我々「本と温泉」としましては、本だけではなく、城崎温泉をどう見ていただけるかということも伝えたいという思いがあります。今年はちょうど設立10周年ということもあり、アーティストとしての建築家も、城崎を見て、どう感じて物を作るかという部類の一つに入るということで、城崎温泉の旅館を手がけている設計士の方に集まいただき、「建築と温泉」というテーマで、それぞれの宿を作るときに、どんな表現で城崎を見てそれぞれの旅館を表現されているのか、というトークセッションを実施しました。今年は写真家の川内倫子さんに来ていただき、写真を使った新しい本をこれから作る予定です。

我々「本と温泉」が、なぜ特定非営利活動法人という形でこの城崎のまちづくりに関わっているか、関わっていかねばならないと思ったかといいますと、二つの責任、思いがあります。

まず、作家さんにこうして城崎に来て本を作っていたくうえで、必ずこの本は城崎で売り続ける、絶版させないという作家さんに対する責任です。忙しい先生方に対し、この小さなまちだけでしか売らない、売り続けるという思いを我々の覚悟として、特定非営利活動法人を作りました。

もう一つは、1300年続いてきた城崎温泉ですが、やはり少子高齢化で子供たちが少なくなって跡取りがいなくなっているという現実があります。そうした状況の中、我々は先人から受け継いだものを次の世代に残さなければいけないという責任、思いがあります。

豊岡市では過疎や少子高齢化が進む中、突き抜けた価値を生み出す「小さな世界都市」を目指し、演劇のまちづくりを進めており、城崎にある城崎国際アートセンターには演劇制作のために世界中から人が集まり、このまちで創ったものを持って世界に飛び立っていただいております。そして我々も同じように、城崎で何かができている、何かが創られているということをお子たちに伝えていきたいなと思っています。同じものを見ていても演劇の方と作家さんでは全く違う捉え方をしている、ここからものを生み出していることを身近に感じられることで、田舎でつまらないと思っていたまちが実は何か作り出せるまちなのではないかと思ってもらえるのではないかと。そしてそれが子供たちがいつか城崎に帰ってくることに繋がるのではないかと、という思いで我々はこの活動を続けています。この思いがどれだけ伝わるかは分かりませんが、大人の責任として我々はこの活動をこれからも続けて

いき、そしてそれがまちのためにもなると考えています。以上となります。ありがとうございました。

宮口／どうもありがとうございました。これまでに本を4冊作られており、販売は城崎の中だけですが、それで合計7万部売れているというのはたいしたものだと思います。今後またどなたかに書いていただける見通しはあるのでしょうか。

大将／今年は川内倫子さんという写真家に写真を撮っていただき、英語版の「城の崎にて」を創ろうと思っています。また、来年はいしいしんじさんという方に本を創ってもらおうと思っています。

宮口／質問はありますでしょうか。

参加者／改めまして今回は表彰おめでとうございます。城崎の中でしか本を売らないということで、なかなか全国的に知名度が上がりにくい性質を持っていると思うのですが、今回表彰を受けられ、今後出版数を増やされていく中、外に向けた発信やPRIに関して工夫されていることや、今後こうしたいということがあればお聞かせください。

大将／我々が発信するのはなかなか難しいのですが、城崎に来てこの本を買えたということをお客様自身に発信していただくことがやはり一番かなと思うので、我々が何か訴えるよりも、良かったという声があることが大事なのではないかなと思っています。また、購入は城崎の中でしかできませんが、作家の先生には本を作るたびに何十冊もお渡ししています。そうすると作家の先生も、城崎でこんなものを作っているということをお名刺代わりに渡して伝えていただけるので、そこでいい関係ができていっているのかなと思っています。



宮口／ありがとうございます。他に質問はありますか。

参加者／城崎温泉には元々たくさんのお客様が来られているのではないかと思います。そこにあって今、文学によるまちづくりをされているというのは、観光面においてどんな影響、効果を期待されているのでしょうか。それともう一点、演劇と文学というものが内面的にどのように、例えば子供たちがどのように育っているかとか、影響を与えていると考えられるのでしょうか。

大将／1点目について、城崎は蟹で有名で、関西では年に一度蟹を食べに行くところだと言われていることもあり、客足には波があります。やはり11月から3月の蟹のシーズンはお客様が多いですが、一方で4月から10月のオフシーズンは少なくなります。波があるとやはり個々の経営も雇用の部分が安定しないので、年間で一定したお客様に来てもらえることで、固定した人材を確保していくということにも繋がると思います。

これまでもインバウンドの受け入れ等によりこの差を縮めようとしてきましたが、蟹だけではなく、こうした本だとかいろんな魅力をつけることによって城崎に来ていただきたいと考えています。そうしたことの積み上げが、やはり我々経営する側からすると、年間を通じての安定した収入となり、子供たちにもまた帰ってきてここで商売をしたいなと思ってもらえることに繋がるといいなと考えています。

2点目、演劇や文学についてですが、先ほどお話ししたように城崎は演劇のまちで、毎年数十カ国の方が演劇制作のために城崎に来ていただいています。その方たちに対し、城崎温泉は住民であれば120円で入ることができるのですが、外湯も住民と同じ料金で入っていいですよ、ということにしています。すると、まちの外湯で住民とアーティストが一緒にお風呂に入るという状況が生まれ、「昨日作品を見たよ」などと言える関係性が育まれています。

また、演劇はたくさん作品があり、全くわからないものを見る機会もあります。そうしてこれって何なのだろうということに触れることで、城崎の中にもこれって何なのだろうということがたくさんあるということに気づいてもらえると思います。

これはネタバレになってしまうのですが、『城崎裁判』の中で、たまたまお風呂の中にあつた灯籠を作者の万城目さんはイモリに見立てて、そのイモリが100年前に志賀直哉に殺され亡霊となって出てきていると書かれているように、同じものを見ていても全く別の解釈があって、そこから新しいネタを作って新しい見方ができる、ということが本を読むと分かっ

てきます。子供たちにとって、これからは生きていく上で決まったことをしていけばいい時代ではなく、創造的にもの考えないと変化についていけないと思いますので、常にそういった創造的なことが起こっているまちであり続けられるよう豊岡市も考えていますし、我々もそれに一緒についていきたいなと、こうした取り組みをさせていただいています。

宮口／ありがとうございました。もう一人いきましようか。

参加者／豊岡市には先日研修会で邪魔させていただき、元市長の方の講演を聞かせていただきました。「豊岡が世界へ飛び立つための四つのエンジン」ということでお話しいただき、ジェンダーギャップの解消や、多様性を認め合えるようまちとしてアートを取り入れているということをお聞かせいただきました。実際この「本と温泉」という活動を通じて、アートであれば小学校とか中学校に入っているというお話を元市長の方から教えていただいたのですが、子供たちが本に触れる機会が増えたのかどうか、本にどれぐらい興味を持って、読書している方がどれぐらい増えたのかということがデータとしてあるのであればお聞かせいただきたいです。

大将／残念ながらデータはありませんが、作品を作るたびに城崎の子供たち全員に配っています。それから、関連する本も寄贈させていただいているほか、先ほどお話ししたようにイベントを開催しています。特に『城崎ユノマトペ』を書いていたいたtupera tuperaさんは子供にすごく人気の作家さんで、ご本人もパンダに変装したりと本の中のことを表現されることがすごく得意な作家さんですので、城崎に足を何度も運んでいただいて読み聞かせをしていただいたりだとか、城崎の外湯をtupera tuperaさんの作品であるパンダ銭湯に作り替え、子供たちに入ってもらおうということもさせてもらっています。

本に触れる機会を我々はどう作っていくのか、その結果どうなったのかまではまだ検証できていませんが、場をどうやって作っていくのかということが我々の活動としては大事ななと思っています。

宮口／ありがとうございました。この表彰でさらに世間に活動が伝わるといいですね。それでは続きまして、徳島県つるぎ町の「家賀再生プロジェクト」です。お願いします。

第1分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

家賀再生プロジェクト
[徳島県つるぎ町]

枋谷／皆さんおはようございます。徳島県から参りました「家賀再生プロジェクト」代表の枋谷京子と申します。よろしくお願いたします。

この度、名誉ある全国過疎地域連盟会長賞を受賞し、このうえない気持ちでいっぱいです。それでは今から説明させていただきます。

私たちが活動する家賀集落は四国の徳島県西部、美馬郡つるぎ町貞光にあります。つるぎ町には徳島市や鳴門市からは車で約1時間、家賀集落はつるぎ町役場から車で20分程度の場所にあります。家賀集落は剣山系で最大規模を誇る、標高100mから600mに位置する傾斜地集落です。かつては家賀百軒百姓と呼ばれ、1963年には89軒、517人の人が住んでいましたが、過疎化が進み、現在は43軒、64人まで人口が減少しています。

また、家賀集落には古代に阿波国やつるぎ町を拓いたとされる忌部(いんべ)氏の史跡が多く残っており、かつては「忌部神社」の神領であったそうです。また、つるぎ町をはじめ、徳島県西部美馬市、東みよし町、三好市の二市二町は「にし阿波の傾斜地農耕システム」として、2018年3月に国連食糧農業機関の世界農業遺産に認定されました。また、農水省の「食と農の景勝地」にも指定されており、続いて、私がこの傾斜地に藍を植えるようになったきっかけをお話します。家賀再生プロジェクトは、私の息子の恩師で、にし阿波地域を世界農業遺産へ認定する際に御尽力された、現在鳴門渦潮高校教諭の方から「剣山系や家賀集落の再興のために藍を植えてみたらどうか」とアドバイスされたことに始まります。ただ私は農業の経験がなかったので、地域の人々に聞きながら、また、その先生が所属する一般社団法人「忌部文化研究所」の力を借り、藍を栽培することにしました。

かつてつるぎ町の山間部では、たばことともに藍がたくさん栽培されていたそうです。それをもう一度復活させようとしたのです。また、家賀集落は私の亡き夫が心から愛していたふるさとでもあり、荒れていく家賀集落を藍で絶対再生させたいという思いがありました。

これが私の藍の畑です。栽培にあたっては、環境面、健康面から考え、世界農業遺産に認定されている、カヤや落葉の有機物を使用する、昔ながらの自然循環の伝統農耕で取り組むことにしました。標高500メートル地点、まさに前例のない「ソラの藍」の栽培の挑戦が始まりました。藍栽培は大変ですが、いくつかのメリットがあります。1つ目が、世界農業遺産「にし阿波の傾斜地農耕システム」のブランド認証を受けることができるということで、これがにし阿波のブランドマー

クになります。

2つ目に、化学肥料や農薬を使用しないので、土壌を痛めず、環境にも優しく、医療や食材として使用することができます。私はこの食材としての藍に着目しました。3つ目は、獣害が少ないことです。藍はイノシシとかシカに食べられることはありません。だから柵をする必要もありません。最後に、家賀集落はV字型渓谷にあるため、上昇気流と霧の効果で水をやらなくても栽培でき、とても合理的な農業です。

続きまして、農作業の様子を見ていただきます。これはヒトリビキという農具を使い、昔ながらの傾斜地畑に等高線に沿って畝を作る作業です。このように機械を使わず、人が畑を耕し、栽培しています。

次は秋になるとカヤ場で肥料となるカヤを刈り取る作業です。まさに持続可能な、サステナブルな農業です。今月末には50名の方に参加いただき、カヤ刈りをする予定です。そして、家賀の新たな戦略として、カヤ刈りを「サスティナビリティ体験観光」として大々的に宣伝して打ち出していこうと思っております。

これはカヤを刈った後、伝統農耕のシンボルとなるコエグロを作っているところです。コエグロはカヤを刈り取り束にして、乾燥させて畑にすき込むことで肥料などになります。カヤ場は春になると山菜や薬草の宝庫になります。イタドリ、蕨、ゼンマイ、ふきのとうがたくさん生えてきます。

これは藍の苗を植えている定植作業の光景です。これは畝にカヤと落葉を敷き詰めた藍畑を撮影したものです。カヤは微生物のマンションになると言われるほどたくさん微生物を集めます。徳島大学で家賀のこの藍の畑の土を持って帰って調べてもらったところ、「こんなにたくさんの微生物がバランスよく育っている畑は珍しい。」また、「畑はどうしても酸性になるため石灰を撒いたりして中性にしなければいけないのに、ちゃんとPHが整っていて素晴らしい畑だ」と言われました。これもカヤと落葉のおかげかなと思っております。

これは藍の刈り取りの作業で、手刈りしていきます。

そして、先ほどもお伝えしたように、私が着目したのは食べる藍で、藍を刈り取り後に洗い、乾燥後このような粉にします。この粉が色んな形で商品化されています。これは有名な半田素麺で、そこに藍の粉を入れてできたのがこの藍そうめんです。抗酸化作用や血糖値を下げる効果もあるということで、すごく注目されています。

これは藍団子です。つるぎ町の和菓子業者と連携し、団子に藍の粉を混ぜて商品化しました。

また、つるぎ町の特産である柚子に味噌と藍の粉をまぜて「ゆずり藍」という商品ができました。

次はビールです。隣町的美馬市の若手経営者がクラフトビールを製造する会社を作り、藍の粉を混ぜていただき、家賀藍

ビールができました。ラベルは家賀の集落の全景写真を貼っております。これもすごく好評です。

そして藍の粉が海外まで噂を呼びまして、シンガポールのFOSSAというチョコレート会社で使用され、藍のチョコレートができました。このチョコレートは逆輸入され、東京や大阪の百貨店、デパートで販売されております。

次は藍晩茶です。近くの上勝町の阿波晩茶が有名ですが、その晩茶と私の藍の粉がコラボして、新商品である藍晩茶ができました。このようにたくさんの商品ができ、徳島新聞にも取り上げられるなど、マスコミの力もあり皆さんに知ってもらえることができつつあります。

藍といえば“染める”をイメージしますよね。私は食べる藍だけでなく、藍で染めることもしております。これは私の藍の畑で生葉染めをしたものです。葉っぱを取ってすぐにジュースで砕き、汁を絞って染めるのですが、この写真のみんなが持ってるハンカチのようにすごい綺麗な色に染まります。注目を浴びるようになるにつれ、家賀集落ってどこ、藍の畑ってどこ、という方がたくさんいらっしゃるようになり、ボランティアで看板の設置も行いました。

家賀には案内ガイドさんもおります。説明しているのはボランティアガイドをしている方なのですが、これはイギリスから雑誌社の方5名が来ていただいたときに、その方は英語が堪能ですので、英語で紹介している様子です。

これは農福の連携で、「若年性認知症とその家族の会」と一緒にやっています。月に一度草取りに来てくれたり、落ち葉拾いしてくれたりしているのですが、たくさん土にさわること、症状がすごく良くなった方もおられるなど、楽しく遠足みたいな感じで、皆さん手伝いに来てくれております。

これは家賀集落の山を挟んだ向こう側の吉良集落ですが、この集落の方も藍を植えてみたいということで、私の種から植えて今すごく広がっております。

このように、ここの藍は染める藍として使っていますが、私が始めたことをきっかけに地域に藍の栽培も広がっております。徳島大学、地元つるぎ町高校、町役場と連携した「まちづくりファクトリー」では、コエグロ作り意見交換が行われました。また、県外からの企業研修など、週2回～3回いろんなツアーの受け入れもしております。

これは家賀の藍を徳島の小中高の教育活動に使って欲しいということで、鳴門渦潮高校で生葉染めをしたときの様子です。

藍栽培に加え、私は昔ながらの伝統を復活させたいと考えており、春の豊穰祈願祭の際にはこうした箱回しと三番叟の方に来ていただきました。また、秋には豊穰感謝祭を行いました。これは家賀集落の氏神様である児宮神社に能楽師の先生が来られ、鼓を打っている様子です。そしてこれは地元

に木綿麻太鼓をやっている団体があり、その方が能楽師の先生と一緒に児宮神社で演奏してくれた様子です。このように様々な伝統をこれからも伝えていきたいと思っています。これは観光パンフレットです。先ほどご説明した忌部文化研究所の先生が、家賀とかその周辺の見どころを集めた「日本の桃源郷 木綿麻の里 inつるぎ町」というパンフレットを作成していただき、家賀に来られた方や地元の観光施設、興味のある方に配布し、大人気となっております。

今年5月に広島でG7が行われましたよね。その時、ヒルトンホテルが会場の一つとなりました。このとき一階に飾ってあったアートは、藍デザインコンクリートを手掛ける方によって家賀の藍をコンクリートで染めていただいたものになります。

写真に「SAWA FARM」とありますが、5月には世界農業遺産であるこの土地にもものすごく興味を持っていただいた県内外の企業3社が農園を作ることになりました。徳島県でお弁当を作っている「株式会社さわ」さんは野菜を植えられています。そして「ANAあきんど株式会社」、「エスビー食品株式会社」さんはハーブを私と一緒に伝統農業で栽培しています。これは私が徳島県で「徳島集落再生表彰優秀賞」を受賞したときの様子です。

また、現在家賀集落では関東、関西の中高生の修学旅行の受け入れをしております。じゃがいもを掘ったり玉ねぎを抜いたりしてもらい、そしてその野菜をすぐに調理し食べてもらいます。すると都会の子供はおいしいといっておパクパク野菜を食べてくれます。そうした農業体験を中心に、修学旅行生の受け入れをしております。

私には長年、家賀に宿泊施設を作りたいという夢があり、忌部文化研究所の方とともにプロジェクトを進めてきましたが、このたび建設することが決定しました。来年の4月に開業できる予定です。住民の方をはじめ皆さんにも、これまではお墓参りに行きたいけど家がない、家が古くて泊まれないとなっていたが、これからはそこに泊まり、そしてお墓参りができるとすごく喜んでいただいております。

皆さん。家賀再生プロジェクトは新たな展開へと進んでいきます。ぜひ家賀の藍畑に来てください。そして宿泊施設に泊まり自然を満喫していただきたいと思っております。

最後に、今まで一緒に頑張ってくれたプロジェクトの仲間、私に家賀で藍を植えるきっかけをくださった先生、そしていつも見守っていただいている忌部文化研究所の方々には本当に感謝の気持ちでいっぱい입니다。ありがとうございました。

宮口／ありがとうございました。会場から何か質問はありますか。

第1分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

参加者／素晴らしい発表をありがとうございました。いくつか質問させてください。修学旅行生を受け入れるにあたり宿泊施設がまだないということで、現在はホームステイか何かで受け入れているということでしょうか。また、まちのどこなところに修学旅行生をご案内して、どんな体験をさせてもらえるのかということをお尋ねしたいと思います。

枋谷／「一般社団法人そらの郷」という団体が、山の各家庭に生徒を4、5人ずつ紹介し、民家で受け入れてもらっていますが、今後宿泊施設ができればそこの泊まってもらい、畑でじゃがいも掘りといった農業体験や、昔ながらの料理の提供を行う予定です。現在こうした体験がすごく人気で、春と秋で7000人、経済効果1億という素晴らしい取り組みとなっております。私たちもそのお手伝いさせていただいています。

参加者／ありがとうございます。各家庭で4、5人ずつを受け入れ、全部で何人ぐらいの規模までであれば修学旅行は受け入れられますか。

枋谷／東京からですと、バスで400人来ます。この場合、世界農業遺産になった2市2町の地域で登録している何百軒に協力していただく必要があります。各家庭4人ぐらいを車で送迎していただいております。現在登録いただいている家庭の数がすごく増えています。またこの受け入れにより、山で農業している以上の収入を得ることができそうです。

宮口／家賀のエリアを超えるような、地域全体への大きいお客さんもおられるということですね。

枋谷／そこを期待して宿泊施設を造っています。

宮口／行事などができていましたが、訪ねてくる人と地元の人との付き合いはいつもあるのですか。

枋谷／やっぱり地元の方に教えてもらったり、手伝ってもらったりしないと初めての人は農作業はできませんので。

宮口／地元の方は農業はやらないのですか。

枋谷／お年寄りの人が多く、足が痛い、腰が痛いということで農作業ができない方がほとんどです。

宮口／どうもありがとうございました。それでは続きまして、福島県昭和村さんに発表していただきます。

昭和村 [福島県昭和村]

永戸／皆さんおはようございます。福島県昭和村から参りました、産業建設課長の永戸と申します。よろしくお願ひします。発表は「昭和かすみ草『百年産地』を目指して」というテーマにさせていただきました。

昭和村は、福島県西部に位置する周知を山々に囲まれた特別豪雪地帯でございます。

人口が1,129人、高齢化率57.13%、大変高齢者が多い印象を受けられると思いますが、昭和村の高齢者はとても元気でございます。我々の職員は高齢者から常にパワーをもらっているような、そんな元気な高齢者が多いところでございます。最高積雪は2mに達しまして、耕地は標高400mから750m、一番高い集落は900m近いところに点在している村でございます。また、昼夜の寒暖差が大きく、夏季の平均気温が22度と比較的過ごしやすい高地であり、この気象条件が功を奏しまして、かすみ草の栽培に大変適した場所となっております。それから、本州で唯一、伝統織物の上布の原料となる「からむし」を栽培しております。

これがからむし織です。からむしという草から糸を作って、その糸を織ったもので、国の伝統工芸品に指定されております。

昭和村でのかすみ草栽培は昭和58年に始まりました。そして昭和63年には、それまで主だった葉たばこ栽培や稲作から、かすみ草への転換が拡大しました。

平成15年にはかすみ草サミットを開催し、それまでかすみ草の産地として有名だった熊本県や和歌山県の方々をお呼びしました。平成17年には豪雪地帯の雪を利用して、その雪を倉庫の中に貯め、その雪の冷気で花を保存する昭和村農林水産物集出荷貯蔵施設、雪室と呼ばれる施設を作っております。この施設では大型ダンブ300台分の雪を利用しており、その冷気でほぼ一年持っているような状況です。この他にも、村内の中学生を対象に、花を生産している農家さんとともに、教育の一環として「花育」を実施しております。

令和元年には「昭和かすみ草振興協議会」ということで、昭和村のみならず近隣の3町村を加え、合計4町村で振興協議会を設立しました。令和4年にかすみ草の販売額は6億円を突破し、今年度はGI(地理的表示保護制度)の登録を7月10日に受けたところです。

このGIの登録ですが、花の部門では全国で二例目ということで、大変名誉なことだと思っております。

かすみ草の生産状況ですが、先ほどの4町村の合計で、約26.3ha、昭和村だけだと18haでございます。生産者数が88戸、村内では60戸の農家さんがかすみ草の栽培に関わ

ておられます。また、平成16年から令和4年までに21戸が新規就農されており、今年度も5戸の新規就農を予定しております。今年度の販売額については、先週の時点で約6億3000万円となっております。

かすみ草のブランド力の強化による生産振興、それから消費の拡大ということで、雪の活用が挙げられます。それまではどうしても厄介者だった雪が、雪室という形で生産を支えている原動力となっており、村としても大変喜んでおります。また、この雪がかすみ草の品質確保とブランド力向上に役立っているということで、放っておけば溶けてなくなってしまうものも、それぞれが知恵を出し合い、倉庫の中で確保することで、こうした資材になっているという新しい発見もありました。

かすみ草農家については、移住定住を契機とした新規就農者の確保、これが村の最大の課題でありました。Uターンはもちろんですが、IターンUターンした方々にはまずインターシップの場として「かすみの学校」で栽培体験をしてもらい、その栽培体験をしていただいた方々に対しては、生産者や関係団体と連携した新規就農の育成ということで、「かすみの教習所」という形で学んでもらうスタイルをとっております。また、新しい方々を迎えるとともに、次世代に対する地域の誇りと愛着の醸成ということで、小中学生の農業体験授業を行い、栽培から流通に関するすべての工程を体験することで村の基幹産業であるかすみ草を学ぶ「花育」という取り組みを実施しています。

この写真は東京の大田市場の青果店で販売の挨拶をしている中学生です。

市場の始まる前に、中学生たちが挨拶すると、その日の販売価格が若干ではありますが上がるそうです。こうしたこれまでの取り組みの効果をまとめますと、まず雪室が稼働したことによる品質が向上し、昭和かすみ草というブランドの確立ができました。販売額も毎年更新している状況です。また、新規就業者の受け入れ事業として、開始以来30組42名の受け入れ、そのうち25組36名が村に残って就農を続けている状況です。直近5年間ににおいては転入超過となり、社会増に大きく貢献している事業となっております。

昭和村は本当に小さな村ですが、そんな小さな村でも自信を持って全国に出荷できるかすみ草があるということに誇りを持つ機会となりました。そして、ふるさとの愛着も醸成していると感じており、将来自分たちが生産者になるという子供たちも生まれてくることを期待しております。

これは先ほどお話しした染めたかすみ草です。かすみ草はドライフラワーにしても大変長持ちする花ですので、1年間通して楽しんでいただけます。皆さまぜひとも昭和かすみ草をお買い求めください。



参加者／かすみ草は私が大好きな花なのですが、福島県といますとやはり原発の影響等があったのではないかと思います。かすみ草の栽培には何か影響があったのでしょうか。

永戸／幸い私も昭和村は会津地方にありまして、原発の影響が全くないわけではございませんが、かすみ草は食することのない花ですので、その影響はそれほど受けませんでした。むしろ福島県を応援して下さるということで、販売数も伸びたところですよ。

宮口／新規就農者も多いわけですが、かすみ草の畑はまだ増やせるのでしょうか。

永戸／やはり高齢が進んでいるということで、田んぼをやめる農家さんがいます。そのため、その田んぼが花づくりに向いている場合とそうでない場合があり、その田んぼの選別方法が大変難しいところはありますが、まだまだ増やせる状況にあります。

宮口／その一方で辞める人もいるのでしょうか。

永戸／新しい方に受け継いで欲しいという思いで、辞められる方も中にはいらっしゃいます。

宮口／ありがとうございました。それでは最後になりましたが、ご当地朝日町のノッカーについて説明していただきたいと思っております。

第1分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

朝日町MaaS実証実験推進協議会
〔富山県朝日町〕

畠山／皆さん、こんにちは。ただいま先生からご紹介いただきました「ノッカル」について、朝日町、そして株式会社博報堂、この二つの団体が中心となってやっている取り組みについてお話をさせていただきます。今日はいろんな地方から来ていただいている方、地元朝日町の方、いろんな方がいらっしゃるかと思います。今日はいろんなお立場の方に対し、大変僣越ながら、我々が今やっている取り組みをぜひ共有させていただきたいと思っております。

昨日の宮口先生のお話を聞かれた方もいらっしゃると思いますが、宮口先生からは「過疎地域は単に困っているだけの地域ではない。美しい自然の中の人の営みは都市にない価値を持つ」、こんなお話をいただきました。今日これからお話しさせていただくのは、一つの小さなプロジェクトのほんの一部ではありますが、そのプロジェクトから、昨日の宮口先生のお言葉に通ずるような何かを共有できればと思っています。タイトルは「共助×共創による、これからの公共サービスの実現」としましたが、何のこっちゃということで、要はみんなで作っていかうよ、そして一人一人が住みたい場所に住み続けられる地域を作っていくじゃないか、ということですよ。

2019年にスタートしたプロジェクトを今日は共有させていただきますが、その前に最近私自身とても胸が詰まったことがあります。地元朝日中学の生徒会の皆さんとお話しさせていただく機会がありました。「君たちさ、日本の未来、みんなの未来ってどうなの。」と話をさせてもらったところ、「うーん、暗い。人口が減る。」と。やっぱりそういった話が、この町の中学校の生徒会からも出てきました。ただですね、もう少し話をしたところ、それって何となくそうなるから暗いよねって言うだけであって、一方で話せば話すほど目は輝いている感じがして、何となく世の中でそう言われているからそう思っている。本質的にはそうじゃないのかなと思いました。冒頭に大将さんが言うておられましたが、やっぱり僕らはそういったことを子供の世代に何となく引き継いでいくのではなくて、本当に今、一人一人が住みたい世の中、住みたい地域社会を作るにはどうしたらいいのか、そんなことを考えるべきなのではないかなと思っています。どんどん大それた方向にいますが、そこに対して現在やっていることを今日はお話させていただきます。

改めて自己紹介させていただきます。畠山洋平と申します。奈良県出身です。東京都世田谷区と、ここ富山県朝日町の両方に拠点を持っております。いわゆる多拠点生活ということを見せていただいております。逆に言いますと、今日は大

変僣越ながら、都心の顔と過疎地域の顔、私自身は両方行ったり来たりさせていただいておりますので、その視点でお話を共有させていただければと思います。

この写真を見てください。私の子供です。まさに宮口先生がおっしゃった通りですね、東京の世田谷では見せない顔をしています。家を買わせていただいて、ヒスイ海岸でヒスイ探しをして、やっぱり感じるものがあるんでしょうね。僕は何も教えてないです。ただ子供たちを連れてきているだけです。都心は都心で良さはあります。一方で、宮口先生がおっしゃった通り、過疎地域の価値とは何なのだろうかということは子供でさえ自然に感じるものがあるのではないかなと思っています。こうして二拠点生活をしながら、朝日町では「次世代パブリックマネジメントアドバイザー」という役職もいただいておりますので、まさに企業と役所、都心と過疎地域、この二つの軸を持って色々とお話を共有させていただきたいと思っております。

朝日町は人口が約1万1000人で高齢化率45%の町です。2014年に「消滅可能性都市」と言われました。ただし、そこから消えてたまるか朝日町ということで、何となくさっきの人口減少じゃないですが、この町大丈夫かと言われていることに対し、「消えてたまるか」と口だけじゃなく、いろんなことを具体的に動き出されている町です。そしてそんな町が、これから公共はみんなで作っていくじゃないかとチャレンジしている、その中の一つを今日は具体的にお話させていただきます。

ということで、今は役場の立場で申し上げましたが、企業の立場としては博報堂という会社に所属しています。「何で博報堂さんが朝日町にいるの」とよく言われます。なぜ私は家を持っているのだろうか。正直、最初から家を買って朝日町で何かをやると決めていたわけではありませんでした。冒頭、町長からご挨拶いただいたとおり、まさに縁が繋がってできた賜物です。

町に、この後のトークセッションでお話しさせていただく藤野さんが来られ、「日本、朝日町みたいなところでやっていかなきゃ。この町の資産、アセットすごくいいよね。」ということを発信されておりました。その中で、藤野さんがされていることに大変共感した当社の社員がいました。私自身は、さきほど皆さんの名簿を見させていただき、行ったことがある地域もたくさんありましたが、全国ものすごい箇所を行脚していました。そんな中、藤野さんがここはと言っていることに共感したその社員から、「朝日町にも寄ってってくださいよ」と言われ、ここ朝日町に来ることになりました。それが素直な理由になります。ただし、そんな町に対して我々としては、企業との付き合いがある方もいらっしゃると思いますが、「生活者発想」という企業の理念があります。人の生活をどう豊かにで

きるか。我々企業も変わらなきゃだめです。変わろうとします。このマッチングがあり、具体的な連携へと進ませていただいたというのが、この町との出会いになります。

こうして2019年から関わりを持たせていただいています。最初から何か大きな目標があって、という話ではなく、具体的に困っていらっしゃる、僕らが考えていること、僕らが外から来て思っていること、そんなことを少しずつ摺り合わせながら、少しずつ形を深めていきました。そしてここでも藤野さんからの大きなアドバイスがありました。目線です。少しずつ具体的にしていくのですが、目線だけは、どっちみち20年後の日本はこの朝日町ようになっていくのだから、町長も仰っていますが、朝日にいて朝日のことを考えるだけではなく、朝日が日本の世の中のお手本になっていこうじゃないかと。その目線だけは下げずに、だからといって、大きなことだけ言うのではなくて、具体的にやっけていこうよと。そうすることで、朝日町と博報堂は連携してやってきました。こうやって総務大臣賞をいただき感慨深いですが、これでも正直まだまだだと思っています。

まだまだではありませんが、ここからは地域交通「ノッカル」をどうやって作って、どんなことが学びとしてあったのか、その辺りを具体的にお話しさせていただきます。ノッカルは皆さんの市町にもあるような話です。私は奈良県出身ですが、ご近所さんの車に乗せてもらうという事はありました。地域社会、過疎地域のどこでもある話で、それをシンプルにただ形にしたいだけになります。まずは1分程度の動画がありますのでご覧ください。

～動画放映開始～

『運転免許返納数が増加し、地方在住者の多くが将来の移動手段に不安を抱えている、公共交通インフラの維持が地域の共通課題となっています。ノッカルは住民、自治体、交通事業者がみんなで作る交通サービス。マイカーを持つ人の自宅と中心部の行き来を活用します。住民ドライバーが出かけるついでに、近くに住む利用者を自分の車に乗せる。地域住民同士が助け合う仕組みです。

ドライバーが自分のお出かけ予定を登録するとノッカルに反映。利用者がサービスを使いたいときは乗りたい時間を選んで予約します。乗る場所は利用者の自宅住所から最寄りの位置に自動的に登録されています。予約当日、ドライバーは出発前にその日乗せる人と場所確認して出発。利用者は指定の時間に乗降場所へ。車が到着し、お互いが確認できたら出発。降車地点で利用者を降ろしたらドライバーはそのまま自分の目的へ向かいます。乗りたい時間に予約できなかったらバスやタクシーをご案内。万が一のときにも安心の保険付きです。ノッカルは地域の交通インフラを維持し、住みたい

ところに住み続けられるコミュニティを実現します。「気軽」「手軽」「みんな助かる」ノッカル。

～動画放映終了～

これが「ノッカル」の簡単な仕組みになります。要はご近所の思いやりを、繰り返しになりますが、形にただで、日本一温かい行政サービス、これを目指しております。ただ単にスーパー行くから誰が乗っていくか、ということだけです。ただし、これ自体も最初から決まったわけではないです。協議会を組んでみんなで話し合っ、ただ話だけではなくて、私自身もスーパーや病院ですとか、いろんなところで住民の方とお話させていただいて、いろんなご意見が出ました。

さらに当時はコロナ禍が始まった頃でしたので、実際に「人に会えないんだけど」とか、「実は出かける機会がかなり減っちゃって」といった色んなお話を聞いていく中で、地域の支え合い、コミュニティ、この辺がすごく大きな課題になっているのだなと感じ、何となくそこに答えがあるのではないかと思いました。こうして色んな方の課題、声を聞いて作ったのが「ノッカル」です。そしてここがさらにポイントなのですが、共助、共創といました。住民もそうなのですが、地元の事業者、地元のタクシー会社とも一緒にやっております。

事業者協力型の自家用有償旅客運送は全国で第1号認定をいただいているのですが、これもそれが欲しくてやったわけではありません。当たり前ですよ。地元のタクシー会社さん、地元の事業者がこれまで地域の交通を支えてきたわけですから、その人たちと一緒にやろうじゃないかという話です。

じゃあどうやったのか。この辺はただ単に、こんなことあったらいいね、あんなことあったらいいね、だけじゃなくて、きちんと法律に則って、じゃあどうすればいいのか、どこにポイントがあるのか、何を確認しなきゃだめなのか、その辺をしっかりと設計してきました。安全安心のための講習を開かなければだめなのではないかということで、2種免許がない方には講習するですとか、そうした一つ一つを丁寧に紡ぎながらやってきました。

実際こんなものを作っても、住民の方、町民の方が使わないと意味がありません。デジタル社会と言われていますが、それだけではなく、アナログで使える部分、具体的にいいですと、バスに乗る際住民の皆さんはバス券を使っておられますのでそれをそのまま使えとか、色んなものをスムーズに、馴染むように、どうできるかということを考えながらやってきました。具体的な仕組みについては以上のとおりなのですが、これからの公共づくりの大きなポイントが2つあります。一つは、コストです。結局どんなにいいものであっても最初にドンと作っては持続しないのではないかと思っています。

第1分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

ですので、この「ノッカル」を作る際は、できる限りありものを使う、余計なものを作らないという前提で進めました。そして我々のような外部企業が、これとこれならこう使って、と僭越ながら編集させていただきました。これはなかなか町の中だけではできないのではないかなと思います。

一方、外部企業だけでもできません。なので、両者が一緒になってありものをできる限り運営していく。例えば「ノッカル」が生まれた原点はバス3台、タクシー10台、車8,000台の社会です。そこにまた新しいモビリティを作って、それがどうなるか分からないという負担を抱えるのではなく、今ある車が役に立ってほしいじゃないか、そんな話です。さらに住民目線に立った時には、新しい「ノッカル」モビリティができた、そんな話ではなく、バスと同じような時刻表の形にすれば使いやすいのではないかと、とにかくコストがかからないように、ありものを活用しようという話です。

そしてこれはコストオペレーションの話だけではなく、住民の皆さんの気持ちも同じです。誰かのためにやってあげてもいいよという、そんな地域にある、過疎地域には絶対あると思います、そういう人の気持ち、それを使っていこうじゃないかという話です。こうした人の気持ちは、過疎地域であっても何かきっかけがないと中々共有しづらい世の中になりだしているのではないかなと思います。そのため、そのきっかけを作ることができれば、こうして「だったらやってあげるよ」という気持ちが形となって現れるのではないかなと思います。

これまで事業を行ってきている中で、事故はなく、運転技術に対する不満もありません。何より現在1運行200円でやっていただいておりますが、要は人のために、ご近所さんのために何かやってあげるよということまでできています。そのため、料金を少し上げてもらえないかといった話は出てきていません。新しいことを新しい人が勝手にやったのではなく、地域にあるアセット、地域にあるものを使って新しい公共交通を作った、新しいことを地域にあるもの、地域の皆さんの気持ち、地域の皆さんとともに作った、それが「ノッカル」になります。

地域交通「ノッカル」から始めた、地域交通の目指すべき方向の一つはこういうことではないかなと思ったのがこの図になります。共助共創、みんなで助け合おうという概念はみんなが共感できると思うのですが、公共サービスは、正直誰かの負担に偏り過ぎています。今日お話しされた皆さんはすごく思いを持ってまちづくりをされている方だと思いますが、そういう思いを持った誰か1人がいる、では続きません。やっぱりみんなでどうやっていくかというのが公共サービスではポイントになってくるのではないかなと思っています。今どうでしょう、本当に一人一人、都市なんかもそうですが、自己責任の時代になってしまっていると思います。誰も守ってくれな

い。企業に入ってもそうです。終身雇用なんてないですし、給料がどうなるか分からない。明日も分からない。そんな今までと全く違う、そうなると思うと全部自分で何とかしなきゃダメなんだ、という世界になっていると思います。それだからここの公共サービスはみんなでやる唯一最大のチャンスだと思います。みんなで助け合うという機会を失っていくと、日本の社会構造上も、宮口先生がお話されていた視点に立った時にも、どうなんだろうと思ってしまいます。

最後になりますが、改めて昨日の宮口先生のお話で締めたいと思います。「過疎地域が豊かな少数社会に置き換わることが、国への最大の貢献。」まさに今日お話ししたお互い様、おせっかい、これはどこの地域にもあると思いますが、こうしたみんなで助け合う豊かな気持ちを作っていく、そんな少数社会が今の日本に必要なだと思います。朝日町はこのまま突き進んでいきます。そして、過疎地域から皆さんとともに、これからの国の未来に貢献できればと思っています。以上です。ありがとうございました。

宮口／話がずいぶん広がりましたね。「ノッカル」のことがちゃんと伝わりましたでしょうか。それでは質問がある方はいらっしゃいますか。

参加者／僕が目指す地域公共交通、地元の移動支援に関してはこれが理想像だと思っています。その中で自分自身すごく悩んでいる部分があって質問させていただきます。お話の中でもあった、みんなで共有しながら地域をつくっていくという考え方が非常に大切だと思っていて、私自身も移動支援タウンミーティングや、みんなで議会とって予算を先に皆さんにご説明した中で皆さんどのように考えているのか、みんなで予算を考えていこうよ、という取り組みをしているのですが、どうしても自分事にできない方が多く、参加者数がどうしても少なくなってしまいます。実際この「ノッカル」というシステムにどれくらいの方が登録していて、自分事になかなか踏み込みにくい方々をどのように取り込んでいったのか。何か工夫しているところがあれば教えていただきたいと思っています。よろしく願います。

畠山／確かに仰るとおり地域の方が自分事になっているかどうかという話はよく出るのですが、みんな自分事としてやってきましょうよと言われてたところで結構難しいと思います。自分に置き換えて考えてもそう思うので、無理のない範囲できっかけを作ることが重要だと思います。「ノッカル」だけで地域交通をすべて賄う必要はないので、そうしているんな機会をつくり、それを紡いでいくことができれば、その結果として、まちづくりに参加しているなと感じられる、そんなことでいい

んじゃないかなと思っています。一方で、そのきっかけをちゃんと見える化することも必要です。議論するだけでなく、小さくてもいいので、少しずつ実態があれば、この町もまだ全然スタートしたばかりですが、色んな公共サービスを同じ考え方で動かし始めているので、結果それがどんどん繋がっていき、最終的にみんなでやっている状態になるんじゃないかなと思っています。

宮口／ありがとうございます。ほかにございますか。

参加者／公共サービスや移動サービスはいろんな自治体でいろんな政策をやっていて、そこにかなりの税金がつき込まれています。それにも関わらず、使う人はものすごく便利に使うけれども、何か使いづらい、自分の行きたい時間に行けない、スマホを使うことがネックになって使えないといった声もたくさんあり、使わない人にはどんな説明をしても中々そのハードルを乗り越えることができない、という状況が多く起きていると思います。そうした場合に、自分が今日行きたいということではなく、明日のこの予定に組み込みましょうということなどをどのように話をしていくと使ってもらえるようになるのか。結局使ってもらえない人にはどんなサービスをしてもらえないのですが、その辺りの気持ちのほぐし方とございますか、アプローチの仕方というのは何か考えられていますか。

畠山／まず前提としてすぐに結果が出るものではないと思っているので、粘り強さというのがまずは前提になります。さらに粘り強くやる時に二つポイントがあって、一つは新しい公共交通サービスが何かすべてを変えるわけではないので、地域の中でもいろんな新しい、ユニークな取り組み、交通でもいろんな事例あると思うのですが、地域にある交通全体をどう見るかという点で考え、全体の中での運営をしっかりやっていくことだと思います。バス、タクシー、ノッカル、いろんな手段がある前提で共同運営していく。だからこそ、バスで使っている紙チケットが「ノッカル」でそのまま使えるというアイデアが実現できました。このように全部を繋げ、オペレーションは住民側もやっていく。それがじわじわ広がって、最終的にデジタル化に繋がるよう設計していくしかないと思っています。「ノッカル」には結果的にまだ紙媒体や電話もありますが、その電話も利用してもらえないからといって単に設置するのではなく、タクシー事業者のオペレーターの方にそのまま、業務のついでにやってもらうことで、そこにアナログのコストがかかっていません。とにかく全部を俯瞰で見ながら、できるものから実行しつつ、急にこっぴどいという話を指し示すのではなく、本当に粘り強く、ゆっくりやるしかないと思います。ただ、

そうしていけば、いずれいろんなものが繋がっていく、間違いなくそうなっていくと思っています。単一のサービス、もので語らない方がいいのではないかなと思っています。

参加者／ありがとうございます。もう1点あるのですが、粘り強くと言われたことについて、誰が誰にアプローチしていくのか。人と人とのコミュニケーションじゃないですが、こんなサービスがありますよ、使ってみませんかというのは、誰がアプローチされているのでしょうか。

畠山／それはうちの社員もですが、役場職員もそうですし、地域おこし協力隊の方もそうです。とにかくいろんな立場の人たちがやりました。ただ、一つポイントは、行政だけがやっていくとなかなか、「あんたらやってくれよ」ということになると思います。やはり小さな町だと行政がいろんなものを背負っているのです。一方でそこが僕らだけでももちろん「お前ら何がしたいんだ」という話になります。いろんなやり方があると思うのですが、やはりまずは色んなところへみんなで話しに行かないと進みませんし、話す人もいろんな人が行くしかないんじゃないかなと思います。そしてそれが今後に関がっていくと信じて、今もやっているという状況です。

参加者／先日熊本県の荒尾市のおもやい (OMOYAI) タクシーという、AIデマンド交通を視察させていただいたのですが、スマホのアプリが使われておりました。しかし、実際使われているのは電話が9割で、スマホアプリは1割ということでした。ただ、私のまちと大きく違うのが、市内にショッピングモールもあるし、病院もあるし、荒尾市から出なくても大丈夫というところでした。私の町が抱えている問題は、町内には病院やショッピングモールがなく、隣町に行かなければ何もできないというところで、役場には広域協定を結んで、隣町に行かせて欲しいという声が大きいです。そのハードルがなかなか超えられないというところがあります。今日のお話を聞いていると、例えば地域通貨という考え方もあって、お礼を地域通貨でやるとか、あるいは除雪作業をしてくれたらそのお礼も地域通貨でする感じなのかなと思います。本当に基本の基本、お互いで助け合うという一番大事なところをここはされているのだなということが伝わってきました。他の市町村からの旅行者も使える交通体系なのでしょうか。

畠山／今は使えないです。使えないです。まさにいろんな国の話もありますが、旅行者と生活交通というのは全く競合が違うと思っています。大都市と地方でも違いますし、旅行者と生活交通というのは全く種別が違うので、現在は生活交通ということでやっています。

第1分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

宮口／今日は「特定非営利活動法人本と温泉」による本を通じたまちづくり、「家賀再生プロジェクト」による小さいグループの藍による集落再生、「昭和村」による村をあげてのかすみ草栽培、「朝日町MaaS実証実験推進協議会」による空白地域での交通手段である「ノッカル」について発表していただきました。

最後の発表は「ノッカル」についてやや分かりづらい部分がありましたが、大事なことはバスの通らない、バス停から遠い人が近くのドライバーに「病院へ連れて行ってね」とかそういうことでしょうか。ひとつ聞きたかったのが、日本で初めて交通事業者を巻き込んだ地域交通ということで、日本で初めてということは行政のハードルがあったと思いますが、その辺はどういったやり取りがあったのでしょうか。

畠山／国交省による事業者協力型の自家用有償旅客運送の第一号となりましたが、元々そこを目指していたわけではなく、やるべきことを紡いだ結果そうになりました。

国交省本省ともかなり具体的なやりとりがありました。例えばドライバーさんのアルコールチェックをどのようにするのか。細かい文言でいいますと、ルール上遠隔点呼ができるのかどうなのかという問題について、一つ一つ条文を読んでいき、いかに利用しやすく、かつ法律を遵守しつつという部分で、具体的にはどういった形が可能なのかという踏み込んだ話を国交省本省並びに運輸支局と行いました。

結果的に一緒になってルールを作ることとなり、まさに第一号、最初の生みの苦しみを国交省、運輸支局とともに経験しました。

宮口／バス会社やタクシー会社と一緒に議論する機会はあったのでしょうか。

畠山／何度も議論しました。何よりもまずタクシー会社さんがこれまでの地域交通を支えられてきていますので、何度も通い、実際の運行の実態をお伺いしました。そして実態を聞いていきますと、実はタクシー会社さんからしても、この地域の人は全然使わない、この距離では全然タクシーを使わないといったことがあり、そうした話も大きなヒントになりました。やはり地元の事業者さんがこれまでの交通については熟知されていますので、そうした話もヒントとしながら、一緒にどうやって町の移動全体を守るのかという共通の目標を掲げて進めました。

宮口／どうもありがとう。全体のやりとりを聞いて、会場からは質問ありませんか。

参加者／先ほど質問があったようにいろんな先進地でそれぞれ取り組まれていると思うのですが、僕自身感じることで、どこかの地域で実践されていることを自分の地域に置き換えてもうまくいったことがほとんどなく、やはり持ち帰っても自分たちで考えなければいけないと思っています。そこで、皆さんは自分たちはゼロから一を作ったタイプなのか、それとも何かを参考にされて取り組まれたのかお伺いさせていただきます。

枋谷／家賀再生プロジェクトの場合、本当に初めてのことをやってきました。ちょうど世界農業遺産に認定された年だったこともあり、藍を植えてみようってということになり、真似をしていないために大変だったところもありますが、いろいろ地域の人に聞きながらやってきました。

宮口／最初は誰が誰に藍を植えてみてはというアドバイスをしたのでしょうか。

枋谷／世界農業遺産の認定に尽力された忌部文化研究所の先生から、かつて藍の栽培がおこなわれていたので、もう一度再興できないかというお話がありました。

宮口／今グループは何人で活動されているのですか。

枋谷／家賀再生プロジェクトのグループ自体は10名ですが、素晴らしい地域、活動だといろんな方に参加していただいています。今度のカヤ刈りも50人集まってくれたいということと、サステナブル戦略や自然農法に興味のある方が集まってくれている状態になりつつあります。

永戸／先ほども少し申し上げましたが、かすみ草の栽培でいいますと一軒の農家さんから始まっています。その取り組みが昭和村の気候とマッチして、そこから広がっていきました。そういう意味では、葉たばこからの転換期が一つのきっかけになっているかと思います。

畠山／私たちの取り組みですと、当然世界や日本で起きているMaaSの事例については一生懸命勉強しました。一方、それを勉強しつつも、実際作っているものでいうと、昔からある「誰か乗せていってあげるよ」という話を形にただけです。何かこう真新しい話ではなくて、大局的に起こっていることを学び、そこでの課題を把握しつつ、具体的にやっていることは元々ある日本の助け合いを形にただけになります。

そのため、実はこのノッカルみたいな話は他の地区、例えば

富山県の高岡市ですとか他の市町村でも始まっているところですよ。

参加者／あと一点お願いします。こうしたことをやっていこうとすると、どうしてもできない方向にばかり言ってくる人がいて、例えばここがダメ、ここはダメじゃないかとばかり言ってきて、やるという方向に踏み出せないパターンも多いかと思うのですが、そういったところをどのように乗り越えられたのか教えてください。

永戸／私たちの村でもやはり稲作農家さんの中には「かすみ草にばかりなせ村は力を入れるのか」と言われる方もおられます。しかし、やはり百年産地を目指していくことをコンセプトにしているので、先ほどお話もあったように、粘り強く発信していくことが大事ななと思っております。

畠山／コロナ初期にやっていたので、人の車はダメじゃないのかという話がありました。ただ、本当に困っていらっしゃる方がいらっしゃるの、もう動き出さない限りは難しいということで進めていきました。あともう一つ、これこそ官民連携の話かなと思っていて、官の力学と民の力学は全然違うのですが、そこが一緒になってどうできるのかと、ここはリスクあるよねという話をしたり行ったりきたりしながらやるということ自体が、できない理由を探すのではなくて、どうできるのかという方向に向かえたということではないかなと思ってます。

宮口／よろしいでしょうか。時間がきておりますのでまとめの発言とさせていただきます。

今日は四つの団体より発表がありました。それぞれ違うタイプということで、それぞれについてコメントさせていただきます。

まずは「特定非営利活動法人本と温泉」ですが、城崎温泉をテーマにした本をすでに4冊書いていただいております、非常にユニークなアイデアで、そこまで世間には聞こえていませんが、結果的にはかなりの数が売れているということで、できれば名の通った人を書いてもらえないかとかですね、難しいかもしれませんが、年に1冊ぐらいを目標に今後も活動いただければ話題にもなるのではないかと思います。城崎温泉には私も夏に視察で行かせていただきましたが、浴衣で歩く人が多く、温泉の街並みは日本でも一二を争う雰囲気があります。いい温泉街だと思います。ぜひ今後の展開に期待したいと思っております。

次に「家賀再生プロジェクト」ですが、外から見ていてこのまま荒れるのはもったいないと感じた人たちがグループを作っ

て藍栽培を始められました。ただ藍栽培だけではそこまで収入がないということで、今は働きながら余力をもって栽培をしておられる方が多いということです。今後は藍栽培で生計を立てていこうという方が出てくるといいなと思います。

あとはあまり地元のパワーが感じられない、そういう難しいところで頑張っておられますが、これからは地域の人でリターンして頑張ろうという人が出てくるような展開になっていくといいなと思います。

私もお邪魔したことがあります、すごい斜面でうまく作れば美しい畑になります。

そして「昭和村」は村をあげてかすみ草を栽培し、それからからむしという植物を使った大変手間のかかる織物を作られており、かつてはその織姫を募集し、結構定住されておられるということで、こちらでも過去に表彰したことがあります。山の中の村ではありますが、一つのものに注力して世の中に売り出すという方法で頑張っておられ、そして新しく就農する方も新たに獲得されているということで、村としての意欲や世の中へのアピールがかなり上手くいっている結果ではないかと思っています。量的な限界はあるかと思いますが、頑張っていたきたいと思います。

それから最後の「朝日町MaaS実証実験推進協議会」のノックカルについては、バス停から遠い人が近くのドライバーに病院やスーパーといった目的地まで乗せて行ってもらうと。そうなる就先ほど質問がありました、欲が出て隣の町まで行けないかとなりますが、そういうことは考えない方がいいですね。今できる、今必要なことをきちんとやると。これは大事なことで、朝日町がきちんとやっておられます。交通関係では事業者の権利を守るため様々な規制があり、町のバスを走らせるのも中々難しいのですが、その部分についてうまくタクシー、バス事業者を巻き込んで制度、システムを作ったということに大きな価値があります。このまま継続していただければいいなと思います。

以上4つの団体の皆さんに発表いただきました。今回受賞された皆さんにはぜひこれを励みに、ますますパワーアップしてがんばっていただければと思います。どうもありがとうございました。

第1分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会



スペシャルトークセッション 「富山県朝日町発、日本の幸せづくり ～一人ひとりが住み

登壇者

藤野 英人 氏

(一社) みらいまちラボ合同代表、
レオス・キャピタルワークス株式会社 代表取締役会長兼社長 CEO&CIO

1966年富山県生まれ。1990年早稲田大学法学部卒業、野村投資顧問入社。96年よりジャーデンフレミング投信・投資顧問(現JPモルガン・アセット・マネジメント)、2000年よりゴールドマン・サックス・アセット・マネジメントにてファンドマネジャーを歴任。特に中小型株および成長株の運用経験が長い。2003年独立し、レオス・キャピタルワークス株式会社を創業。投資教育にも注力しており、東京理科大学上席特任教授、叡啓大学客員教授、淑徳大学地域創生学部客員教授も務める。近著に『プロ投資家の先の先を読む思考法』(クロスメディア・パブリッシング)『投資家がパパとママに伝えたい たいせつなお金のはなし』(星海社新書)などがある。2020年12月に朝日町特命戦略推進監就任。



畠山 洋平 氏

朝日町次世代パブリックマネジメントアドバイザー、(株)博報堂

2003年(平成15年)4月 株式会社博報堂入社
2012年(平成24年)10月 博報堂従業員組合 委員長
2019年(平成31年)4月 第五営業局 部長
2021年(令和3年)4月 第二MDコンサルティング局 局長代理
2022年(令和4年)4月 朝日町次世代パブリックマネジメントアドバイザー就任



司会／これよりスペシャルトークセッションを始めさせていただきます。

本日は、一般社団法人みらいまちラボ合同代表で、レオス・キャピタルワークス株式会社代表取締役会長兼社長CEO&CIOの藤野英人様にお忙しい中、このトークセッションのためご来町いただいております。

藤野様は、富山県にお生まれになり、早稲田大学法学部をご卒業ののち、国内・外資大手資産運用会社でファンドマネジャーとしてご活躍され、2003年にはレオス・キャピタルワークスを創業していらっしゃいます。2018年には、ここ朝日町において古民家を購入され、その古民家を拠点として「一般社団法人みらいまちラボ」を設立。地方創生に関わる勉強会を開催されるなど「地方から日本を元気にしたい」との思いで地方の経営者や自治体の方々と連携され、地域活性化に向けた取組みに尽力されています。また、朝日町特命戦略推進監として朝日町に様々なご縁をつないでいただくとともに、多くのアドバイスをいただいております。

本日は、先の優良事例発表において、「朝日町MaaS実証実験推進協議会」の取組みについてご発表いただいた朝日町パブリックマネジメントアドバイザーで、株式会社博報堂の畠山洋平様と『富山県朝日町発、日本の幸せづくり ～一人

ひとりが住みたい場所に住み続けるために～』と題してお話をいただきます。それでは藤野様、畠山様よろしくお願いたします。

藤野／こんにちは。レオス・キャピタルワークスの藤野です。本日は富山県朝日町において、このような場でお話できることを大変光栄に思っております。

今日は畠山さんと一緒に、さらに「朝日町MaaS実証実験推進協議会」の取組みや朝日町での取組みについていろいろお話ししていきたいと思っております。先ほど宮口先生の方からもノックルの説明が足りなかったのではとご指摘がありましたので、ノックルについてさらに畠山さんに聞きながら話をしていきたいと思っております。よろしくお願いたします。

まず畠山さんにお聞きしたいのが、朝日町に来て、今どっぴりここで仕事されていると思うのですが、いろんな地域を回りながら、ここに半土着した理由は何だったんでしょうか。

畠山／先ほど少しお話させていただきましたが、僕自身は全国いろいろ回っていた中、藤野さんが博報堂の社員である野口真理子さんと一緒に朝日町で活動されており、その野口さんから「畠山さん、朝日町が今おもしろいです。藤野さんという人がものすごく朝日町に興味を持っていて。」と聞

「たい場所に住み続けるために〜」

いたのがきっかけです。まさに藤野さんがきっかけです。なので逆に藤野さんがなぜ朝日町なのか教えてもらえますでしょうか。

藤野／そうなんです。私は富山県富山市生まれなので広い意味では富山県には縁がありますが、元々朝日町に縁があったわけではありませんでした。

ここに実は来てらっしゃるのですが、地域の起業家で家印株式会社の方の坂東さんという方が、直接会ったこともなかったのですが、何度も何度も「藤野さん、朝日町でまちづくりのお手伝いをしてください」とFacebookのメッセージをたくさん送ってこられたことがきっかけでした。最初はやたらしつこい人だなと思っていたんですが、5回も6回もメッセージ来るようになって、だんだん来ないと寂しくなってくるんですね。そうした中、私が富山県で講演する機会があった際に坂東さんが直接来られ、名刺交換をして、さらに、朝日町ですごく有名な富山県の起業家や経営者の方を呼んでパーティーをするので藤野さんも来てくださと言われ、行かなきゃいけないような状況が作られていきました。そして朝日町に行ったところ大歓迎され、だんだん彼らの情熱にほだされていきました。また、畠山さんと一緒に、普段いろんな地域と関わっている中で、総論的に話をするよりも自分もどこの地域で活動して汗かくことが必要だなと、そうして自分の目で見ないと地域のことが分かったとは言えないとも感じており、そのためには地域に根付いている方と一緒にやる必要があると思っていたことから、坂東さんとパートナーシップを組むことになりました。そして「分かった、坂東さんの情熱に負けた。じゃあ一緒にこれやろう」となったところ、坂東さんから待ってました「じゃあ僕が用意していた空き家があるんで買いませんか。」という話があり、なんだ商売かよとも思いましたが、ノックルではないですが、それに乗っかってここまでできました。

乗っかることはとても大事で、ノックルという名前もすごいんですよね。いろんな人の情熱や夢を乗けていくということが、ノックルという言葉の中に入っていますよね。当然車のサービスだから乗るという意味がありますが、ノックルの中にはいろんなイメージがあって、僕もさっき言いましたが、朝日町に乗っかりました。朝日町に乗ったところ、坂東さんのほかに笹原町長がいました。この人もすごい人で、すごく明るい前向きだし、いろんな仕事もされていて、こういう町長や地元の人と一緒にやったら面白いんじゃないか、そう思い、この地域に古民家を買って、その古民家を拠点に活動を始めました。ただ、すごく大事なことがあるんです。何かというと、地域の中でありがちなのですが、富山県を良くしたい、朝日町を良くしたいって思いますよね。これは大事なこ

とだと思います。また、今回はいろんな地域の方に来ていただいて本当にありがたいことだし、皆さんは地域を良くしたいという気持ちが地域の中でトップクラスの方だと思います。さきほどの質問も的確な質問ばかりで、地域を良くしたいという情熱に溢れていました。ただし、すごく大事なことがあるんです。何かというと、朝日町を良くしたいと言うと皆さん誰も反対しないですよ。「おう、朝日町を良くしたいのか。そりゃそうだよ。君たちの町だから。頑張るね。」で終わってしまいます。なぜなら自分事じゃないから。つまり、地域の課題解決というのは、その地域の人にとっては重要でも他の地域の人には関係ないんですよ。朝日町を良くしたいと言うと「頑張るね。」で終わらなわけです。だから私は坂東さんや町長に「僕もこの地域で何かが良くなるように頑張りたい。でも大事なことは朝日町を良くすることじゃなくて、朝日町を通じて富山県を良くする、もしくは朝日町を通じて日本を良くするというような目線がないとダメなんだ。」ということをしつこく言いました。そしてそんな目線で勉強会をしたところ、朝日町から富山県を良くする、朝日町から日本を良くするための勉強会だと言うと、全国から人が集まってきました。そうして集まった中のお一人が博報堂の野口さんで、今度はその野口さんが来られたことによって畠山さんが朝日町に来て、そしてノックルというサービスを始められたと。これこそ人の縁が繋がっていることの証だと思うんですね。そこで聞きたいのですが、朝日町に来られたきっかけは私や野口さんだったわけですが、それでも別に朝日町を通過することもできたと思います。なぜ乗ったのですか。

畠山／まさにわらしべ長者のように縁が繋がって行って、また、町長が課題にオープンだったことも大きい理由ではあります。ただ、それ以上に、この会場にも行政の職員の方もいらっしゃると思うのですが、行政の職員、具体的に言うと朝日町役場の寺崎さんと地域おこし協力隊の小谷野くん、彼らと「実はこんなことがあって」とか「お互いこうやった方がうまくいくよね」といった課題や意見の共有ができて、よくある、いわゆる官民連携ではなく、そうした現場の部分での手ごたえ、歯車がガチっとはまる感覚があったことが一番大きかったと思います。正直に言うと企業が町長と会って、そして連携する、という話は全国どこでもあると思います。ただ、実際の現場部分でガチっとはまる感覚があったことで、ここで本当に何かやれるのではないかと感じる事ができた。そこが大きいんですよね。

藤野／朝日町が消滅可能都市になったというところで、町として頑張らなきゃいけない風土があったことも大きいですよね。それがあって結果的に縁ができたと思います。一方、実

際にノックルのサービスを始めて、当初利用者が少なかったりと、特にコロナ禍の真っ只中でいろいろあったと思うのですが、それを乗り越えられたのは何か理由があったんでしょうか。

畠山／まさに繋いでいくというのはこういうことだと思うのですが、地域交通というのはこれまでも誰かが考え、そして続いてきています。朝日町においては「あさひまちバス」というものが、富山大学の中川先生に入っただきながらしっかり運営されてきていて、これまでも新しいことにチャレンジしてきた歴史がありました。そんな地域交通を存続させるために取り組んできた歴史があったので、町側にはそうした利用者が少ない状況にも耐性がありました。ただ最初は全然利用者がいなかったで、正直僕らは民間なので焦りました。「これはやばい、誰も使わない。」と。

藤野／ですよ。最初は利用者が少なかったと聞いていたので。その状況からよく巻き返しましたよね。すごいですよね。

畠山／町としての耐性があって、町長からも「こんなものですよ。まあこうしたものはゆっくり時間かけてやりましょう。」と言われました。

藤野／町長や町の人たちもよく我慢しましたよね。

畠山／本当にそう思います。そこが、我慢という言葉を使っただけじゃありません。やっぱりこうしたものは最初から広がるものじゃないので。ただ、少しずつ広がっていくと、結局地域社会において重要なのは口コミなので、「あなたもやってみなさい」となっていく。そこがポイントになります。そこに乗せるまでゆっくりじっくりと、粘り強く取り組むことが重要なと思っています。



藤野／個人的にはよくそこで耐えられたと思うんですよ。会社としても地域としても最初にロケットスタートできれば前がかりに進められると思うのですが、なぜ粘り強く取り組むことができたのでしょうか。どこからいきましょう。

畠山／そうですね、ただ、やはり企業が事業を行うには企業なりにきちんと大きなロジックを立てる必要があります。そうしないと企業なのですぐに具体的な成果を求められます。その原則があるのでそこはきちんとその大きなロジックを説明して会社を納得させて、ただ自分個人としてやりたいという思いがあったので、1つだけ諦めたのは初年度2年度の私のボーナスです。ボーナスは激減しました。成果が出ていないのでそこは諦めました。

藤野／すごいですね。普通2年間ボーナス出ないときついですよね。

畠山／ちゃんと出てはいます。

藤野／でもすごく減ったということですよ。

畠山／そこは自分で納得してそうしたので。それよりも会社として事業を継続させることを優先させて、それが今この町に社長が何度か来させていただいていることにも繋がっていると思うのですが、それがすごく大事だったかなと思います。

藤野／でもそうやって継続できているとはいえ、先ほどの優良事例発表のときの質問も痛いところをついたと思うのですが、みんなが知ってるわけじゃない中で、じゃあどうやって利用促進するのかということはまだ課題ですよ。

畠山／課題はありますね。

藤野／先ほど質問の際も回答いただいたように粘り強く、あとは関係者とコミュニケーションを取りながら一体となってやるしかないということだとは思いますが、とはいえ焦る気持ちはないですか。

畠山／今はもう全くないですね。

藤野／それはやっぱり利用が増えて浸透してきたからですか。

スペシャルトークセッション 「富山県朝日町発、日本の幸せづくり ～一人ひとりが住みたい場所に住み続けるために～」

畠山／ノッカル単体に限ればまだまだ焦りはありますし、本当にファーストステージが終わったぐらいの状況で、まだまだ頑張れる余地があると思っています。ただノッカル以外も含めた公共サービス全体でみれば、ゆっくりですが着実に動き出したなと思っています。

もちろんまだまだこれからの部分も多く、今日のこうした場に町民の皆さんが来ていただいているのもありがたいなと思います。こういう機会を通じてまたじわじわと広がっていくのではないかなと思っています。

藤野／私がいつも町長に「過疎の町だからできることってあるよね」ということをよく話しています。それは何かというと、過疎の町だからこそ実験ができるよね、ということで、人が多い地域だと何をやるにもたくさん調整が必要だけれども、過疎を逆手にとって実証実験ができる、実証実験の町だということを積極的にPRしていけばできることがあるはずだと。民間企業の中には投資としてどこかの地域で大規模な実証実験をやりたい、そして実績を作りたいところがいっぱいあるんですね。そうすると、あとは行政側がやるという意思を示せば、できることが結構あると思います。だから、実証実験をしていると捉えることがすごく大事で、朝日町も実証実験の町とまではいってませんが、実際教育分野においてもICT教育に関しては日本トップクラスで、先ほど教育長にも聞いたのですが、ChatGPTを使った教育というものを今後文科省と相談して組み込んでいく予定だということで、人数が少ないからこそできるっていうところがすごくいいなと。そして富山県も朝日町でやったことを、この地域だけじゃなくて、この成功例を大きく開放して他地域に繋げていくということが大事で、先ほども少し話が出ていましたが、実際高岡市で始まっているそうです。どんな手ごたえですか。

畠山／まずは横展開の話になるのですが、今ほど藤野さんの実証実験の話について、まさに仰るとおりで、僕もこの町に入ってまずは実験をしようと思っていました。ただその中で僕たちが学んだことがあって、実験と言いながらもそれによって人が生活リズムを変えているわけですね。

藤野／そうだね。ただの実験じゃなくて実際にやるということだからね。

畠山／その事実に対峙したときの我々企業、よそ者の使命っていうのはそこでかなり変わって、単純に「いい実験になりました。ありがとうございます。」だけで終わってしまっただけは何も成さないなと。実装することが必要だなと。

藤野／実験でなく実装ね。

畠山／そこまでやり切らない限り僕らは人の役に立ち続けているとは言えないので、そこがまず大事で、そこを経験した後に他の自治体で展開できれば、地域によってかなり課題は違うのですが、やり切れるのかなと。企業側も実験とだけ考えていると、少し経つと地域から出て行ってしまうので、企業側の変容といった視点も必要じゃないかなと朝日町を通して特に思いましたね。

藤野／畠山さんだからこの地域に突入して行って、ボーナスも激減しながら、これまでやり続けたわけだけど、でもそこに何か面白さとかやりがいがあったら続けられなかったと思うんですね。どこにそれがあったのですか。

畠山／やりがいが一番ですね。40を超えたから分からないですけど、やっぱり人の役に立つ、誰かの役に立つということが最大の喜びですし、こうして顔を知っているいろんな会社もどんどん増えてきて、誰のためにやっているのかが見えることが大事だなと感じます。どこまでいっても企業ばかりで、そこが特に東京だとよく分からなくなるんですが、ちゃんと誰の何のためなのか分かればやりがいにも繋がります。ただ朝日町も東京も両方必要だと思っていて、その両者がきちんと回っていくことが最大のやりがいだと感じています。

藤野／地域課題の中で地域交通をどうするかというのは今非常に重要で、特に先ほどの優良事例発表の質疑の際、生活交通と観光における交通は別物だという話もありましたが、今その双方において地域交通が壊れ始めていて、特にコロナ禍後の人手不足やインバウンドの急増に耐えられないということがあって、ライドシェア導入というも国の課題になりつつあります。もともと一部の議員が言い始めていたのが、先日の首相の所信表明演説の中でもライドシェアが取り上げられ、朝日町はこのライドシェアという観点からも全国的に注目されつつあると思うのですが、今このライドシェアの議論を、先行してやっていた人として畠山さんはどんな気持ちで見ているのか。そして、この地域交通をこれから課題だと思っている方がたくさんいらっしゃると思うので、その中で生活交通と観光における交通をどう考えているのかぜひ教えていただけますか。

畠山／大都市と地方都市といった話にあたり、まず図を見ていただくと、地方においては基本的にこの青いところ、やはり地域交通、生活交通の課題が大きいと思っています。青い

ところは基本的に子供とシニア世代しか公共交通に乗っていない、大人の皆さんは自家用車に乗ってらっしゃいますと。そして地域の交通事業者は1~2社しかないような状況です。多くの地域がそういう状況で、しかもその地域の交通事業者がバスの委託とかいろんなものを担っているの、タクシー会社がある、ないの議論じゃないんですね。その交通事業者が地域の交通全体を支えているという状況がすでに起きているので、その人たちと一緒にこれから発展させない限り、地域の移動手段、公共交通がなくなってしまうんですよ。ライドシェアの議論でいくと、大都市と地方都市ではルールが違うし、図の右側に関して言うと、地元の事業者と一緒にやっていく必要があって、なので僕らが今やっていることは地元の事業者の協力型の公共のライドシェアであり、公共の移動手段だと考えています。それとおそらく図の左側ではゲームが違います。観光の観点では当然違う課題があるでしょうし、タクシー事業者もいっぱいあって個人のタクシー会社もある。個人タクシーがあるのが大体目安として人口30万人と言われていまして、そのゲームが違う中でひとまとめにライドシェアといっても進め方がそれぞれ違うんじゃないかなと思っています。

藤野／そうするといわゆるウーバー型のライドシェアが出てきたとしても、生活、公共交通型のものと、それからウーバーのような観光客にもってというのは、実は両立し得るってことですかね。

畠山／両立し得るかもしれないですが、優良事例発表の際に少し話したように、朝日町の場合、労働に200円しかコストを払っていないんですよ。なのでコストを目的にドライバーの方は動かれてなくて、そのコストを目的にやる話と、コストではなくみんなの気持ちで回すって話はかなり違うんじゃないかなと思います。

藤野／そうですね。でも、おそらく今ドライバーをさせている方ってというのは、実際に自分の生活動線の中でやられている方が多いので、だから多分200円でもオッケーで、それで稼ぎたいという人がいれば、それを利用する人が来るんじゃないかなと思っているのですが、その辺りはどうでしょうか。

畠山／自分もそう思います。行財政改革の一つとして住民目線で公共サービス再編しようという話がよくあると思うのですが、住民の声をそのまま全部聞いていってそれを形にすると、誰もコストが安くて家まで送ってよ、にしかならないと思うんですよ。

藤野／仰るとおりですね。それが一番ですもんね。

畠山／なのでサービスのコストとクオリティの部分には妥当性がないと駄目だと思うんですよ。そうしないと、ただ単に住民目線でいくと行政が負担すればみんなタダで家まで送ってほしいとなってしまうだけなので、そこは相互理解が大事で、これは生活交通だから助け合いでやろう、観光客が来たらここはみんなで楽しませて儲けようでいいと思います。そういうコストとクオリティの話がきちんと分けて議論できれば、この朝日町でもその変容ができるんじゃないかなと思っています。

藤野／こうした話はじっくり聞けば分かるけど意外と複雑な部分があって、それをどうやって浸透させるのかが結構大変だなと思うのですが、ノックルみたいなものが先に広がっていった、その後にみんなが考えているようなライドシェアの話が出てくるとすんなりいくんじゃないかなと思っています。

畠山／そうですね。そのためにも地元の事業者と一緒にやっている具体的な事例がちゃんと定着しないと、表面的な話になってしまうんじゃないかなと思います。

藤野／そうですね。だからどうしても敵対者だと捉えてしまって、僕は守る側だ、となってしまうということですね。あとは全般的な話を聞きながら最後まとめていきたいなと思います。今日はノックルをはじめ地方の公共交通についてお話してきましたが、過疎問題シンポジウムですべて皆さんそれだけに興味があるわけではなく、これから過疎地域でどうやってその社会課題に対して取り組むのかということにも関心があると思います。畠山さんも実際に活動されていて、過疎地域における可能性というのいろいろ感じていると思うのですが、どんなところにあると思いますか。

畠山／過疎地域の可能性については、まさに昨日の宮口先生のお話にもあったように、豊かな少数社会に変わるんじゃないかなと、そうなる可能性があると思います。富山県もウェルビーイングをビジョンとして掲げていて、住民からすると難しい言葉かもしれませんが、シンプルに人が幸せでいられるとか、誰かの役に立っているとか、そういうものが地域社会こそ実感できるのかなと。最近少しびっくりしたのが、東京の世田谷の家の横の住民が引っ越したんですけど、何か工事しているなと思っていたら取り壊されて、実は引っ越しだったんですよ。引っ越しを事前に知らされず、挨拶もないみたいな。

スペシャルトークセッション 「富山県朝日町発、日本の幸せづくり ～一人ひとりが住みたい場所に住み続けるために～」

藤野／それはショックですね。朝日町に入れ込んでいたからじゃないですか。

畠山／僕の行いも悪かったのかもしれないですが、とにかくそれくらい都心は個人社会なところがかなり進んでいて、個人のプライバシーは各個人でっていう話で、都心に家もあるのでその価値観もありとえばありだと思うのですが、そうじゃない価値が過疎地域には必ずあるので、そこは本当に魅力だと思います。

藤野／実は私が委員を務めている富山県のウェルビーイングの取り組みが総務大臣賞を取ったんです。

畠山／藤野さんからみてウェルビーイングっていうのはどういう状態なんですか。

藤野／ウェルビーイングを考えるにあたって大事なのは富山県って素晴らしいところで、世帯収入でいうと、県全体では47都道府県で5位なんです。東京、大阪、愛知、福岡、その次なんです。だからすごいんですよ。経済的に豊かなんですよ。じゃあ何が問題かっていうと、生活が豊かなのに女性がどんどん流出している。これを何とかしたいということで、経済力が全国上位でも女性が流出しているってことは理由はそこじゃないってことですよ。5位でも流出しているのもっと別のことなんです。女性が流出しないためにどう

すればいいのか。女性がいなくなると子どもも生まれないし、社会が成り立たない。ですから若い女性に県内に留まってもらうためには「真の幸せ」が大事で、だから僕らはもう少し、柱を経済、もちろん経済も伸ばさないといけないんだけど、経済を伸ばす以上にその真の幸せってところに目を向けないといけないというのがウェルビーイングを掲げている理由なんですよ。

そのウェルビーイングについても、健康でお金があればいいというだけではなく、やっぱり真の楽しさと豊かさっていうのが大事で、ワクワクできるとかドキドキできるとかっていうところも含めて考えなければいけないと思っています。だから朝日町も安全安心っていうところだけじゃなくて、よりドキドキできるか、ワクワクできるかってことが大事で。でもそのためには人の移動が重要で、人が繋がるためには人が停滞して止まっている状態じゃダメで、やっぱり人の交流が進むことが大事です。だから博報堂さん、畠山さんがやっているノックルみたいなものが出てきてうまく攪拌するといいなと思っています。

そんな攪拌している状態がウェルビーイングなんじゃないかなと個人的には思っています。

ということであつという間に時間になってしまいました。もう少し話を聞きたかったのですが、午後の部もあると思いますので、これで終わりにしたいと思います。皆さんどうもありがとうございました。





Himi

第2分科会

氷見市

氷見市芸術文化館

過疎地域持続的発展優良事例発表会

【コーディネーター】指出 一正 氏 (『ソトコト』編集長)

【発表者】総務大臣賞及び全国過疎地域連盟会長賞受賞団体

過疎地域持続的発展優良事例発表会

コーディネーター

指出 一正 氏

『ソトコト』編集長

『ソトコト』編集長。富山県「くらしたい国、富山」推進本部本部員、島根県「しまコトアカデミー」メイン講師、山形県小国町「白い森サステナブルデザインスクール」メイン講師、和歌山県田辺市「たなコトアカデミー」メイン講師、福島相双復興推進機構「ふくしま未来創造アカデミー」メイン講師、奥大和地域誘客促進事業実行委員会、奈良県、吉野町、天川村、曾爾村「MIND TRAIL 奥大和 心のなかの美術館」エリア横断キュレーター、群馬県庁31階「ソーシャルマルシェ&キッチン『GINGHAM (ギンガム)』」プロデューサーをはじめ、地域のプロジェクトに多く携わる。内閣官房、総務省、国土交通省、農林水産省、環境省などの国の委員も務める。経済産業省「2025年大阪・関西万博日本館」クリエイター。著書に『ぼくらは地方で幸せを見つける』（ポプラ新書）。



過疎地域持続的発展優良事例発表団体 (発表順)

総務大臣賞	一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会 [宮城県丸森町]
全国過疎地域連盟会長賞	株式会社ホップジャパン [福島県田村市]
総務大臣賞	山古志住民会議／ネオ山古志村(山古志DAO) [新潟県長岡市]
全国過疎地域連盟会長賞	論田自治会及び熊無自治会、ろんくま移住促進委員会 [富山県氷見市]

歓迎挨拶



林 正之 氏

氷見市長

皆さんおはようございます。ご紹介をいただきました、地元氷見市の市長の林でございます。

本日は、「全国過疎問題シンポジウム2023 in とやま」第2分科会の開催にあたりまして、地元市長として歓迎のご挨拶を申し上げたいと思います。

本日は全国各地から、ご来賓をはじめ、たくさんの皆様方に、ここ氷見市にお越しをいただきました。心から歓迎を申し上げますとともに、ご出席の皆様方には、日頃から過疎地域の振興に格別のご尽力とご高配を賜っておりますこと、改めて感謝を申し上げたいと思います。

またこの後発表いただきます、昨日過疎地域持続的発展優良事例表彰を受賞された4団体の皆様には、心からお祝いを申し上げますとともに、これまでのご熱意と、ご努力に対しまして、深く敬意を表する次第でございます。

さて、氷見市は、昭和20年代には人口が7万人を超える、そういった時代もございましたが、現在は4万3000人あまりとなっております。この70年間で4割の人口減少ということとなっております。このような人口減少の進行によりまして、平成29年には、市内全域を過疎地域として指定を受けまして、過疎地域自立促進計画を策定し対策に取り組み、令和3年からは、過疎地域持続的発展計画をもとに、対策を講じているところでございます。

そうした中、国立社会保障・人口問題研究所による本市の人口将来推計におきましては、2040年には2万9400人と、3万人を割る状況に陥るとされておりまして、それに対しまして、第2期氷見市まち・ひと・しごと創生総合戦略を策定して、3万2700人を確保することを目指し、人口の減少を抑制するとともに、人口が減少しても市民の皆様が幸せに暮らせるまちづくりを進めているところでございます。

その中では、地域の暮らしを守り、地域課題の解決に取り組んで、持続可能な地域を作っていくことが肝要でありまして、それに向けて、その実情等を一番よくご存知の地域の方々、自主的、主体的に取り組んでいただくことが効果的であることから、市内全地域において、地域づくり協議会の設立を目指して取り組んでいるところであります。市では、

平成25年に財政的な支援制度を設けますとともに、各地域に地域担当職員を配置するなど、人的にも伴走型で支援を行っておりまして、その効果もあり、現在15地域におきまして、地域づくり協議会が設立され、残りの8地域におきまして、令和8年度までを目標に、設立に向けた取り組みをしているところであります。

この後、午後から市内の現地視察が予定されておりますが、本市は、晴れた条件の良い日には、海岸線から富山湾に浮かぶようにそびえる雄大な3000メートル級の立山連峰のパノラマがご覧いただけますとともに、日本農業遺産にも認定されております持続可能な定置網漁業による、これから冬に向けて旬を迎える氷見寒ブリを始めとした四季折々の海の幸に加え、肉質が高く評価されている氷見牛や、日本ワインコンクールで金賞を受賞したワインなど、里山の幸も充実をしているなど、豊かな自然が生み出す食が多彩でございますので、どうかそれらの魅力も満喫していただければ幸いに存じます。

結びになりますが、本シンポジウムの開催にご尽力をいただきました関係の皆様方に、感謝を申し上げますとともに、過疎地域の限りない発展と、そして、本日もご出席の皆様方の今後ますますのご健勝、ご多幸をご祈念申し上げまして、歓迎のごあいさつとさせていただきます。

令和5年10月27日、氷見市長、林正之。

本日はどうか皆様よろしく願いをいたします。

第2分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

指出／皆さんおはようございます。お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。

今回、過疎地域持続的発展優良事例ということで、この氷見で4地域の皆様のお話を皆さんと一緒に共有できたらと思います。

私は5年ほど前に氷見市にお伺いして、関係人口のお話をさせていただいたことがあります。その時皆さんに温かく迎えていただいて、お土産にホタルイカ、夜獲れたばかりのものをいただいて、編集部のみならずとすごく喜びながらいただいたことが忘れられません。

僕は日本のタナゴのことが大好きで、イタセンパラがいる氷見はなんて豊かなんだろうと常々思っています。ぜひ氷見市のアイテム、お土産アイテムで、イタセンパラのキーホルダーを作っただけだと、僕は100個ぐらい買おうと思いますので、ぜひお考えください。

ではここからは、皆さんの地域の活動のヒントに繋がるのではないかと考えております4組の、実際に自分の地域のことを愛されて、思いとともに素敵な活動をしていらっしゃる4組の皆様のプレゼンを、皆で聞いていきたいと思えます。

最初は宮城県丸森町の一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会、吉澤さんから発表をお願いします。

一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会 [宮城県丸森町]

吉澤／宮城県丸森町から来ました吉澤といいます。今日はよろしく願いいたします。

いただいている時間が20分あるんですが、半分は動画を使ってお話をしたいと思えますので、手短な報告になるかもしれませんがご了承ください。

先ほど氷見市長のご挨拶も聞かせていただきまして、氷見市でも地域づくり協議会が立ち上がっているとお話を伺いました。私たちが今日は、宮城県丸森町筆甫地区というところの地域づくり協議会のお話をさせてもらいたいと思えます。この筆甫地区のある丸森町は、宮城県の一番南に突き出たところにあります、その中の一番山間部の県境にあるのが、私たちの筆甫地区ということになります。人口が433名で、高齢化率も62.36%まで上がっています。このように、本当に高齢者のおじいちゃんおばあちゃんが人口のほとんどを占めるようなところで、私たちはこの地域をどうやって持続させていくのか、というようなお話、そういう取り組みをさせてもらっています。

平成22年に町の方から公民館の指定管理を受けまして、そこをまちづくりセンターという名称に変えて、そこで住民が自ら、この地域は今どういう状況だからこういうことをしてい

かなければいけないね、というような話し合いをして、事業に取り組んでいます。

なお、丸森町はとても広い町でしたので、公民館だけではなく、役場の機能の出張所という役割も持っていました。そういうわけで、出張所の業務と公民館の業務をやりながら、かつ自分たちの住む筆甫地区をどうするのか、といったことを事業にしています。筆甫地区も、この氷見市さんと同じで、中小学区にそれぞれ単位自治会協議会がつくられて事業をしていますが、この地域づくり協議会というか、地域運営組織ですね、やはり何のために仕事をしているのかというと、ここに暮らす住民の方々が安心して暮らせて、活気があって、仲間がいて、そういう場所をみんなで作って、という目的をもって話し合いをしています。

この地域づくり協議会などというのは、どうしても町からの主導型で作られることが多いんですが、スタートはそうであっても、私たちは決して行政の下請けでも下部組織でもなくて、この組織が自分たちのための組織なんだということを常に意識づけしながら活動をしていました。住民の方々から全戸で中学生以上の全員にアンケートをとって、今地域の中で何をしなければいけないのか、そういうような全住民アンケートなどをとって、今やらなければいけないことをみんなで話し合ってます。

私たちの地区でこの当時とったアンケートの中で一番課題があったのが、獣害でした。一番右下の方にありますけどイノシシなどの獣害というものが一番重要度が高くて満足度が低い位置にありました。住民の中で、こういう問題を今までは行政任せにしてきたけれども、行政を頼るだけではなく自分たちで何かできないのかというようなことが、日々、地域の中で話し合われています。

筆甫地区でとったアンケートから見ると、どうしても公民館の事業を引き継いでまちづくりを始めてきましたので、イベントとか生涯学習とか、そういうことが地域の活動の中心になっていたんですが、もうそのあたりというのは結構住民の方々の疲れがたまってきていたり、いや、いつまでもそれをやっても、なかなか地域は変わらないよねという思いがあったので、イベントとか生涯学習とか、そういうことはやり続けるんですが、そこがメインではなく、やはりこれから地域でやらなければいけないことは、例えばイノシシなどの農作物への被害であるとか、実際に地域の中で仕事を作っていくこと、あとはなかなか手がつけられなくなっている農地山林の維持と活用、人づくり、そういうことを地域の中でやっていこうということで、様々なアクションを起こしています。

例えばイノシシの被害であれば、町がちゃんとやってくれないからだとか、猟友会にちゃんと獲って欲しいだとか、そういう話をするだけではなくて、地域の中で自ら箱罠を50基作っ

て、この50基のうち半分の25基を地区内に設置して自らイノシシを獲る、というような活動をしたりしています。

他にも高齢化が63%近くになってきていますので、高齢者の方々の暮らしをちゃんと守るということで、声掛けをしたり、あとはお助け隊といって高齢者の困りごとを解決する仕組みを地域の中で作ったりしています。

他にも農産物の特産品のブランド化にも取り組んだり、あとは平成30年5月20日に、みんなでお金を出し合って、この暮らしを守っていくために地域のお店を作りましょうという形で、「ひっぽのお店 ふでいち」というお店を開店させました。クラウドファンディングなども活用しまして、大体1400万円ぐらい集めて、この事業をスタートさせました。ただ、この事業をスタートさせただけでは、歩いて来ることができる住民の方の買い物は助けられるんですが、歩いて来ることができない住民の方々も支えなければいけないという形で、移動販売なども今地域でやるようにしています。

今、全国の地域運営組織のほとんど、地域づくり協議会のほとんどが任意団体かと思いますが、私たちはこのお店を立ち上げるときに、一般社団法人という法人格を取って、事業の再スタートを切りました。次に出てきた地域の課題として、ガソリンスタンドが後継者不足となり、その事業者が辞めるといった話がありました。このガソリンスタンドがなくなってしまったら地域の中で暮らしていけるのかという話もありましたので、私たちはこのガソリンスタンドの事業承継をして、今はまちづくりセンターの運営と、お店の運営と、ガソリンスタンドの運営をしながら、地域全体の中で雇用を作って、そこで暮らす人々の生活を守りたいというような取り組みをして参りました。

他にも、今日ろんくまさんが後で移住のお話をされるかと思いますが、地域の中で移住の話を進めたり、地域運営組織、まちづくり協議会が自ら農業に取り組んだり、作ったお米でお酒を作ったり、特産品のさらなるブランド化などを地域の中で進めています。私たちの地区は本当に高齢化が進んでいまして、なり手、担い手が少なくなっているんですが、今ここで暮らす住民の方々が自らの暮らしを守るために何でもやってみようということで話し合いをして、アクションを起こしています。

今の私のお話の中では、そこに至るまでの経緯の話にあまり触れておりませんでしたので、これからちょっと10分程度の動画を見ていただいて、私たちの地区のこの10数年間と一緒に振り返っていただければと思います。

それでは動画をお願いします。

～動画再生～

動画の時間をとっていただきありがとうございます。

見ていただいたように、私たちは自分たちでできることは何でも自分たちでチャレンジしようという気持ちで、今地域がどんな状況になっていて、今何が課題で何をしなければいけないのかということ話し合っ、取り組みを進めさせていただいています。そういったことが結局、地域の方々がここに住んでいてよかったなという気持ちに繋がるかと思っていますので、これからもそういう取り組みを続けていきたいと思っています。

それでは、今日はありがとうございました。

指出／吉澤さんありがとうございました。

へそ大根美味しそうですね。僕も丸森にお伺いさせていただいたことがあるんですが、素敵な場所だなというのを改めて思い返しています。

改めまして、総務大臣賞を受賞されました、一般社団法人筆甫地区振興連絡協議会のプレゼンテーションでした。ありがとうございました。

続きまして、こちらは全国過疎地域連盟会長賞を受賞された福島県田村市、株式会社ホップジャパンの本間さんからのプレゼンテーションです。本間さんよろしく願いいたします。



株式会社ホップジャパン [福島県田村市]

本間／福島県の田村市でクラフトビールを作る事業を中心に活動しております、ホップジャパン、本間です。よろしくお願いいたします。

まず田村市といいますのは、福島は大きく三つの地区に分かれていまして、一番内陸の方が会津ですね、こちらの方に会津がありまして、あと、浜通り、浜の方がありまして、あとは真ん中の地区、中通りがあります。その中通りに郡山がありまして、その近隣になっております。その田村市は5町村が合併してできたところで、中通りで一番海側にありますので、

半分海に近いというようなところ。そして福島原発から20キロ、30キロ圏内ということで、3年間避難区域に指定され、その間全く人がいなかったという地区であります。

私の企業は、2015年に仙台で起業したのですが、ご縁がありまして、福島の方でホップ栽培から原料を作ってビールを作るということで、移住してきました。

このまだ風評被害の残る都路地区でブルワリーを開くということになったのですが、私が来た時には本当にもう、避難指示区域の指定が解除されて帰ってきて、年配の方しか帰ってこないというような状況で、このまま町がなくなってしまうんじゃないかというような、すごく活気のないところでした。そういったこともあり、何とか復興の拠点、きっかけとなるようなという思いもあり、こちらでブルワリーをすることになりました。このブルワリーがある建物は新しく作ったわけではありません。当時の、合併前は都路村と言ったのですが、「グリーンパーク都路」という、東京ドーム1個分ぐらいの土地の中に、その時の産品を体感できる施設ということで、畜産が盛んだったのでその牛肉を食べるバーベキューハウスですか、あとはコミュニティー施設があったんです。この建物を中心にキャンプ場があり、あとはちょっとしたふれ合い牧場、あとは何か市民農園みたいなものがあったんです。

ただ、ものすごい山の中にあるんです。阿武隈高原という標高600メートル以上のところにあり、道もすごく細くて本当に山の中にあっただけで、焼肉ハウスを作っても人が来なくて、1年ぐらいで閉鎖してしまったという、施設ハードを作ってもソフトがないという典型的なパターンでした。そのあと田村市に合併して、その後震災が起こったということで、もう本当にその時は全く人っ子1人来ないようなところでした。

でも施設はあるので、管理費だけはかかる、草刈もしなければいけないしと、一応キャンプ場は細々と運営はしていましたが、年に数客しかこないようなところでした。

管理費ばかりかかって、一銭も生まないというようなところだったんですが、せっかくこのような施設があるので、新しく建てるのではなくて、あるものを利用して、マイナスの資産をプラスに変えようということで、ブルワリーを作ることにしました。使えなかった焼肉ハウス、これもブルワリーが開業した後に、半年後ぐらいに改修してロッジにしました。キャンプ場も、特にハードをいじったわけではないんですがリニューアルして、全部ホップガーデンという名前に統一して、こちらの方は指定管理として運営しました。建物や施設に関しては当社で譲渡を受けて、当社のもので運営しております。そうしますと今まで数客しかこなかったキャンプサイトが、クラフトビールが飲めるキャンプ場として、すごく人気になりまして、今では週末はすぐ埋まってしまう、キャンセル待ちになってしまうほどの人気になっています。

このように、遊休施設を利用することを中心に、既にあった三つの建物から始まったんですが、さらに施設内のいろんなあるものを有効活用しております。

他には、ディスクゴルフという、球技と同じようなフリスビーのスポーツがあります。ディスクゴルフというのは、そのフリスビーを使ったゴルフです。全くゴルフと同じルールをフリスビーでやるんですが、ちゃんと欧米ではプロリーグもあり、世界記録になると300メートルぐらい飛ばすんです。ドライバーとかパターもあって、こういうターゲットがホールがわりになって、そこに入れて18ホールを回る。土地が広いので、18ホールを取れるんです。9ホールぐらいあるところは結構あるんですが、18ホールあるというのはなかなかないらしく、しかも高低差があるというので、珍しいディスクゴルフ場だと一気に有名になって、今では全国大会まで行われるぐらいになっております。

こういう今までパークゴルフ場だったところは、アルティメットというまたディスク（フリスビー）を使ったアメリカンフットボールのようなスポーツに変えたりと、みんなが同じようなことをやっているスポーツをやっても仕方がないので、かといってあんまりマイナーでもというところで、このディスクスポーツというのは、特にディスクゴルフはこれからオリンピックの候補にも挙がっているぐらいで、人気のあるスポーツとしてすごくいいのではないかなと思っております。

あとは麦畑です。ホップはこちらで栽培をしているんですが、あわせて麦畑も作りまして、ここで原料を調達しています。ホップはここだけではなく、この近くに委託農家さんがあって、そこでもしっかり作っております。普通は乾燥した加工ホップしか使えないんですが、自分で作っているんで、その加工しない生のままのホップを使える。ブルワリーの規模としては最大のホップ畑を持っているので、もう好きなだけ生のホップを使えるということで、非常に全国でも珍しい作り方でビールを作っております。あとは、近所のパンを作るのが好きな方が、ベーカリーをここで始めたりされて、それもホップをパンに使って、すごく独特の風味のある良いものになっております。

このように6次化展開しまして、そうすると自然発生的にマルシェが出てきたりして、最初は近所の方が集まって出店などをやっていたのがだんだん広く大きくなりまして、今までは定期的に開催して、一番の集大成としてあぶくまオクトーバーフェストというイベントが開かれるようになりました。これは今年で2年目になりまして、1日800人ぐらい来られるという、そういうイベントも行っております。

あぶくまオクトーバーフェストのテーマは、乾杯を地球にということで、オクトーバーの収穫のときに、その恵みをみんな感謝し合おうという意味で、オクトーバーフェストをやっ

第2分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

ております。あえてビアフェスではなくて、オクトーパフェストです。すべて天然です。麦もホップも、太陽の恵み、地球の恵みで採れたものしか使っていません。それをみんなで乾杯しながら、地球に感謝しようと、そういう意味で、オクトーパフェスト、乾杯を地球に、と言っています。

当社の事業の理念としまして、1次産業の原料から2次産業でビールを作り、それを楽しんで6次化する。普通は捨てられる麦のかすなどもまた麦畑やホップ畑に肥料として戻したり、近くの牧場の家畜のえさになるということで無駄なく使う。そこで、0次産業化という名前をつけて、これらが循環する姿、これを会社の理念にしております。

会社の理念として、この循環というものに至った経緯なんですけど、アメリカに以前いたことがありまして、そのときに知ったそのビール文化です。日本ではラガービールのごくごく飲むビールしか知らなかったんですが、アメリカに行ったときに、嗜好品としてワインのように楽しむ香り、味わい豊かなビールを知って本当においしいと思ったんです。さらに、その味だけではなくて、平日であっても明日山登りに行こうと言うとみんなでハイキングに行ったりして、朝5時ぐらいに出社して10時ぐらいに仕事を終わらせて。人生を楽しむためのライフスタイルができているというか、仕事オンリーではない。お昼ごろ山に登って夕方に戻ってきたら、その近くのブルワリーで必ず締めるみたいな、そういうライフスタイルが、広い意味でのビール文化がすごくいいなあとと思ひまして、日本でもこういったことをやりたいと思ったのがきっかけです。また原体験として子供の頃から、この環境に対する思いがありました。子供の頃貧乏だったので長屋に住んでいて、井戸水を汲んで育ったんです。私の日課で水をくむ、という仕事がありまして、こういう今ではあんまり見なくなったポンプで水を出してバケツに汲んで運んでいたの、その水のありがたさとか、当時の水道水はものすごくまずかったの、本当の水のおいしさというのがすごく身に染みてわかっていました。私が小学校か中学校の頃ですかね、インドシナ難民が日本にたくさん来られて、ポルポトの虐殺でカンボジアから難民を日本で受け入れていたんですが、その時のある少女がテレビでインタビューを受けていたのがすごく印象的でした。日本に来て何に一番驚きましたかというインタビューに対して、私は、多分みんなもそうだと思うんですが、やっぱり日本のテクノロジーなどが素晴らしいという答えが返ってくると思っていたんです。そしたらものすごく意外な言葉が出てきて、その少女は、日本って飲める水で顔洗うんだと、それが一番驚いたって言うていたんですね。水ってすごく大事ななということ。ひいては、その水を作っているのは森であり、海であり、その循環で水ができています。このように環境に対する思いがあって、何かそれに関わりたいたいという

ころがありました。

そこに東日本大震災がありました。私は、この事業をやる前は東北電力にいたんです。たくさん原子力発電所にも、広報部門でお連れしたりして。そういう、なんというか、エネルギーを作るというのが、環境を汚していることでもあるので。そこは本当に、どういものが本当に地球にいいのかという思いが常にあった中でこういう大震災、そして原発事故が起きて、何かもう残りの人生をこう、地球にもっとこう、価値あるものに使いたいなと思ひまして。

この三つがきっかけになり事業を始め、こういうビジネスのモデルができ上がったというのが背景にありました。

今はビールを使ってそれを循環で表現しているんですけど、ビールだけではなくていろんなコンテンツを使って循環のテーマパークにしていきたいと思ひしております。その一つとしてまた始めたのが、今まで赤そばを植えていて、すごく綺麗な観賞用だったんですが、それを鑑賞だけで終わらせるのではなくて、養蜂を始めました。ミツバチの蜜を採って、その蜜を使ったミードというお酒が古代からあるんですが、それを作り、観賞に来られた方には今度はそば粉を使ってガレットを出すというような、これも循環のコンテンツにして、いろいろ展開していきたいと思ひています。

私、名前を付けまして、「Local Eco-System Ideal Park」略して「LESIP (レシップ)」という取り組みをやっています。まずこの理念があって、それを発信することによって、いろんな人がそれに共感して集まってくるという。田舎でよくありがちなのが、まず工業団地を作って、どこからでもいいから来てくれと。それでやっとなにか来てくれて、何人雇用しましたという。そういうパターンしかないというのがとてもおかしいと思ひています。どうしてもハードから始まってしまってますね。

私のブルワリーだって、元々ハードが作られて結局使えなかったものをブルワリーに改修しました。やはり最初に理念があるべきで、理念は設計図だと思うんです。まずその理念を訴えることによって人が集まってきて、それからまたシナジーが生まれる。シリコンバレーが、新しいものを作りたいという人がどんどん集まってきてそれからシナジーが生まれるように、そこに共通の意識がないと。それがあって次のハードが来ると思ひているんです。そういう取り組みを、今回はビールということを核にしていますけど、いろんな過疎地でできるんじゃないかなと思ひしております。

これからとして、農業をそのような循環でさらに展開していきたいなと思ひしております。麦のかすを堆肥にして野菜を作り、その野菜で今度はカフェを開くとか。また、ヤギを飼って草を刈ってもらいそのミルクからチーズを作る、現地で採れた小麦を使ってピザを作るとか。そういうことで循環のコン

テンツを増やしていきたいというのが夢です。将来的にはこのような感じになればいいなと思っております。

当社のビールですが、陰陽五行になっております。こういうトレンドのビールを作りましたので、おしゃれなこんなラベルで今回出します、などというように、毎回毎回思いつきで作るのではなくて、まずテーマを作って、それをビールのスタイルにしています。循環の根本要素である陰陽五行から、コンセプトを作る。陰、月があって太陽がある。それによって木が育ち、火で燃えて土になり、鉱物ができて、水がそれを循環している。それぞれのエレメントに合うようにビールのスタイルを結びつけております。一つ一つどれも生ホップを使い、味が个性的ですので、ぜひ機会があれば、飲んでいただきたいなと思っております。

最後に、理念という部分について。私は、最初はとんとん拍子で事業はうまくいったんですが、途中、すごく資金に困ったりして非常に大変な思いをしました。もう死ぬしかないなっていうふうにも思ったこともあります。でも、開き直って自分のやりたいことの想い、理念をどんどん伝えることで、いい人がどんどん集まってくるようになりました。それで、まず理念を、理想を語るというのは大事だなと思っております。そこで最後に、究極的にこういう理想をやりたいというのを、こちらに書きました。「我々は地球人だ」ということで、こういう過疎地、大自然の中にある過疎地で大使館を作って、地球人のパスポートを発行するという、そういうムーブメントを作りたいんです。このパスポートの取得条件はたった一つです。この地球にあるすべてのものを自分の家と庭、そして家族として生活します。それだけがこの条件なんです。いろいろSDGsとかありますが、欧米の考え方だと思うんです。今のSDGsって、何か難しいことを言っている、日本人としてなかなかちょっとわかりづらい部分があります。でも、SDGsって別にこれでいいんじゃないの、これができるれば、みんな幸せに戦争もなく暮らせるんじゃないの。そういうことを発信できるのは、過疎地田舎からじゃないかなと思っております。最後に、この想いを記したところを読み上げて終わりにしたいと思います。

水を使う時、ペーパータオルを使う時、思い出してください、地球人であることを。

食事をする時、ゴミを捨てる時、思い出してください、地球人であることを。

本当に必要ですか?適量ですか?

花々を見て、森を抜ける風を吸って、鳥の声を聞いて、感じてください、地球人であることを。

朝日を浴びながら深呼吸する時、真っ赤な夕焼けを見る時、満天の星空を見る時、楽しんでください、地球人であることを。

裸足で大地に立って感謝してください、地球に。

家族も街も国も、男性も女性も、肌の色も、区別する必要はない、だって地球人だもの。

すべてを愛しています。

我々は地球人だ。

以上で終わります、ありがとうございます。

指出／本間さん、熱い想いをありがとうございました。僕たちは地球人ですよ。

地域に関わりたい若い皆さんを、東京からホップジャパンの本間さんを訪ねて一緒にさせていただいたことが今年の夏にあったんですが、もうみんな本間さんがやっているこのビジョンを見てワクワクしてるんですよ。きっと若い人のセンチメントの中には、この地球人とかアースセンターみたいな感覚がすごくあるんじゃないのかなというのを感じました。ありがとうございます。温かい拍手ありがとうございます。会場で盛り上げていきましょうね。

では次は、総務大臣賞を受賞された新潟県長岡市山古志住民会議/ネオ山古志村山古志DAOの竹内さんです、竹内さんよろしく願いいたします。



山古志住民会議／ネオ山古志村(山古志DAO) [新潟県長岡市]

竹内／山古志住民会議の竹内です。どうぞよろしく申し上げます。

まず最初に私の自己紹介からと思います。昨日、山古志村から下山してきました、山古志住民会議という任意団体の代表をさせていただいているんですが、私、実はよそ者です。山古志村出身でもありませんし、今も実は山古志に住んでいません。19年前の中越大地震によって被災された住民の方々を支援する、災害ボランティアセンターの職員として一緒にさせていただいて、今、山古志17年生になります。本当にこの17年間山古志の方々に育てていただいて、山古志住

第2分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

民会議という、いかにも住民の方々がもう総力戦で関わっておられる団体の代表を、この私にさせてくださっております。今日は住民の方々はこの会場にいらっやっていないんですが、住民の方々の思いを胸にお話できたらなと思います、よろしくお願いします。

まずは、ちょっと山古志のご紹介を冒頭でさせていただきます。富山県の隣の県、新潟県のちょうど真ん中に位置するザ・中山間地域です。富山県も雪が降ると思うんですが、わが山古志は世界有数の豪雪地帯でして、例年3メートルから4メートルの雪が降ります。平成の大合併で長岡市に編入合併をして、今は長岡市の山古志地域として存在をしています。

集落は、14集落あるんですが、少ない集落ですと、ひとつの集落でも5世帯あるかないかという規模の集落から、100世帯規模の集落もあるような感じです。人口が、今812人というふうにかかせていただいているんですが、今月ですと760人台にまで減少しております。なので高齢化率も56%を超えるような状態です。

主な地域資源としましては、山古志が発祥の地ということで愛好家の方も国内外問わずいらっやるんですが、この錦鯉と、あとは牛の角突きという、こういう独特な文化があります。この牛の角突きの牛たちが、起伏の激しい山古志の田んぼであったり、畑であったりというのを耕していたんですが、錦鯉が育つ池と、牛たちが耕していた田んぼ、これら棚田・棚池の景観が、日本農業遺産に認定されました。この三つの主な地域資源が山古志にあります。

この山古志ですが、今から19年前の2004年10月23日に、中越地震という地震が起きました。壊滅的な被害を受けまして、3年半にわたる全村避難をしています。この地震の約半年後ですが、平成の大合併で長岡市に市町村合併をすることで、この時点で、帰ろう山古志へ、帰りたい、自分たちのふるさとへと思っていた村が、自治体として消滅してしまいます。この震災と市町村合併は、非常に大きな出来事だったんですが、これを契機に、逆に住民主体の地域づくりの機運は高まります。私が今代表をさせていただいている山古志住民会議も、このタイミングで立ち上がりました。自分たちの村は、自分たちの地域は、自分たちで未来を描いて作っていくということで、設立をしています。

また、震災当時2200人いました山古志住民の方々なんですが、約8割の方が3年半の避難生活を経て山古志に帰ってきました。その後、10数年の時を経て、現在は800人を切る状態になっています。ここまで住民が減ってきてしまいますと、いろんな課題が山積するようになりました。

2年前から唯一山古志にありました保育園が閉鎖と書かせていただいておりますが、休園をしております。その他、小中学校の複式化であったりとか、診療所の機能の縮小、公共交通

の撤退、そしてまた14個ある集落がそれぞれ集落同士で力を合わせて行っていた行事であったりとか、みんなで力を合わせて管理していた山の管理であったりとか、共助体制が弱体化しているなど、本当に、課題が山積しているような状態です。

このような中でも、地震以降、本当に人数は減ってはいるんですが、山古志に帰ってきて、自分たちの村をもう1回作り直そう、新しい山古志村を作ろうと、住民の方々がそれぞれ挑戦をする中で、住民の方だけではなく、私みたいなよそ者もしかりで、学生の方々もしかり、民間企業の方々もしかり、本当に多くの方が一緒になって、トライアンドエラーを繰り返してきていただきました。

このような山積する課題、本当に課題ばっかりの山古志ではあったんですが、ふと立ちどまってみると、地震以降、住民の山古志に帰りたいという思いであったりとか、私たちは山古志で生きて山古志で死んでいきたいんだという思いに共感していただいた方は本当にたくさんいらっやいました。数千人ですかね、学生ボランティアだけでも延べ6000人の方々が共感して下さって、住民の方とともに挑戦をして下さったんですが、このように山古志に共感する方々、地震以降に共感していただいた方々を、住民と同様の仲間として地域づくりの主体者として認めたいよね、その仲間と一緒にこれからの山古志を作っていくよね、ということで始めたのが、NFTを活用したプロジェクトになります。

このNFTという技術ですが、私自身、NFTやシステムのプロでもないですし、山古志の共感者を、共感者として認めるシステムとして、NFTをツールとして活用させていただいたというものです。このNFTを接点として共同体を形成して、山古志に共感する方々と、リアルに山古志に住む方々とで、まるで1個の国のような、独立した国のようなコミュニティを作って自治までできれば、山古志をずっと存続させられるのではないかと、という仮説を立てて、NFTを発行しております。私たちの発行したNFTなんですが、山古志が発祥の地の、私たちのアイデンティティでもある錦鯉をシンボルにしたこのデジタルアートと、仲間の証の電子住民票という概念を作りまして、紐づけてあります。現在までこの三種類の錦鯉をモチーフにしたNFTを発行しております。

仕組みとしてはまず、このNFTという山古志の仲間の証を接点に、このNFTというデジタルアート兼電子住民票を購入していただいた方々を、私たちはデジタル村民とお呼びしています。この方々のマンパワーであったり能力であったり資金と、私達山古志リアルが持ち合わせる精神性であったり地域資源をかけ合わせた、国のようなコミュニティを作って、山古志を存続させていくという仕組みです。

発行は、今から約2年前の2021年12月中旬です。現在まで

約3000弱のNFT、山古志の仲間の証であるNFTを発行しています。このNFTをお持ちいただいているデジタル村民の方が約1600人いらっしゃいます。この1600人の内訳ですが、日本国内の方が約8割ぐらい、2割の方は海外の方です。この1600人のデジタル村民の方と一緒に、リアル住民の方と日々日々、Discordというチャットツールを使って、本来であれば、山古志の中の協議会であったりとか、いろんな地域づくり団体の中で協議、相談している話題なども、デジタル村民のこの1600人の方と一緒に考えて、相談し合っています。

発行したのが約2年前なんですけど、これまで3回ほど販売を行っています。1回目のセールスの約半分近くの40%の方と、2回目のセールスの4分の1の方が、何と初めてこのNFTを購入してくださった方々でした。当初はこのNFTというもの、私自身もそのプロでもないですし、2021年の段階ですと、なかなか国内の中でもNFTというワードを知っていらっしゃる方は本当に少なかったんです。なのでどちらかというと海外に向けて発信をしていたところもあるんですが、それでも国内の方が、地域づくり×NFTってなにが始まるんだとか、もしかしたらこのNFTというデジタル技術を活用して自分の地域も何か元気にできるんじゃないか、ということで、いろんなハードルを超えなければこのNFTというのはなかなかすぐには買えなかったりしたんですが、そのいろんなハードルを超えて買ってくださった方々が、第1弾セールスでは半分近く、第2弾セールスですと4分の1の方々が、共感して購入をしてくださいました。

私たちのNFTが持つユーティリティですが、先ほどお伝えしてしまいましたが、Discordというチャットツールを使って毎日コミュニケーションをしており、このコミュニティへのアクセス権があります。さらに、アイデンティティの象徴として、そして投票権としても機能します。また、デジタル資産としての意味合いも持ち合わせています。

発行以降の具体的な取り組みとしては、発行から約1ヶ月後になるんですが、デジタル村民の方から提案が一つありました。リアルな住民の方と一緒に、よりこのプロジェクトを推進していきたい、もし希望する方がいらっしゃれば、住民の方には無償でこのNFTを配布したらどうか、という提案がありました。それはいいねと、他のデジタル村民の方もおっしゃってくださったので、じゃあ投票をして、賛否を問ってみましょうということで行ったのが、リアル山古志住民にNFTを無償配布するかどうかの投票です。賛成がなんと100%、反対が0%ということで、実は賛成が100%というのは予想していませんでしたが、この胸の熱くなるような結果を経まして、地域のコミュニティセンターみたいな拠点があり、そこに私は事務所を構えさせていただいているんですが、少しずつ、地

域のお父さんお母さんに集まっていただいて、NFTを取り扱う仮想通貨のウォレットを開設したり、また、Discordというチャットツールをインストールして、コミュニケーションが取れるようにスマホにアプリを入れたりして、住民の方にもNFTを徐々に徐々にをお持ちいただいております。

そのような中で、デジタル住民とリアル住民とでともに挑んだのが、山古志デジタル村民総選挙です。無償配布の約1ヶ月後に実施したイベントになります。これは、Nishikigoi NFTの売り上げを使う権利は、山古志住民だけではなくて、仲間であるデジタル村民の皆さんにもありますよ、ということをお伝えしたくて行ったイベントです。

簡単に言いますと、山古志存続のためのアクションプランをデジタル村民の方から公募しまして、それをNFTを使って人気投票し、上位1位から4位までを決めて、Nishikigoi NFTの売上をプロジェクト予算として付与していくという取り組みです。結果、12件の応募がありました。その中から上位1位から4位までを人気投票し、プロジェクト予算として付与しました。その選ばれたプロジェクトが、2022年から今日に至るまでひたすらずっと動いているような感じですよ。

こちらのプロジェクトで選ばれた4つのプランを通して、実際に山古志に足を運んでくださるデジタル村民の方々も多くなりました。一番最初は、そうですね、2年前に当初NFTを発行した約2週間後ぐらいに、「僕デジタル村民なんで山古志に帰省しまーす」とおっしゃったデジタル村民帰省第1号の方が、本当に山古志には初めて来られるんですけど、そしてまた出身地でもないし住んでもおられないんですが、帰省しまーすと言って山古志に来られたことがあったんです。それをきっかけとして、デジタル村民の方が山古志に来ることを皆さん帰省と言っています。ふるさとに帰るように、自分の実家に帰るように、帰省しますと言って山古志に来てくださっています。ちょっとコロナも落ち着いたということもありまして、延べ300から400名ぐらいの方々が、山古志を訪れたり、山古志に滞在をしてくださったりしております。

また、リアルな山古志に来てくださって交流も進めてくださっているんですが、日々、このDiscordを使ったコミュニティ運営もしております。これは、大きなアパートの中にテーマ別のお部屋があるみたいなイメージなんですけど、「おはよう」だけをただただ言い合うお部屋があったり、雑談をするお部屋があったり、また、中華圏の方が集うお部屋があったり、海外の方が集うお部屋があったりなど、テーマ別で、コミュニケーションをしております。

このDiscordの中で使ってる言語は、今は日本語と英語と中国語なんですけど、このコミュニティのモデレーションといいますが、管理人おばちゃん、おせっかいおばちゃんをして

第2分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

いるのが、私、竹内です。ですので、「この部屋はちょっと何か小競り合っているなあ」とか、「ここの部屋はちょっとなんか元気ないわ」と思うと、「はいはいちょっと元気ないけどこっちの部屋行ってみて」などというようにおせっかいおばちゃんとして、日々日々コミュニケーションの促進をしております。

今後についてですが、私たちの山古志住民会議、実はまだ任意団体です。このリアル山古志住民とデジタル村民の共感コミュニティ、まるで国のような共感コミュニティをより加速させて、より元気に楽しくさせていくためには、やはり組織化を、法人化をせねばならぬという話を今しています。そして、早ければ年内中に組織化ができるかなと思っているんですが、山古志住民と、共感いただいているデジタル村民の方々がより活発にアクションできるように、法人化を進めて、より一層挑戦をしていきたいと思っています。私からの発表は以上でした。ご清聴ありがとうございました。

指出／竹内さんありがとうございました。

僭越ながら、今回の優良事例の審査員の代表として私が山古志地域にはお伺いさせていただきました。感じたのは、未来は突然現れるわけではないなということです。みんな未来を作ろうと思って未来ばかり向いているけれども、それまでに積み重ねてきたものが、後ろから軽やかにこう前に行くんですね。だから、山古志のこの20年近い、中越地震から綿々と繋がる応援している方々であったり、山古志の中の皆さんの思いが、このDAOであったりNFTという形をとったコミュニティになっているんだなというふうに思いました。

お土産で買って来た神楽南蛮がめちゃめちゃ美味しかったです。また買おうと思います。

山古志住民会議 / ネオ山古志村山古志 DAO の竹内さんでした。ありがとうございました。

では最後のプレゼンテーションになりますが、地元氷見市より、全国過疎地域連盟会長賞を受賞されました富山県氷見市、論田自治会及び熊無自治会、ろんくま移住促進委員会の伊東さんより、発表いただきます。

伊東さんよろしく願いいたします。

**論田自治会及び熊無自治会、
ろんくま移住促進委員会
【富山県氷見市】**

伊東／ろんくま移住促進委員会で事務局をやっています伊東です。

今日は地元からもたくさんの方にお越しいただきまして、あ

りがとうございます。

ろんくまの取り組みについて紹介をさせていただきます。

今日私からお話しすることは4点ありまして、まずろんくまについてどんな地域なのかということをご紹介しまして、これまで取り組んできたこと、それからその原動力となっているようなこと、最後に今後はどこへ向かおうとしているのか、ということについてご紹介したいと思います。

移住促進に向けた取り組みは、令和3年から始めているんですが、まだ2年弱ということで、成果は正直まだ出ていないような状況にあります。まだまだ始まったばかりです。

ただ、この間、いろんな取り組みをやってきて、少し手応えといますか、他の地域にもちょっと参考になるのではないかなということが幾つか思い当たりますので、それをちょっとご紹介したいと思います。

まず、簡単に私の自己紹介ですが、もともと東京の出身で氷見には10年前に移住してきました。母親が氷見市の論田地区の出身でして、小さい頃からよく夏休みなんかには里帰りといいますが、遊びに行くと田んぼ道で虫をとったりとか、そういう自然体験がもうずっと心に残るんですね。それで、大人になっていつか地方に行きたいという思いから、転職を機に氷見市の方に移住しました。今は氷見市役所の職員をやっているんですが、この活動については市の職員としてではなく、地元住民として活動させていただいています。

ではろんくまについてということで、まず氷見市は、能登半島のつけ根、富山県の西部に位置します。この氷見市の中でも西部、石川県との県境に、論田地区と熊無地区という二つの地区があります。頭の文字をとって「ろんくま」というふうに呼んでいます。約200世帯、人口600人で高齢化率は50%ほどとなっています。こちらのろんくまを上空からドローンで撮影した景観なんですけど、ご覧の通り本当に景色の綺麗なところでして、私の家の前からも、今の時期は秋の澄んだ空気の下、収穫の終わった棚田がこう広がってまして、その向こうに氷見の街が見えて、その向こうに富山湾が見えまして、さらにその向こうに立山連峰があって、そこから朝陽が昇ってくるというような、もう息をのむような美しい景観があります。この景観の美しさというのがろんくまの特徴の一つです。

もう一つは、意外に交通の便がいいんじゃないかということです。論田熊無は富山県と石川県の県境にありますので、生活圏が両県に跨っているんです。どちらのスーパーに行くにも車で約20分。新幹線のある新高岡までは40分。金沢まで約1時間ということで、通常過疎地域でスーパーまで車で20分というのは、他の方の話を聞くと、こんな地域はあんまりないんじゃないかと思っています。これだけ自然が豊かで街へのアクセスがいいというのは、地元の方はあんまり意識していないかもしれませんが、実は外から見ると結構魅力なんじゃ

ないかということで、まちと自然とのほどよい距離感というの
も、この地域の特徴の一つかなと思います。

こちらは人口の推移をグラフにしたものです。平成27年の国
勢調査のデータを使って、これまでの論田熊無の人口の推移
と、これからどうなっていくのかというのを予測したグラフに
なります。現在が約600人の人口で、20年前は900人でし
た。それが15年後、300人にまで落ちるんじゃないかとい
う予測で、これから読み取れるのは、20年で300人減って
いたのが、15年で300人減ってしまう、人口減少が加速し
てるんだということが読み取れます。

こちらは人口ピラミッドです。上の方が高齢者で下の方に行
くほど、若い世代になります。左側2020年、右側2040年な
んですが、20年後、このピラミッドが全体的に少なくなります。
特にここで注目したいのが30歳未満の若い世代です。左
側が男性で右側が女性なんですけど、女性が少ないんです。
女性がほとんどいなくなってしまう。これは何かというと、女
性が少なくなるということは子供が少なくなるということで、
20年後には小学生がほぼゼロになってしまうんじゃないか
ということがこの予測から見えてきました。

これは世帯数です。世帯数も右肩下がりです。ここで注目し
たいのは、世帯数は減っていくんですが、高齢者だけの世帯
の割合というのは、実は増えていきます。約20年後には4割
が高齢者単独・夫婦だけの世帯になっていくんじゃないか
ということが予測できます。世帯数が減るといことは、空き家
が増えていきます。この空き家をどう活用していくのかとい
うのも、課題です。

こういう人口減少に伴う課題に対して、どう立ち向かってい
けばいいのかということで、ろんくまは、令和3年に富山県の移
住者受け入れモデル地域というのに認定されまして、実行委
員会を立ち上げました。その中でいろいろ話し合いを重ねて、
他の地域の事例なんかをもたくさん勉強しまして、1年かけて
計画を作りました。ろんくま移住計画です。10年後、こんな姿
を目指します!というのが三つあって、一つ目が、子ども達の
笑い声が響く村にしよう。二つ目が、いろんな人が集まって交
流する村にしていこう。そして、人は減っても、1人あたりの負
担が少ない村にしていましよう、という三つの目標を立て
ました。

そのためにはどんな取り組みをするかということで、情報発
信であったり、自治会の体制など今まで当たり前だったこと
を見直したり、それから、地域の中と外をつなぐ取り組み、ま
た、今すでにやっている取り組みをもっとレベルアップ、魅力
的にしていこうと、こういった目標を掲げました。

これはちょっと細かいんですが、今私が言ったことを少し体系
化したものです。

今言ったようなことは、多分皆さんの他の地域でもこうい

た計画を作ろうと思うと、似たような計画になるのではない
かと思うんです。たどり着く結論は、多分同じというか。ここ
で大事なことは、こうして見える化するということではないかな
と思います。何かいろいろイベントをやっても、このイベン
トって何のためにやっているんだろうとか、その目的が見えな
いと、なかなかモチベーションが上がらなかったり、長続きし
なかったりという中で、このイベントの先にはこういった目標
があるんだよというのを見える化していく。この見える化
ってあとでまた言いますがとても大事なことじゃないかなと私
は思います。

取り組みの一つが情報発信です。左下にあるのがインスタグ
ラムで、右下がFacebookです。ここで皆さんにスマートフ
ォンを出していただいて、ぜひこのQRコードを読んでみてくだ
さい、よければフォローしてください、いいねしてください
ってお願いしようかなと思ったんですが、多分スクリーンが小さ
くてちょっと読み取れないかな。作戦失敗だなと思いながら
見ているんですが、いけますか。はい。いける方はぜひお願
いします。

インターネットで「ろんくま」というふうにひらがなで検索して
いただくとホームページなんかも出てきます。ホームページ
にはプロモーションビデオも出ていますのでぜひご覧いただ
きたいのと、インスタグラムは地元の女子大生が、運用した
いですというふうに言ってくださって、どんどん発信してい
ただいてまして、もう若い子ならではのセンスで、インスタグ
ラマーもフォロワーも若い方が多いなという印象があり
ます。そういう媒体ごとに対象となるターゲットも想定しな
がらやっています。

他に情報発信として、マスコットキャラクターでの取り組みが
あります。最初、熊無自治会さんがマスコットキャラクターを
作ってるというのを聞いて、ちょっと嫌な予感がしたんです。
マスコットやゆるキャラで、結構失敗してるどころってあるん
じゃないかなと。大丈夫かなと思ったんですが、できたのはこ
れです。どうでしょう。結構かわいくないですか。くまなくま
タローとろんくまチャンです。左側がくまなくまタローで、
ちょっと細かいエピソードも設定されているんですが、くま
タローが背負ってるのは、地元の特産の藤箕というものです。
箕ですね。ろんくまチャンは、この下げてるポーチの中に特産
品の草餅が入ってます。草餅食べ過ぎてちょっと緑色にな
ったという設定です。すごい細かいです。他にもいろいろあり
ます。このマスコットの、テーマソングまでおじさんたちが作ら
れまして、それを地元の小1年生に歌ってもらってCD化し
まして、それを父兄の方に配って、そこからまたこれかわいい
ねというようなPRに繋がったりですね。情報発信でこういうや
り方もあるんだなと、すごく私も勉強になりました。

続いてはくまなくまウォークです。これは毎年春に行われている

第2分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

ウォーキングイベントなんです、桜の季節、集落の中には色とりどりの花が咲きまして、もう本当に綺麗です。深呼吸したくなるような美しい景色の中を、気持ちのいいウォーキングで回りながら、地元が指定した文化財の解説を聞きながら歩くんですが、解説される方が熊無の徳光さんと呼ばれるぐらいトークが非常に面白くて、参加される方たちもそのトークを大変楽しみに、リピーターの方もいるということです。これは予約受け付け開始からもうすぐに埋まってしまう大人気イベントとなっていて、皆さんも、もし機会があればご参加いただければと思います。

続きましてお休み処くまなしです。これは石川県との県境の方にある農産物の直売所なんです、ここで、毎年秋の時期に味覚祭をやっています。「みんなで収穫を、感謝する、熊無、最高の、イベント、味覚祭」ということで、もう、まさにこのとおり食のイベントです。今度11月の初旬にありますので、もしお近くにお立ち寄りの方はぜひお越しいただければと思います。

続きましては伝承料理の取り組みです。これは、地元で昔から伝わる伝承料理を次の世代につなげていこうというような取り組みです。写真は少し見づらいかもしいませんが、煮物だったり、むかごご飯ですとか、地元の食材を使って作っています。ちょっと変わったところでは、くさぎの打ち豆の煮物というのがあるんですが、くさぎって皆さん何かわかりますか。あんまり背の高くない木で、ちょっとスピード型の葉っぱをしているんですが、葉っぱを揉むとちょっと臭いというか、人によってはピーナッツバターの香りっていうんですが、それとお豆をちょっと甘く煮た煮物で、おいしいんですこれが。私もここに来て初めて食べたんですが、この地域ならではの地元の食材を使った伝承料理で、これは絶やしてはいけないということで、先ほどのくまなしウォークなどで出されます。

続きまして藤箕です。これは国の重要無形文化財に指定されている農作業用の箕なんです。藤蔓の中の繊維ですとか竹を編み込んで作ったもので、昔は加賀藩の時代に、論田熊無の箕というのは大変質がいいということで一大産地となりました。それが時代の変遷とともに、需要が減って、作り手が減少していく中で、何とかこの技術を伝承していきたいということで、藤箕伝承の館というのを整備して、藤箕作り教室が行われています。右下は、今年の夏に、相模女子大学さんと、東京農業大学さんがインターンシップでこられまして、その時に藤箕づくり体験をした、その写真です。

こういう大学連携というのも結構やっています、他に富山大学の芸術文化学部さんとも一緒にいろいろやっていますが、竹林伐採ですとか、稲刈り体験ですとか、地元の方からすると何気ない日常作業というのが、学生さんからすると、もう本当に特別な体験になるということで大変喜ばれていま

す。それから、外から人が来る、若い人が来ることで、地元の方たちもそれを受けて、刺激を受けるきっかけになっているのかなと思います。

続きまして草餅の取り組みです。これは、約20年ほど前に地元のお母さんたちが立ち上げた事業で、もう高齢ということで今年の春に引退したいという話があった中で、この草餅を何とか継承していきたい、つなげていきたいということで、次の世代の方達がこの春に事業継承しました。この草餅というのは結構重要な役割を担っていて。この草餅のお餅、もち米ですね、これを育てるために棚田が耕作放棄地にならずに、集落の景観が維持されています。それからヨモギも、地元のおばあちゃんたちがおしゃべりしながらちょっと摘んで、ちょっとしたお小遣い稼ぎになるような、そんな地元農業の中心にあるような位置付けです。これを何とか残していきたいということで今、取り組みが行われています。

続きまして、茶論です。これ、すごい取り組みなんです、毎月5のつく日。5日、15日、25日に行われています。おじいちゃんおばあちゃんがこの日に集まって、ここで、仏教講話を聞いたり、健康体操をやったり、脳トレゲームをやったりするんですが、すごいのは、市から補助を一切受けなくて、5年以上ボランティアで続けてるんです。これってすごいことだと思っています。どうしてこんな長く続けられるんだろうと、行ってみるとわかるんですが、もう皆さんが本当に楽しそうにやっています。笑い声に溢れていて、運営している方たちにも聞いてみると、楽しいからやってるんやちやと。これ、大事だと思うんですね。義務感とか、危機感とか、そういったものも大事なんです、楽しいからこそ続けられるというのは、もう本当に学ぶところが多いのではないかなと思いました。

続いては集落の教科書です。これは全国で取り組まれているもので、ろんくまでも策定をしました。他の地域では、外から来る人たちに対しての地域のルールブックといいますが、この地域はこんな地域だよというのを知って欲しいという、そういう意味合いで作られることが多いようなんですが、私たちはやってみて、これは自分たちの地域を一步引いて客観的に見ることで、次の改善につなげていくための一つのステップなのではないかなと思いました。例えば、この教科書を作る過程で、全住民対象のアンケートをとりました。現在は、回覧板を班長さんが紙で回覧しているんですが、そういった一つ一つの負担を減らすために、電子回覧板を導入できないかということを考えて、皆さんがスマートフォンをどれぐらい持っているのかを1回調査してみたんです。そうすると、若い世代はやっぱり皆さん多くの方が持っていまするんですが、70代ぐらいで半々ぐらいになり、そこから逆転していく。そういう中で、一斉に全員に電子回覧板というのは無理だなということがわかりました。ただ、60代以下の壮年会ですとか

若い世代では、LINEなんかを積極的に使うことで、運営の省力化に繋がるんじゃないかなというのがわかりました。それから若い方たち、先ほどの女性ですとか、そういった方達のまちづくりへの参加ですね、意思決定の場への参加を促す上でも、こういったものって大事なんじゃないかなと思っていて、ろんくまの公式LINEも立ち上げています。これは他のInstagramなんかと違っていて、完全に地元向けの情報発信ツールです。Googleカレンダーを使って公民館の行事予定を共有したり、あとは回覧板も電子回覧板で見られるようになってます。若い方たちが日中仕事をしていて不在の中で、家にいる年配の方が回覧板をまわしてしまって内容を見ることができないとか、よくデジタルデバイドと言われますけど、何かその逆みたいなものもあるんじゃないかなと思うところがあり、若い方たちの参加を促していく上でも、やっぱりこういうデジタル技術というものはどんどん取り入れていったほうがいいんじゃないかなと思います。

今日何回か出てきたんですが、見える化ですね、小さな成功体験を積み重ねて、見える化する、お祝いするという、これは大事なかなと思います。例えばこの県広報とやまにろんくまの取り組みが出ましたという時に、若い方なんか職場で上司の方とか周りの方から、「ろんくま出てたね、頑張ってるね」、みたいに声をかけられたら、やっぱり嬉しいんですね。そういうのが、地域への誇りとか愛着心に繋がるんじゃないかなと思います。積極的にどんどん見える化していくというのは大事なかなと思います。

それから、目的地に早く着きたいなら1人でやればいいんですが、より遠くまで行きたいのであれば、やっぱりみんなで行って行く必要があるのかなと思います。これは正直私たちもまだまだできていないところがあるかなと思っていて、まだ一部の人だけでやっているじゃないかというふうに言われることもあるんです。ただ、こういう思いを持ってやっているという、それだけで大分違うと思うんです。本当に私たちは遠くまで行きたいので、できるだけ多くの方に参加して欲しいなというふうに考えています。

それからもう一つ。みんなが一つになれる文化を大切にということで、氷見は獅子舞が非常に盛んなんですが、特にろんくまは獅子舞に熱心な地域です。毎年秋に、夜、太鼓の音とともに青年団が集まってきて、練習を重ねるんですが、仕事の関係でどうしても外に出ていった若い方たちも多いんです。多いんですけど、祭りの時期に休みを取ってまで練習に来たりとか、それぐらいみんなすごく好きなんです。青年団のお子さんたちも来て、ちょっとした子供の遊び場みたいにもなっています。また、青年団を指導するOBの方たちが来たり、笛を吹く女の子たちが練習に来たりということで、多世代交流の場にもなっています。

人口減少が進む中で、私たちがやっていくべきこととして思うのは、どんどん見える化して、自分たちの足元にある大切なもの、資源というものは何なのか、残していきたいものは何なのかということ、絞り込んでいくというか、焦点を当てていく、そういうことが必要なのかなというふうに思います。これからどこに向かおうとしているのかということで、来年度の宿泊体験交流施設の整備に向けて、今検討を進めているところです。これができれば、地域の外から人が訪れて、地域の方たちと交流して、さらに好循環が生まれるというような、そんな状況を目指していきたいなと思っています。

そして、ねこ「ろん」で、「くま」なく歩いて、住んでみて、ということで、ろんくまの取り組みをさらに進化させていければと思います。

ご清聴ありがとうございました。

指出／伊東さんありがとうございました。

とてもやさしい思いに溢れているプレゼンテーションであり、たくさんプロジェクトがあるなと思いました。論田熊無にお住まいの皆さんのやさしいお気持ちがたくさん現れている感じがしました。ありがとうございました。

ここから意見交換をしたいと思っていたんですが、もうそろそろ時間です。あと3分しかありませんので、皆さんそれぞれ思いを一言ずつ言っていただけたらと思います。

誰から行きますかね。吉澤さんが行きましょか。お願いします。

吉澤／本日はありがとうございました。私達の地区は人口が減って中で、とにかくそこに住む住民一人一人がいかにか主体性を持って地域に関わっていくのかということのを大事にしてきました。そこで暮らす人たちは僕は結構戦う人って言うんですけど、地域の人みんなが自分でやれることをやっていくという地域をこれからも作ってきたいなというふうに思っています。

今回は本当にありがとうございました。

指出／ありがとうございました。

では本間さんお願いします。

本間／私たちは民間なので、民間という立場でいろいろ背負っているものもあり、地域との取り組み方はちょっと違った観点があるのかなと思っています。ただ、そのテーマというか、やりたいことには変わらないので、このプロセスというものを見せることによって、物の大切さとかありがたさを知ってもらいたいと、そういうシンプルな思いでやっております。何か機会がありましたらぜひ福島の田舎なんですが、ブルワ

第2分科会 過疎地域持続的発展優良事例発表会

リーに、ロッジもキャンプ場もあるので遊びに来ていただければと思っています。よろしくお願いします。

指出／ありがとうございます。
では竹内さん、お願いします。

竹内／今日は本当にありがとうございました。
私以外の素敵なお三方の発表を聞いて、もうすぐ行きたくなりましたし、私自身も山古志地域に関わってはいるんですけども、こうやって全国各地で、持ち場立場や地域は違うけれども、何かそれぞれのやり方で調整をされている、なんか同士だなみたいなことを勝手に感じた、すごくうれしかった2日間でした。
もしよろしければ、山古志も仲間かなとか、同士なのかなと思ってくださる方がいらっしゃるようでしたら、ぜひ遊びに来てください。
どうもありがとうございました。

指出／ありがとうございました。
では伊東さんお願いします。

伊東／私もちょうど同じようなことを言おうかなと思っていたんですが、やっぱり今人口が減っていく中で、今まで当たり前に行っていたことができなくなって、戸惑っていることもたくさんあると思うんですが、同じように頑張っている方たちが、全国にたくさんいらっしゃるということがこのシンポジウムでわかりましたので、ぜひそういった事例なんかも学びながら、皆さん、お互いに頑張っていきたいと思いますので、終わりたいと思います。

指出／ありがとうございます。
意見交換とステージのモニターには書いてありますが、ゆくりとした意見交換の時間はあまりありませんでしたが、ご登壇者のみなさんとお来場者のみなさんと心の交歓はしっかりとできたと思います。それが一番大事なことだと思いました。過疎地域のシンポジウムで、自分たちだけじゃないんだということが感じられて、未来を作るチャンスやきっかけはこうやって生まれるんだなということをお互いに共有認識として得られた2日間だったのではないのでしょうか。そういうふうに思います。
ともあれ、氷見市の皆さん本当に温かく迎えてくださってありがとうございました。
ぜひ、面白く街の未来をつくる4組の実践者の皆様の取り組み、皆さんのお手元にある優良事例表彰の冊子にも書いてありますので、読んでいただけたらと思います。

では、改めましてご登壇いただいた4名の皆様ありがとうございました。
大きな拍手をお願いします。



第3分科会

南砺市



Nanto

南砺市井波総合文化センター

パネルディスカッション

「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

【コーディネーター】

図司 直也 氏 (法政大学現代福祉学部 教授)

【パネリスト】

田口 太郎 氏 (徳島大学大学院社会産業理工学研究部 教授) 小玉 陽造 氏 (山口県岩国市 市民協働部長)

小島 公明 氏 (兵庫県朝来市いくの地域自治協議会 事務局長) 川島 尚子 氏 (高知県室戸市まちづくり推進課 集落支援員)

パネルディスカッション

コーディネーター

図司 直也 氏

法政大学現代福祉学部 教授

1975年愛媛県生まれ。東京大学農学部を卒業し、東京大学大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻に学ぶ。2005年に同研究科博士課程を単位取得退学。博士（農学）。財団法人日本農業研究所研究員、法政大学現代福祉学部専任講師、准教授を経て、2016年より現職。中山間地域等直接支払制度に関する第三者委員会委員長、(財)地域活性化センター・地域リーダー養成塾主任講師等、地域振興・人材育成に関するアドバイザーを歴任。専門分野は、農山村政策論、地域資源管理論。

主な著書は、『就村からなりわい就農へ』（筑波書房）、『地域サポート人材による農山村再生』（筑波書房）、『新しい地域をつくる』（共著：岩波書店）、『プロセス重視の地方創生』（共著：筑波書房）、『内発的農村発展論』（共著：農林統計出版）、『人口減少社会の地域づくり読本』（共著：公職研）、『田園回帰の過去・現在・未来』（共著：農山漁村文化協会）など。



パネリスト



田口 太郎 氏 徳島大学大学院社会産業理工学研究部 教授

1976年神奈川県生まれ。早稲田大学理工学部建築学科卒業、同大学院修了。博士(工学)。小田原市政策総合研究所特定研究員、早稲田大学助手、新潟工科大学建築学科准教授、徳島大学大学院准教授を経て現職。専門は地域計画。総務省これからの移住・定住のあり方に関する検討会委員、内閣府地方創生推進交付金のあり方に関する検討会委員、農林水産省長期的な土地利用のあり方に関する検討会委員などを歴任。自身も徳島県の過疎地域に移住し、生活者としての視点も持ちながら研究を進めている。主な著書に「まちづくりオーラル・ヒストリー」(水曜社、2005)、「少人数で生き抜く地域をつくる」(学芸出版社、2023)、他。



小玉 陽造 氏 山口県岩国市 市民協働部長

岩国市 市民協働部長
S38年 山口県の雪深い山間地域で出生
S59年 岩国市役所に入庁
しょうがい者福祉援護、観光振興、市民協働推進に長く携わる。
令和3年から現在の市民協働部長に就任



小島 公明 氏 兵庫県朝来市いくの地域自治協議会 事務局長

昭和55年生野町役場入職、平成17年合併により朝来市となり、平成29年3月定年退職。
平成30年5月いくの地域自治協議会事務局長に就任、同時期より集落支援員を務める。
地域内の各区自治会に対する活動支援や市の施設管理の受託等を行っているほか、旧鉢山宿舎を活用したゲストハウスの設立、運営にも取り組んでいる。



川島 尚子 氏 高知県室戸市まちづくり推進課 集落支援員

奈良県橿原市出身。北海道と神奈川県にも居住歴あり。
東日本大震災をきっかけに2014年から家族で高知県室戸市へ。夫は漁師となる。2017年から現在まで居住地かつ夫の勤務地でもある高知県室戸市椎名地区担当の集落支援員として「椎名集落活動センターたのしいな」を拠点とした地域活性化に取り組んでいる。
集落支援業務の一部としてたのしいなこどもクラブ、しいな遊海くらぶなど地域団体の立ち上げや運営にも主体的に関わり、プライベートでは、むろと地域猫の会、室小お話し会などのボランティア活動にも参加。ウクレレユニットいそもんとしても活動しイベントで演奏も行い他にも様々な地域活動に関わる。
各種観光ガイドやインストラクター、ライター業もっており特技は人と人をつなぐこと。

歓迎挨拶



田中 幹夫 氏

南砺市長

皆さんおはようございます。「全国過疎問題シンポジウム 2023inとやま」第3分科会の開催にあたり開催市を代表し、歓迎の挨拶を申し上げます。

本日は全国各地から多くの皆様方に南砺市井波へお越しいただき、心から歓迎を申し上げます。また、関係者の皆さんにおかれましては、平素から過疎地域の振興に対し、格別のご尽力とご高配を賜っておりますことに深く感謝申し上げます。

私も昨日、全体会と交流会に参加し、「過疎」というキーワードの中で、全国から多くの方にお集まりいただき、色々な話を聞く機会に恵まれたことが、私にとっては大きな成果だと思っています。

我々の課題とするものは何なのか、そして宮口先生のおっしゃったメッセージは何だったのかを一晩考えて、今日の日を迎えました。

私は、この井波というまちから24、5キロ上流の利賀村というところに生まれ育ち、今も家があり、母親が住んでいます。小さな田んぼや畑があり、毎年同じように田植えをし、イノシシの防御の電気柵を張り、そして収穫が終わった頃に電気柵を外して、その間はずっと2、3週間に1回は草刈をしています。皆さんにこういう話をすると「お前のところは大変だな。」という声が聞こえますが、母親と2人で話をすると、「こんないいところはないぞ。向かいの山を見てみる。心がもやもやした時にこの山を思い出してごらん。」と言われ、本当に自分の生まれ育ったまちや地域の景色は立派だと思っています。

今日、南砺市のポスターが入口に飾ってありましたが、「都会は人がつくり、田舎は神がつくる。」このメッセージはイギリスの詩人の言葉です。私は南砺市のまちづくりにおいて「一流の田舎をつくりたい。」と言い続けて、合併して18年、15年間市長をさせていただいております。皆さん、一流の田舎を全国につくろうじゃありませんか。一つ一つの地域が一流の田舎だと誇らしく語れるような地域をぜひつくっていきましょう。

南砺市もまだまだ道半ばですけれども、人口減少という課

題に対し、広大な山林、そして平野部を有する我々一人一人が気持ちだけでも負けないように、明るい未来を若い人たちに繋いでいくんだ、そういう想いでこのシンポジウムを開催させていただきました。

今日1日、ここで新たな出会いと学びがあるかもしれません。また、少しの時間ですけれども井波のまち、そして世界遺産の相倉合掌造り集落もご視察をいただくとお聞きしております。皆さんにとって本当に有意義な1日になりますように心から念じ、そしてそのことが日本の過疎地域の元気に繋がるように祈念を申し上げまして、私からの歓迎のごあいさつとさせていただきます。みんなでこの日本を守っていきましょう。よろしく申し上げます。ありがとうございました。

「集落の暮らしを未来へつなぐ

パネルディスカッション ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～

図司／皆さんおはようございます。これから第3分科会を始めます。よろしくお願いします。テーマとして「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組みと課題」とつけていただいております。私も例年は、今、朝日町と氷見市で行われている優良事例表彰の委員として、報告会の司会をよくさせていただいているのですが、今回はこのような形で、パネルディスカッションの進行役を務めさせていただくことになりました。最初にこの分科会のねらい・主旨のところからお話をしてみようと思います。例年ですと、パネルディスカッションも県内の過疎の自治体の皆さんが企画していただくケースが多いのですが、今回は新しい取り組みになっておりまして、国の過疎対策室と全国過疎地域連盟の企画のもとに立ち上がった分科会になります。

そういう意味で集落対策に少しフォーカスしながら、具体的には集落支援員の仕組みに着目しながら、理解を深めていきたいと考えております。

といいますのも、集落支援員の仕組みが始まりまして、概ね15年近くになってきています。発端としては、2008年の過疎問題懇談会の中で、集落対策として人的支援を組み入れていこうという画期的な提言が出されて、それに伴って集落支援員という仕組みが導入されました。ただ、人的支援としては、地域おこし協力隊はかなり表に出るケースが多いですけど、同じ時期に始まった集落支援員は、どちらかという地域に根差した黒子役の性格もあって、その役割とか働きぶり、或いはそこにおける手応えとか課題というものが見えづらいというところが正直なところかなと考えております。よく人的支援の研修会を田口先生とともにお手伝いさせていただいていますが、協力隊の研修会は充実しているけれども、集落支援員の研修会は、まだまだじゃないかみたいなお声もたくさん頂戴しております。それは実態がなかなかとらえにくいという性格上のところもあるかと思えます。

そういう意味では、今回パネリストとして4人の方にご登壇をいただいておりますが、田口先生は我々と近いところで、少し研究者目線のところから、現場を読み解いていただきます。小玉部長には行政の立場から、現場の方でうまく支援員の皆さんに活躍してもらう場づくりが非常に大事になってきますので、その辺のお話を小玉部長から頂戴しようと思っております。

小島さん、川島さんは現場で支援員のお立場として、それぞれ自治協議会、集落活動センターのような組織をサポートする形で入られています。いろんな形の支援員の関わり方がありますので、今回はお二方からその活動をご紹介いただき、ご苦労などをお聞かせいただきながら、集落支援員という仕組みを通して集落対策を考えていくところをねらいど

ころに、会場の皆さんと一緒にいろいろ議論していきたいと思えます。

それでは、前半は4人の皆さんからご報告をいただこうと思えます。最初、田口先生の方からご報告を早速ですがよろしくお願います。

田口／徳島大学の田口と申します。今日はよろしくお願いします。

私は研究者として、地域でいろんな活動をしている一方で、徳島県の人口2,000人の小さな村に移住しております。移住する以上は、地域の事は全部やろうということでいろんなことをやりながら、生活をしております。そういう生活をしていると、今まで私たちが見ていたまちづくりって本当にリアルなまちづくりなのか、に疑問に感じることが多々ありました。というのは、我々研究者として、いろんな地域に出かけていくと、その地域のキーパーソンの方々にお会いできるのですが、普通の人たちとなかなかお会いできないんです。地域の9割5分ぐらいは普通の人たちで、ごく一部のキーパーソンの人たちの動きを地域づくりの動きとしてとらえることが本当に妥当なのか、ということを考えています。

私が住んでいる集落は11世帯で、私より若い人が1人もいない、うちの家族しかいないという集落です。このコロナで3年間いろんなものが止まって、今立ち上げに相当苦労している状況です。そして、そういうことを考えていると、単純にまちづくりで盛り上がっていけばいいということではなく、生活をいかに下支えしていくかということもすごく重要だなということを実感として思っております。

そういうときに、いわゆる地域おこし協力隊のキラキラしたもの以上に、集落支援員の皆さんが、実直に地域の皆さんと関わり合いながら草の根的な活動をしていくということが、すごく大事だと思っております。地域の中でよく衰退、衰退と言って、衰退の理由は何ですかという、「人口減少です。」と言いますが、本当に人口なのかということをごく考えていただければいいと思います。

例えば今回のコロナで、3年間いろんなものが止まってそこからの立ち上げが難しい。人口はそこまで減ってないけれども気分が下がってしまったということの方が大きかったりするわけですね。

だからもう一度、地域の衰退とは何かということを考えてみる必要があります。人口は二次曲線的に減っていき、だんだん傾きが弱まっていくのですが、地域を運営・維持していくのに必要な労力というのは人口と同じように減ってくれるかという、減ってくれません。さらに最近では価値観が多様化しており、地域の活動にあまり関心がないという人も、田舎の方にきても結構増えてきている印象があります。そう考

えると、少子高齢化、人口減少で担い手が減っている以上に、価値観の多様化も後押しして担い手がさらに減少し、地域の維持に必要な労力と担い手の数とのギャップが広がり、これが地域にとっての衰退感に繋がっていると考えています。

一例で言うと、昔は10年15年で辞められた消防団が、今の若い人は消防団に入ったら多分一生辞められないんですよ。そういう状況が、地域の中の負担感みたいなものを増してしまっている。だから結局、地域づくりって何だろうかって考えると、この隙間、ギャップみたいなものをどう埋めていっていかってということだと考えるのです。

このギャップは、例えばよくメディアとかで取り上げられるキラキラしたまちづくりだけでは、必ずしも埋めきれないわけで、生活の中のこの負担感みたいなものをどう解消していくかということは結構大事なことだと思っています。

地域づくりとかまちづくりは定義が非常に曖昧で、それぞれ集落支援というの、どこを目指して支援するのか、地域おこし協力隊が起こすというのはどういう状態が起きた状態なのか、地方創生だってどうしたら地方創生しているのかということがほとんどわかりません。基本的には、終わらなき取り組みだとは思いますが、私は、地域の問題点に対して何らかの改善活動をしていこうということが大きな地域づくりの流れかなと思っています。やはり今は価値観が多様化していたり、自治体も広域化してしまって、財政もなかなか苦しいと考えると、戦後、行政頼みの地域づくりが進んできた中で、もう一度、考え直す必要があるかなと思っています。

国の地方創生の話を見てみると、自立の「立」という字が5原則の中の一つに掲げられて、自主財源とか、自分たちで、ということを言われるんですけども、そうでもないんじゃないかと私は思っています。それこそ今日は集落支援員の皆さんがテーマですが、地域おこし協力隊の皆さんもいらっしゃいますし、関係人口の皆さんもいらっしゃいますし、いろんな人たちが地域に関わるようになってくる中で、大事なことは、自分が独立的に立つというよりは、いろんな人たちを上手に使いこなす地域でいられるかどうかです。

僕は「律」という字で使っているのですが、コントロールをすること、そして、それによって地域の自治力をどう再生していくかということが、大事なんじゃないかと思えます。何で自治力なのかというと、行政の団体自治と、住民活動が地域をずっと支えてきたんですが、両方とも昔は充実していたものが、行政は財政も苦しくなり、合併もしていく、そして最近では人員不足ということもあり、ある程度縮小せざるをえない。そして住民は少子高齢化によってどんどん減っていく。昔はオーバーラップ出来ていたものが、最近この間に隙間が生まれてしまっています。

ここを私は「自治の空白」と呼んでいますけれども、これが広

がっているのが現状です。これは今後、残念ながら広がっていく一方なんです。この広がっていく部分をどう埋めるかがということが地域にとってすごく大きな課題なんじゃないかと私は考えています。

埋め方をどうするかなんですけども、何種類かあると思っています。行政は最終的には、徹底的にセーフティネットをしっかり守っていくことが、最大のミッションだと思います。その間どうするか、例えば移住者を集めてくる、関係人口を集めてくる、或いは地域に貢献してくれるような企業を呼んでくる。そういう点もあるかなと。ただそれだけでも埋まりきれないので、最後は、例えばICTの活用であったり、集落活動を棚卸しするとか、全体のパイを減らしていくこともどこかで行っているのかなと思っています。

ただし、ここでの効率化というのは、集落を統合していきましよう、という話ではありません。このコロナ禍で、我々はオンラインコミュニケーションというツールをかなり手に入れました。私の家の隣に住んでいる80歳のおばあちゃんも、コロナ禍で孫に会いたいがためにスマホを入れて、LINEを入れたんです。LINEで、お孫さんの顔を見てると、あたかも会っているようだとしてすごく生き生きしゃべってくれる。こうしていくとむしろコミュニケーションが活発になるかもしれないと前向きにとらえましようということですよ。

決して効率化して集落を統合という話じゃなくて、今までは統合しか選択肢がなかったけれども、分散していてもネットワークさえあれば何とかできるということが証明されたのがこのコロナ禍だったんじゃないかと私はとらえています。ただこれも、率先的に入れようとしている地域と、いやいや高齢者は無理だよという地域の二極化が実は進んでいて、これはちょっと危険だなと気にしているところです。

地域には、いろんな人たちが出入りしています。関係人口の施策もあるし観光客もいるんです。大学も今、積極的に地域貢献しようとしています。ただ、こういう人たちとつき合っていると、地域の方々もお疲れになっちゃうんですね。そういう意味で簡単に言うと、今地域はモテてるんです。いろんな人たちが来たがっている。そして、モテている人達は何をしていいかということ、面食いしていいんですよ。ということは、自分たちにとって、良い仲間を捕まえるチャンスなんですよ。誰でもよいというと、もう自分がただ疲れちゃうんですけど、いろんな人たちが来てくれるんだから、良い仲間を捕まえて、自分たちの地域を良くしてくれるような仲間って誰だろうかっていうようなことを、地域の皆さんもきちんと考えていく、そういうことをしていくと、すごくその地域の体力にあった、或いは地域の身の丈に合ったようなサポートを得られやすいんじゃないでしょうか。そういう意味でいうと、その地域と協働してくれるか或いは地域に貢献してくれるか、或

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ~縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題~」

いは地域と高めてくれるかというようにところで移住者とか企業とか関係人口を見ていくことはすごく大事なのではないかなと思います。

もう一つは、今までは住民至上主義みたいなところがあって、移住の後に、定住が必ずついてくる。私も移住者だからよく「結局定住するの？」みたいなことをよく言われるんですけど、それは正直わかりません。ただ、きっと定住しなかった私の愛はここにありますがよって言う気がするんです。特に私の場合、息子、娘が地域で育っているので、彼らにとってふるさとであり続けるわけですね。そこに住み続けることがそこまで大事かという、今これだけネットワークの時代ですから、仮に離れたとしても、きちんと繋がっているということがすごく大事なんです。例えば離れた先が近くであれば、通うこともできます。現に地域の活動は外に出ていった人たちがサポートしているということは多々ある。だから、現状として、地域を支えているのは住民かという、住民が中心ではあるんですけども、もっと多様なんですね。住民の中でも支えていない人もいれば、住民じゃなくても支えている人たちもいる。こういう外にいる人たちの力をどう上手に使いこなすか、或いは、地域からいろんな理由で出ていってしまう人たちをどうやってその地域に協力してもらえようにするかです。

僕はこれを「重力場」と呼んでいますけども、重力場の中に収めておけるかどうかということが、地域にとっては大事です。今までは住民で支えてきた地域というのがあるので、どうしても何でもかんでも住民であることが大事となってしまうのですが、地域から出ていった人たちが結構地域のことを気にしていますし、お祭りの時は戻ってきます。こういう人たちを出ていったから裏切り者、と切り捨ててしまうとそれで終わってしまうのですが、外に出ていった人たちの力も上手に使っていきこうというような機運を作っていくと、地域は変わっていくのではないかと私は思っているんです。今まで人口で地域を見てきたのですが、結局、地域を担ってくれる人たちがどこにどれだけいるかということに、目線を切り換えていけるかどうかがすごく大事なかなと思っています。だから、単純に人口を再生するのではなくて、自治力を再生することができれば、仮に人口が減ってしまっても地域は守れるんですね。人口が維持できていても、自治力が低下してしまう。

地域にコミットしてくれるような皆さんがいなくなってしまうと、簡単に言うと都市化してしまうと、どうしても地域はなかなか立ち行かなくなってしまう。

よく、地域の中でも、支所や役場があるようなところの周辺が意外と結構、しんどくなってきてしまっているというの、おそらくちょっと都市化が進んでしまっている影響でしょう。なかなか地域の人が活動に向かっていかなくなると、地域の体力がぐっと落ちてくる。「自治力」とは何で規定

されるかという、簡単に言うと「企画する力」、要は自分たちの問題点を考えてどういう手を打てるかという比較をする力と、あとは「実行する力」です。実行する力というのは、関係人口とか大学生とかいろんな力がありますが、一番落ちているかもしれない危機感を持っているのは、企画をする力です。

昔は地域に行くと、地域の状況とか問題点を自覚して地域の皆さんがいろんな知恵を絞って、これをやったら良いのではないかと、こういうお祭りをやって人を集めてこようと、そういう企画をしていたんですよ。ところが財政も苦しくなると、だんだん補助金頼みになってきてしまうところがある。そこでもう一度企画する力を地域がどう取り戻せるかどうか、その結果としていろんな仲間をつかまえていくことができるかどうか大事です。

企画をしながら、ここで使える仲間とはどういうタイプの人たちに協力してもらおうかとかいうことを考えていけるかどうかです。例えば、地域から出ていってしまったけど、地域のことを考えてくれるような人たちの知恵を借りるということもそうです。

単純に地域にほとんど来ることがないような東京の人の知恵を借りてもなかなか地域の人たちが受け入れられないんですね。どうしてかという、例えば、初めて会った人たちから「お前の人生どうする？」と言われてもイラっとくるだけなんですけど、昔からの幼なじみに久々に会って「お前それでいいの？」と言われると、何となく一晩、気になってしまう。ここでは信頼関係があるかどうかということが大事で、信頼関係があるような仲間を、地域の外にどれだけ作っていけるか、ということこれから地域の中で考えていかなければいけません。こういうネットワークをすごく持っているところは、地域をいろんな人たちが支えてくれ、いろんな人たちが自分たちの役割を發揮していく。こういうことをうまく機能させると、私は人口が少なくても人数が多い社会がつかれるのではないかなと思います。これを「少人口多人数社会」と呼んでいるのですけれども、こういう思考の転換と、そこにどう仲間がいるかどうか、しかもこれは単純な仲間ではなくて信頼できるような仲間を作っていけるかどうかということがすごく大事なかなと思っています。

一方で、冒頭に申し上げた通り、地域づくりとは何だろうと考えたときに、地域の皆さんの中にはすごく積極的な人もいれば、なかなか積極的にならない人たちもいるんですね。この図で言うと、上の赤い線がすごく注目される地域づくりの流れなんですけど、実はその下にはオレンジ色の点線があります。地元の人たちがなかなか動き出さない中で、地域づくりをサポートするとなると、この上の赤いラインを上へ押し上げようという気持ちが働くのですが、実は地域全体を守るた

めには、下のオレンジをどう押し上げるかということの発想が、すごく大事だと私は実感として思っています。こういうことをきちんと考えていくことができれば、その先に明るい未来があるかもしれないという気がしております。

集落支援員の皆さんという人たちはどういう役割かということ、おそらく我々のような専門家と違って、地域の前向きな人も、後ろの不向きな人も見ているわけですね。こういう人たち、しかもこういうシンポジウムとかいろんな知見をお持ちになっていただければ、そういう視点を持ちながら、この地域にとってどういう働きかけが有効なのかということを俯瞰的に見て、小さな底上げをやっていけるかどうか。特に、私も心がけてそういった人としゃべるようにしていますが、日が当たっていないけどもいい人ってたくさんいるんです。日が当たっていないけど、いろいろ考えている方がたくさんいらっしゃる。こういう人たちにきちんと話を通していかとか、きちんとサポートしていけるような状況ができてくると、下がぐぐっと押し上がってくる、こうするとチームとしては非常に強くなってくるんです。こういう動きが、集落支援員という、地味ではあるんだけど地域に根差した人たちの活動として、すごく大事なのではないかと思います。ありがとうございました。

図司／田口先生ありがとうございました。集落対策のねらいどころであるとか、最後の話は、外の力も上手に使う中で、集落支援員という立場を、どういうふうに組み入れていくのかとか、その視点から、いろんな示唆をいただいたかと思えます。パネルの後のディスカッションにつないでいきたいと思えます。ありがとうございました。

続きまして、岩国市からお越しいただきました小玉部長から、行政の立場から見た集落支援の仕組み、或いは集落対策のお話をいただければと思います。よろしく願います。

小玉／岩国市から参りました、市民協働部長の小玉です。

私からは、行政の視点が主となりますが、集落支援員制度の導入、運用にあたっての留意事項及び地域での取り組み状況や課題などにつきまして、事例を踏まえまして、ご報告させていただけたらと思います。あくまでも岩国市での取り組みですので、ご参考程度で静聴ください。

まずは、岩国市の紹介から参ります。岩国市は本州の最西端山口県にありまして、経済圏は広島市と一体のまちでございます。人口は約13万人で、他に住民登録のない軍人軍属が1万人以上おられて、住民の1割強がアメリカ人という国際色のある町でございます。岩国市の特徴ですが、多様な顔のある町、というふうによく言われております。特徴とされるのが、工業、コンビナートの町であること、アメリカ海兵隊海上

自衛隊基地の町であること、そして、観光の町、城下町としての顔でございます。観光振興に長く携わっておりまして、私の紹介するパネルの中には随所に観光のPRが入っております。

地域づくりの困難性についてですが、現在の岩国市は平成18年に周辺8市町村が合併し誕生いたしました。広大な行政区域を有していますが、面積の9割は山間地になります。市街地まで道のりで70キロを超える集落もあれば、港から1時間を超える離島、有人離島が3島あります。地域づくりの随所に影響する基地問題もあります。そして、県平均を上回る高齢化率の高さ35%です。小規模高齢化集落の多さは住基ベースで150ですけれども、実態的にはおそらく200以上の集落が、小規模高齢化集落になっております。このように、多様な課題が山積しているのが岩国市の現状です。

集落の持続的発展に関して、本市におきます集落支援、それから中山間振興の推進体制について触れておきます。所管は本庁にあります中山間地域振興室が、旧行政区ごとに設置しております総合支所と連携しながら進めております。集落支援の推進計画として、中山間地域振興基本計画を策定しており、計画の根拠は、中山間振興施策基本条例によります。

本市の集落支援員制度の特徴でございます。ここから集落支援各論に入って参りますが、平成22年度から導入致しております。専任方式です。会計年度任用職員として、行政の所管部署に配置しております。採用方法は公募、市では外部人材の活用として位置付けており、地元採用にこだわらず募集・採用しております。現状の支援員すべてが集落外からの採用で、市外からの通勤者、移住者の方もおられます。現在の任用数は集落支援員として7名、別途、中山間地域におけるUターン促進のミッションを付加した地域づくり相談員が2名の計9名でございます。

集落支援員のサポートと育成についてですが、定期的な情報交換会や研修会を実施していますが、岩国市の特徴的なものは、地域おこし協力隊との合同の意見交換会、研修会を設けていることです。これはミッション内容が、やはり地域おこしと集落支援員、重複する部分がありますので、相互の連携が大事だと考え、合同の研修会を設けております。また、市民活動支援センターとの連携にも注力しております。この市民活動支援センターとの連携では、支援員側は、ワークショップや組織づくりのノウハウを学ぶことができ、センター側は、テーマ型市民活動が手薄な中山間地域へのアプローチとして、相互にメリットを有しております。

サポートにおきまして、大事だと考えておりますのは、業務に関する愚痴をいえる場、吐き出せる場を作ることです。

集落支援員による集落支援の実際でございますが、本市の

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

集落支援員は、集落外の人材が主であるため、採用後に対象地域の実情や役割について、事前学習いたします。そこから集落の声を集める活動、いわゆる戸別訪問による集落点検、それからアンケートなどを行い、まずは集落の人たちに知っていただき、ラポール形成、信頼関係の構築を図る。これが重要だと考えております。それから、話し合い活動、これは新たなコミュニティの場を形成することであると認識しております。わいわいと和める新たな場づくりに努めながら、別途、定期的に集落支援だよりを発行しつつ、地域の方々の住む思いを掴めたところからいよいよ集落の未来について考えるワークショップを開催いたします。回を重ね、意思疎通を図りながら、地域計画である夢プランを策定、そして行政、集落、その他の主体との協働による地域づくりの遂行に着手いたします。

一つの事例から本制度を考察してみたいと思います。事例は、中国山地にある集落で、世帯数92世帯、人口141人、高齢化率69.5%、人口ちょっと多いかなと思うんですが、実態は、小さな集落を束ねた地域ということになります。持続的な発展を目指して集落と行政の協働が上手く機能している事例でございますが、まず集落点検アンケートを実施し、報告会を開催しました。その後から、話し合い活動を継続して行い、集いの場を形成、集いの場の定着を見ながら集落のにぎわい創出を目指し、話し合い活動からワークショップに移行、地区夢プランを策定、成果の指標となる三つの目標を定めました。そこから集落と行政との協働による地域づくりがスタートします。地域、集落が目指すところは、集落の持続的な発展のためのにぎわいの創出と決めました。ワークショップ夢プランの作成風景でございますが、1年間かけてワークショップを開き、夢プランを作成、地域プランである地域計画である夢プランを作成しました。この夢プランに沿った地域づくり、にぎわいの創出には、拠点となる施設がどうしても必要ということがありました。しかし地域にある既存の、活動拠点は廃校舎を再利用したもののため、老朽化もあり、機能性に大きな問題がありました。そこで、新しい活動拠点をオープンさせました。ここは行政の本気度を示すものとして、評価できるものだと思います。

定住人口の増加に向けた移住応援、三つのプランニングの中の一つでございますが、定住人口の増加に向けた移住応援、定住人口の増加に向け、地域住民による移住応援団を結成、市の空き家情報登録制度を活用し、空き家調査、空き家バンクへの登録を行ったほか、移住者への生活サポートを地域の方が行っておられます。

朝市、それからキッチンのオープンです。地産品の販売促進活動として、朝市と飲食店をオープンさせました。メニューでございますが、毎週土曜日午前中の定時オープンのほか、イ

ベント開催時など機会をとらえてオープンしております。飲食メニューは週替わりのため、旬の野菜工夫を取り入れたことで、市外からのリピーターも多くあり、毎回完食、完売となっております。

多彩な催し、新しいにぎわいの創出、交流人口、関係人口を拡大することで、集落の魅力を発信し、ファンを増やし、里帰りの促進や移住意向の醸成を図りました。これらすべて新しく創出したイベントでございます。

目標達成状況です。活動拠点がオープンして以降の3年間の成果指標を定めておりました。それぞれの項目の目標と達成状況ですが、「交流拠点施設での地域産物の販売額」は、目標1,843,200円に対して、実績4,446,220円と目標を大きく上回ることができました。また、空き家バンクの登録、移住応援団の結成、関係人口の増加など「定住人口の増加」は、目標2人に対して、実績7人と、これも目標を大きく上回ることができました。さらに、朝市・キッチン・イベントの開催など「地域産物の販売促進活動」は408回という目標に対して、406回の実績となり、ほぼ目標を達成したということができると思います。全期間がコロナ禍に見舞われておりましたので、控え目な目標ではあってもこれは、達成はまず無理だろうと踏んでおりましたが、関係者の冷めない熱意により全ての目標が達成することができました。

遂行にあたり活用した事業、財源でございますが、農林水産省の農山漁村振興交付金を活動拠点のリニューアル、廃校舎の解体、交流館の新築に活用していました。飲食、物販販売、キッチンの整備につきましては、県の元気生活圏活力創出事業補助金、それからそれ以外の活動支援、それから周辺整備、移住定住支援に関しましては、市の独自事業である各予算・事業を活用いたしました。こういった財源の活用や制度の適用、そのプランニングは当然ですが、行政の手腕にかかっているものです。

集落の変化ですが、地域コミュニティ・集落間ネットワークの強化、関係人口の増加・賑わいの創出、ファン・リピーターが増えました。

営農意欲の向上に関しましては、これを地産品として販売すること、そして移住された方が農業に興味を持っておられたことで、耕作放棄地の減少にも繋がりまして、持続可能で誇りを持てるふるさとづくりが現在も進行形で進んでおります。何より地域の方の声ですが、子や孫が里帰りする機会が増えたということが一番の喜びとおっしゃっている方もおられました。

次にこれは簡単な紹介になりますが、試行錯誤中の事例でございます。少子高齢化の中で、担い手不足やコロナ禍もありまして、価値観や行動形態も変化し、岐路に立つ地域行事があります。岩国市も同様でございます。

ある集落では、縮小開催していた伝統行事の復活を決めました。4年ぶりに地域行事の再開を決めましたが、担い手の負担増や、住民の意識変化が大きな課題となりました。さらに地域行事が文化財指定ということで、負担感軽減のための所作や仕様、手順等の変更が困難という課題があります。伝統を継承したい、ふるさとの宝を守りたい。苦境にある地域行事の存続の問題に取り組んでいる集落支援員が岩国市にあります。現在進行形のため、まだ結論は出ておりませんが、画面でもって岩国市こんな地域行事があるんだなっていうことを知っていただければと思います。

まとめに入ります。集落支援員の活用にあたりまして、私市民協働部長が所管部署や担当職員に注意喚起している内容でございます。あくまでも岩国市の任用形態における事項です。参考程度でお聞きください。

まず集落支援員はプロフェッショナルではないです。集落での事前の地ならしは行政の役割であって、これを集落支援員に丸投げするのは無謀ですし、無責任です。行政による集落との事前調整が、職員の人材的・業務的に難しいのであれば、ミッションの重要性にもよりますが、岩国市であれば、独自事業であります地域づくりワークショップ事業というのがあります。総務省の施策であれば、地域創生施策にありますアドバイザー制度などの活用を図るべきだと思います。話し合い活動を経て形作られるプラン、地域計画を実行に移せる仕組みや財源制度を具体的に想定しているでしょうか。行政の力量の部分ですが、これを想定できていないと、集落支援員の活動は、集落点検、話し合い活動、アンケートを延々と繰り返すだけになります。この点で岩国市の場合は、地域づくりに関して比較的使い勝手の良い独自事業予算を設けております。

集落支援員の導入にあたっては、集落支援員、行政組織、集落の役割をよく整理され、常にミーティングとサポートができる体制を整えておくことが重要です。これができていないと、集落支援員や地域おこし協力隊は単なる行政事務の補助員や現業の作業員になってしまいます。結果、長続きしません。これはすべて本市の経験上からの感想です。簡単なことではありませんけれども、集落の人たちの想いを置き去りにしない支援、集落支援員を孤立させないサポート、そのような行政の姿勢が大切だと思います。

まとまりのない話でしたが、岩国市での集落支援施策の紹介でした。機会がありましたら、ぜひ1度岩国市へお立ち寄りください。中山間地域の集落には、現代社会において困難かつ多様な課題を克服することが期待される多くの強みと可能性があります。地域事情は様々ですが、持続可能な地域づくり、集落への支援、一緒に頑張りましょう。終わります。

図司／小玉部長ありがとうございました。最後の一つ前のスライドですかね。行政の補助員、現場作業員にしないという、赤字の部分に非常に想いが込められていたんじゃないかと思います。今日の一つの論点で後程広げたいと思います。ありがとうございました。

続きまして、支援員としての活動、立場からの現場のご報告、活動の報告が中心になるかと思えますけれども。まず朝来からお越しいただきました小島さんよろしく申し上げます。

小島／兵庫県朝来市のいくの地域自治協議会の小島です。私からはいくの自治協の取り組みを紹介させていただきます。

最初に、朝来市の位置ですけれども、兵庫県のほぼ中央部です。雲海で有名な竹田城、生野銀山のあるところ。平成17年に、朝来郡4町の生野町、和田山町、山東町、朝来町が合併してできた市です。朝来市では平成の合併に合わせて行政範囲は大きくなって、住民自治を強化していく地域自治のシステムとして、「地域でできることは地域で」を理念に、朝来市内の概ね小学校区単位に地域自治協議会を設置し、市内には11の地域自治協議会があります。その中のいくの地域自治協議会は、旧生野町にあり、朝来市の南部に位置するところですが、令和5年4月現在12の自治会で構成され、人口2,455人、世帯数1,100、高齢化率42.4%の地域です。旧生野町には奥銀内地域自治協議会と二つの自治協議会があります。

次に生野の紹介ですけれども、一言で言いますと鉱山のまちです。明治元年に日本の近代化、殖産興業を担う日本のモデル鉱山とするために、明治政府は官営鉱山としてお雇い外国人を招聘し、近代的なモデル鉱山を作り上げて、日本の近代化の礎を構築してきたところです。生野にはフランスからお雇い外国人延べ20数名が明治元年から明治17年ほどまで住んでいました。生野にはたくさんの鉱山関連の遺産、文化が残っていますので、平成26年には鉱山の町としては最初の文化庁の文化的景観の選定を受け、平成29年には生野鉱山の関連遺産等が「播但貫く銀の馬車道鉱石の道」として日本遺産の認定を受けております。

ここからはいくの地域自治協議会の紹介ですが、年1回の総会を開催して、予算、活動計画を決めます。そのもとには運営委員会があり、自治協議会の役員のほか、地域内の自治会の区長や、事業部長などの理事で構成されて、毎月1回開催して事業の進捗状況を確認し合っています。また役員会は毎月1回以上開催しまして、事務局はこれらの会議等の調整・進行を担っています。事業部は五つの部会に分かれて活動を行っているところです。

現状と課題ですけれども、旧生野町時代には鉱山もありまし

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ~縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題~」

たので昭和32年には人口1万2000人でしたが、現在では3200人あまりとなっています。生野鉱山は昭和48年に閉山となり、その後企業誘致なども行いましたが、社会情勢の変化を受けて、工場閉鎖などもあり、企業城下町の特徴であります、著しい人口減少と高齢化で、地域の活力低下というのが課題となっています。いくの地域だけで見ますと、11年前から人口で721人の減。高齢化率も32%から42%となっています。その一方で空き家の増加が顕著で、令和元年には171件です、現在ではもっと増えていると思っています。

このような現状の中で、昨年、活動指針となる地域まちづくり計画を、10数年ぶりに改定して、「鉱山文化を活かし、人が輝くまち 生野」を、まちづくり目標としました。自治協の主たる活動財源は朝来市からの地域包括交付金を財源としています。会員からは、1世帯300円をいただいています。自治協の取り組みですが12の自治会への区活動補助や、ごみ集積施設の整備や、防犯灯の整備に対する補助のほか、活動財源ともなります市の施設や公園管理の維持管理なども行っています。

部会の活動ですが、みどり部会は生野を花いっぱいにするということで寄せ植えなどの活動のほか、河川などの草刈作業なども行っています。いきいき部会では地方鉄道路線である播但線の利用促進のために、播但線利用とウォーキングを合わせたウォーキングトレインの実施や生野駅の待合室で播但線の写真展示なども行っています。あんしん部会は定期的に青パトによる子供たちの見守り巡回を行っておりますし、まなび部会では、オンライン研修や子育て支援のために不要となった子育て物品のリサイクルバザーなどを実施しています。以上が主な活動です。

次に地域おこし協力隊と取り組んでおりますゲストハウスの紹介です。

朝来市では希望する自治協に地域おこし協力隊を派遣してくれていますが、鉱山文化遺産の維持を含めて、増え続ける空き家等の何らかの活用事例ができないかということで、令和元年度に地域おこし協力隊を募集しました。生野鉱山のひと文化をつなぐ職人とうたって、空き家をアトリエ、職人工房、ゲストハウスなどを研究実施してもらえないかと募集しましたら、南アフリカ出身のネル・レハンが応募してくれました。レハンは生野に来るまでは札幌でALTをしていましたが、双子の兄も隣まちで地域おこし協力隊になったこともあり、いくの地域自治協議会に令和2年8月に着任しました。

レハンの提案として空き家を活用してゲストハウスができないかということで、町内の各所を見たのですが、一番投資が少なく取り組めるのが文化的景観の重要構成要素でもあり、朝来市の文化財にもなっております旧鉱山職員宿舎でし

た。生野では一般的に甲社宅という建物です。この建物は明治9年に建築されたもので、当時の生野鉱山の役員クラスが住む官舎です。10年ほど前に朝来市が改修再生した建物で4棟あり、そのうち2棟が宿泊体験もできるように整備されていました。朝来市役所とも協議・調整し、市の施設ですので、条例改正も行っていただいて、旅館業の免許も取得し、令和3年8月に、イクノステイというゲストハウスをオープンすることができました。

イクノステイは自治協の事業として始めましたが、当初は明治9年の古い建物ですし、1ヶ月に2組、4人ほどの利用があったらいいと思っていたんですが、結果的には令和3年度には38組、104人の利用があり、令和4年度は105組、286人、令和5年4月から9月までは104組、257人の利用客があります。基本的には非接触型のゲストハウスで、レハンが窓口となっていますので、コロナ禍が明けてきた令和4年の11月ごろからは、外国人の利用客が増えてきています。

思わぬ収入も出てきましたので、地域の活性化とあわせて、レハンの将来の生活基盤にもなればということで、令和4年度に運営委員会の中から法人化の特別委員会を設置して協議していただきました。令和4年12月には自治協の臨時総会を開催して、設立する会社に自治協が出資するという決議を受けて、いくの地域自治協議会が、大株主となったクリエイティブ生野株式会社を、令和5年2月に設立しました。この会社の目的は生野地域の創造性豊かで持続可能な地域づくりに資するというを目的とし、偕和の精神で地域のために尽くすということを理念としています。

このように、イクノステイが当初の見込みを超えて利用客があるのは、レハンのプロモーションが優れていたからだと思っています。YouTubeで、「銀山町生野」と検索していただきましたら、上位に出できますけれども、この動画はイクノステイのオープン時期に合わせて制作しており、見ていただくと非常にクオリティの高い動画となっていると思います。3分程度ですので、また見ていただけたらと思います。

レハンは大学で工業デザインを学んでいたのですが、写真撮影にも優れておりますし、ドローンでの撮影もしますし、3Dプリンターも使うことができます、すぐれたクリエイターです。

このレハンのこれまでの活動や取り組みを見ておられますと、人が人を呼び寄せてくるという印象を実感しています。いくの地域のように人口が減少していきますと、すべてのものをおしなべて持ち上げるというよりも何か突出するもの、少し成果の見えるものを引き上げていくことに集中することが、結果的には地域全体に波及効果が広がっていくのではないかと思います。明治期に日本の近代化のために、お雇い外国人としてフランス人のコワニエがやっていますが、

その155年後の今日、レハンが、生野再生のための令和のお雇い外国人になるのではないかなと期待しているところで

す。今後のイクノステイの課題ですけれども、宿泊だけではなく、地域の体験とセットにした取り組みを展開していきたいと考えています。

2025年の大阪・関西万博を見据えて兵庫県では、兵庫のフィールドパビリオンに取り組んでいますけれども、イクノステイも地域の歴史遺産、文化、自然、食材等を体験していただけるようなプログラムを作り、持続可能な地域づくりのためにも稼ぐ仕組みづくりが構築できればなと模索しているところで

です。以上私からの発表とさせていただきます。ありがとうございました。

図司／ありがとうございました。自治協議会のいわゆる地域運営組織の取り組みの中で事務局長としてご活躍、そのお立場で集落支援員の肩書きも負いながらということだと思います。詳しいところはまた、ディスカッションのところでお伺いしたいと思います。

最後になりますけれども高知県室戸市からお越しいただきました川島さんから、ご報告をお願いします。

川島／高知県の室戸市からやって参りました川島です。本日はよろしくお願いたします。

私は高知県室戸市に2014年から家族で移住してきました。夫は漁師をしております。2017年から椎名集落活動センターたのしいな集落支援員として着任をしております。移住当時は保育園と小学生だった子供たちも現在は大学生と中学生に育っております。

私の暮らす椎名地区の概要についてです。まず、高知県というのが四国4県のうち真下部分に当たるんですが、その中でも室戸市は、四国の右下高知の右下にあたる部分に存在しております。大阪からですと大体車で六、七時間ぐらい、高知空港も2時間近くかかりまして、辺境の地です。電車も通っておりません。室戸市の人口が1万2000人弱なんですけれども、その中でも、椎名集落はとても小さな集落で、人口330人、世帯数は160世帯で、ほとんどが高齢のご夫婦もしくは単身という形で、高齢化率も60%を超えているような状況です。場所といたしましては、室戸市の東海岸沿いに細長く伸びる集落で、海の次はもう山が迫っているような、平野が少なく海と山がせめぎ合っているようなところに暮らしております。

そこに椎名小学校という閉校した小学校があるんですけど、そこを拠点に集落活動センターという県の中山間地域対策

の取り組みのセンターが設立することが決まりました。さらにお隣にはむろと廃校水族館という、全国的にも有名になった水族館ができて、まず同じ小学校の校舎を併設という形で一緒にシェアして使っているような状況です。「たのしいな」と言わせていただくんですけど、「たのしいな」の運営母体は椎名集落活動センターたのしいな運営委員会という地域の団体になります。

水族館は、2018年にオープンし、今年に入って60万人を突破するぐらい。人口1万2000人の町に人がすごい押し寄せるような状況になりまして、本当に有名な場所になっています。

そういう中で、地区の基幹産業なんですけれども、椎名大敷組合という定置網漁業の大型定置網の組合があります。雇用型漁師でサラリーマン漁師というネーミングとして、全国に発信しまして、水族館の人気とともに結構メディアの取材を受けることがあります。従業員30名なんですけれども、私の夫が入った時は、本当に県外から直接の雇用っていうのは、私の夫以外にはほぼいない状況だったのが、今ではもう半分ぐらいが、県外とか、室戸市の他の地区からいらしているような方になっているような状況です。富山県もブリが有名だと思うんですけど、春先になったらブリが回遊してきて、港中がブリで沸くような状況が見られます。

さらに秋祭りも、すごく規模の大きな素敵なものが行われていまして、私が引越してきたのがちょうど9月の末で秋祭りの準備が始まる頃でした。何も知らずにきて、このお祭りを見たときに本当に感動したんですね。小さな子供たちから大人までが集まって踊りの練習をしたり、若者がたくさん帰ってきたりしながら神輿を担いだりしているのを見せていただいて、すごいなっていうのを感じました。次の年からは夫も神輿を担いだり、子供たちも、舞姫とか稚児とかの役を頼まれたり立ち踊りも踊るようになったりというふうにしたんですけど、コロナ禍でしばらくは神事のみ状況が続く、今年こそ復活という話が春先までは出てたんですが、同じく8月9月の神社の長の方々の話し合いの中で、今年も神事のみというようなことになってしまって、本当に今ちょっと存続が心配されているところで

です。その中で「たのしいな」の活動なんですけれども、話し合いを続けて6本の柱を基本にしてやっていこうということが決まりました。もともと椎名地区が高齢化も進んでいたり、小学校も閉校になったりという過程で、婦人会、老人会といった母体となるような活動団体が全くないような状況でした。残っているのがもう消防団活動や椎名の自主防災組織、あと大敷組合って会社があるような状況の中で、本当にここに書いてある6本の柱に沿った活動団体、椎の実げんきクラブも全部、ほぼ「たのしいな」が設立されてから活動が始まったよ

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

うな団体になっております。

組織図なんですけれども、中心に「たのしいな」の運営委員会がございます。こちらは地域の有識者や長の方が、メンバーとして構成されておりまして、その傘下に実際の活動グループとして部会のような形で、様々な活動グループが存在しております。

室戸市のふるさと応援隊として、もう1人、地域おこしの協力隊の職員がいるんですけれども、私と2人で、その運営委員会とか活動グループのフォローであるとか、企画支援であるとか、あと行政との調整役というものを担っております。実際、建物のリノベーションが終わって、オープンするまで、私は半年前に着任して、拠点の施設がないような状態で市役所から通っているような状態だったんですけど、まず着手したのが、月1の集落通信の発行でした。その時は私自身暮らして、三、四年経っていたんですけども、他の場所に働きに行っていたり、週末は子供の用事でスポーツクラブの用事で出たりっていうので、全く地域のことわからない状況だったりして、A4の紙の片面を埋めるのが精一杯だったんですが、今ではA4、6ページぐらいですかね、本当に集落のローカルマガジンみたいなものになって、大敷組合長からの記事をいただいたり、むろと廃校水族館長からの記事をコラムとさせていただいたり、私自身協力隊員もコラムを書かせていただいたりして、これをもとに、いろんな活動を発信しているような状況です。

具体的な活動を見ていきたいんですけども、まずはたのしいな運営委員会が主催している活動として月1のピザづくり講習会と、夏場に行うピザ焼きの体験イベントがござい

ます。ピザ窯をまず作りたいね、ピザをやってみたいねと作ったはいいいんですが、じゃあ活用ということになったら、委員さんが尻込みしたり、義務感にとらわれてしまって、「これやらないかんが?」「行かないかんが?」みたいな言い方をされるようになったので、いやいや、そうじゃなくて、「皆さん来たい方は来てください。強制じゃないですよ」というのをまず言いました。もうやりたい方でまずやらないと、続かないかなというのを感じたので、そういうふうになんか言わせていただいて、来ていただいた方ではもうやりたい方が来ていただいて、メンバー自身が楽しく続けられる場っていうふうな形で続けております。

その中で、せっかく大敷があるんだから、魚を使ったトッピングしてみようとなり、朝、港に行って魚を仕入れるところから始めました。磯もんと呼ばれるアワビとか、サザエとはまた違った小さな貝を、磯に行って取ってきて、茹でて食べるような文化があるんですけど、そういった磯もんをトッピングに使っても、結構県外の方とか観光客面白がるんじゃないかと

いうので、大潮の日をねらってみんなで磯に行って、磯もんを獲るところから始め、ちょっと楽しいと思う場を一生懸命作っています。それを観光客とか他に広げるような活動をしています。

たのしいな運営委員会は地域文化祭も行っていきます。これも他の地域では、地域文化祭ってやられているのを見てきたんですけども、椎名にはありませんでした。ただ住民の方とお話していると、習字の先生をされていた方とか、押し花を教えられている方とか、「名人」はいっぱいいるなと感じて、その作品をみんなで広めよう、みんなに見てもらって、お互い褒め合う、愛であうような文化を作りたいなということで始めました。今年5回目になるんですけども、集落の人口が減ったり、作っていた方が入院されたり、本当残念なことに亡くられたりということも起こったりという中で、作品を出してくれる方が年々減っていきつつある状況でもありません。その中でも、水族館の来年のカレンダーの原画を一番に公開される場としたり、今年は地域にゆかりのある方、例えば兄弟ですとか息子さん娘さんが地区以外に住んでいたとしても、そういった方の作った作品も出してみる、他の地域の集落活動センターさんにも出展を呼びかけて来てもらう、ということで盛り上げていこうとしているところです。

地域カフェとしては、椎の実さんというグループの「ちいさな海のカフェ」が最初に始まった活動になります。母体となる施設や団体がない中で、何をやろう、まずみんな集まる場を作るうや、お茶飲み場やたらつくれるかもしれないということで、メンバーが集まって作られました。ただメンバーの中には、お菓子づくりとかをしたこともない人がいたんですね。お菓子なんか作ったことないし、他の人やってや、と違う仕事ばかりする方もいたんですけども、メンバーが入れ替わったり、やっていく中で、私も作ってみようかなという感じも出てきました。70オーバーの方なのでバリバリに社会人として働いていた時代もあったりするけど、家事とかお料理とか全然してこなかったような人が、自分で1からレシピを調べて作り始めました。家にオープンを買って試作したものを持ってきて、それがすごくおいしいから次のカフェの時はメニューにして出そうよみたいな話になったら、もう本当に生き生きしてきたんですね。人任せにしていた分を自分が担うようになって、何か責任をつけてあげたり、自分で何かするという行動を起こす手助けをするのがすごく大事です。70歳過ぎてても80歳過ぎてても人はどんどん成長できるし、するんだなっていうのは、見ててすごくいいなと思っています。

このカフェをやるたのしいなの場所は地区の中心にあります。移動手段が無くて一人暮らしされている方も多く、細長い集落なので、端と端のお友達同士のおばあちゃんも減多に会うことができなくなって電話でお話したりしているんで

すけれども、その方たちも月に1回であれば、何とか移動手段を考えてきてくれたり、頑張っ歩いてきてくれます。ここに来れば約束をしなくても出会えるということが大事で、2時間しかカフェの時間がないし、月に1回しかやらないんですけど、出会える確率も高いです。密度の濃い場となって、1時間2時間でワッと人が30人ほど集まり、元気にしとつかとか、顔見んかったけど元気かねみたいな、ちょっと安否確認の場であったり、そういった機能も持っております。

げんきクラブは、県下で行っている100歳体操という事業があって、グループが、センターができる際に、この地区でもやろうということで始めました。体操のほかに、手芸など何かをやるということに、市から補助が得られるような仕組みです。

初めは勢い良くマシンを買って欲しい、私達手芸すると言って頑張っていたんですけど、時間が経つ間にメンバーも更新されないまま、どんどん老いていくような状況になっています。入院されたりしてメンバーが減ってしまったり、だんだん目が見えなくなって、手縫いができないよとか、細かい仕事ができないというので、意欲が低下してくる部分があって、私たちがどんな活動なら喜びながら、やりがいも得ながら、充実したものにできるか模索中なところではあります。

次に「たのしいなこどもクラブ」ですが、この団体は、私が企画して立ち上げを行いました。私自身が会長になっております。私は子供を3人連れて引っ越してきましたが、室戸の中でも僻地になるので子供たちはスクールバスで通っております。そうなってくると、放課後がない生活なんですね。放課後に友達の家遊びに行くとか、友達とその日急に約束して遊ぶってことがもうほぼ不可能になります。他の子なんかも聞いていてもやっぱり遊べなくて、家で籠っていたり、土日も、お母さんの手を借りないと友達の家にも行けないような状況です。その中で、椎名なんかつまらんし、室戸なんかおってもいやないし、早う出ていきたいとか、こんな何もお店もないとこ居るの嫌や、みたいな文句がどんどん出てくるんですね。こんな不満ばかりのまま、子供たちが巣立っていったら、もう室戸のことも椎名のことも嫌いなまま終わってしまう。そんな悲しいことはないなと思ったので、ふるさとへの愛着を育てられる場所が作れたらいいなと思って作りました。子供たちが集まって、何する?、自分たちで決めてみて、何してもいいよ、できることなら支援する、という形で始めました。ご飯づくりをしてみたり、浜で遊んでみたり、ちょっと基地づくりをしてみたり、何かするにはお金が要るよね、じゃあそのお金どうしたらいいかな、みんなで稼ごうよと提案して、水族館もあるし、夏休みだったら人もたくさん来るというので、こどもカフェであるとかこどもマルシェという企画をしたりしてきました。コロナ禍で、お母さんたちの意識がいろいろ

あって気軽に集まれない状態が続いていましたが、ちょうど去年ぐらいからちょっとずつ集まるようになりました。お楽しみ会から始めたり、新入生の歓迎会から始めたり、違う活動グループの販売活動に有志でいいから親子で参加してもらえませんかとか繋がりだけは保つようになら、お母さん同士でのグループLINEも作っています。OBも販売活動などには手伝いに来てくれるような状況になっております。

椎名大敷組合主催の「お魚まつり」はコロナ前に3回ほどしておりました。漁師さん自身が出店、お料理をして、料理を振る舞う、魚を売るというようなイベントを行いました。大敷組合では、朝、白いご飯だけ持っていったら、朝獲れの魚とあら汁を、みんなで同じ釜の飯を食う文化が残っておりまして、コロナ中何度か中断はあったんですけど、今もう復活しております。その時に出る賄い汁の漁師汁がすごくおいしいと聞いていて、じゃあ、それを売ってみませんかという提案を最初にしました。漁師さんからすると毎日食べていて、もう食べ飽きている部分もあるし、こんな余りもの入れた汁売っていいんか、値段をつけて売るもんやない、といろいろ言われたんですけど、絶対売れますからぜひやりませんかと提案をさせていただきました。ただ、やるのは皆さんなので、やるやらないは皆さんで決めてくださいと話し合いをして実現をしたのが第1回目です。それ以降は漁師の刺身定食だったり、ブリの盛り放題定食であったりというのを企画しました。今年も春に復活させようかって話が出たんですけど、準備が間に合わなかったり、あとブリ自体がちょっと、今年室戸では不漁になってしまった関係で、残念ながらできませんでした。ブリのブランディングも今室戸市では始まっているので、それと合わせて来年こそは開催したいなという話をしていきます。

「しいな遊海(ゆかい)くらぶ」という団体についても、企画と立ち上げを私が行いました。ただ、代表は地域の元椎名大敷組合の長である方とか、漁協の支所長であった方とか地域の名士の方になっていただき、文化の発信、体験プログラムを作って、港のまち歩きであるとか、ビン玉編みであるとか、椎名や室戸の魅力発信を行っています。最近、体験プログラムを作って販売できるようなシステムを作ったおかげで、すごく物事を作りやすくなりました。新しく地域おこしの協力隊の観光担当であるとか、海洋深層水のPRの隊員が来た時に、何していいかわからず、ちょっと戸惑っているときがあって、そういうときに、この場を使って何か企画ができるんやったら使ってくれていいよと言っています。現隊員、OBの隊員の子も、今もスタッフとして参加してくれているんですけど、そういった地域おこし協力隊の自己実現とか、居場所づくりの場としても少し機能しているような状況です。

大敷の魚を本当にみんなに知ってもらいたい。若い人を中

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

心に、室戸の港町に住んでいても魚を捌けないお母さんも多くて、魚、面倒くさいし食べんわ、という方もいたり、逆に豊富だから見向きもしない部分もあります。そういう魚離れを防ぐために、ご当地ドック、ご当地食を作りました。大敷の漁というのは、定置網でも朝になってから漁に行けるかどうかにも決まるような状態で、朝潮の流れが悪いし今日はいかんとか、昨日まで獲れていたブリが今日になったらもう全然獲れないとか、もう日によって獲れる魚も様々で、獲れるかどうかにもわからないんですね。

その中でどんなふうに魚にフォーカスしてブランディングするのか、すごく難しいのですが、そうじゃなくて、そういった獲れないとか、時期や季節によって変わるってこと自体をPRしたらいいんじゃないかと考えました。季節ごとにお魚の内容も変わって、それに柑橘を合わせたらすごくさっぱり美味しくいただける。地元の移住してきた方に、室戸の野菜を使った専用のピクルスを作ってもらって、地元のパン屋さんのパンを使って、すべて室戸産で販売をさせていただいています。去年から本格的に季節ごとのイベント販売を行い始めたら、いろんなイベントからお問い合わせが来ています。私たちには体験も食品も両方ありますが、イベントに合わせて食品だけで出展してみたり、体験だけを持っていたり、両方持っていたり、臨機応変に動いているような状況です。

今後もしていきたいのが、すでにある海の資源を使って、見せ方を変えて発信していくことです。そこには地元の方がスタッフとなって関わっていただいたり、親子が関わっていただき、巻き込みながら活動を続けているような状況です。発表は以上です。

図司／はい、ありがとうございました。集落活動センター、地域運営組織の高知県版になりますけれども、その中で活躍されているということで、多様な活動をご紹介いただきましてありがとうございました。この後ディスカッションに入っていきたいと思います。

お聞きいただいたように集落対策の切り口も多様ですし、そこにおける支援員としてのお立場での対応だということも見てきたかと思いますが、改めて少し皆さんとお話伺いながら整理したいと思います。

まず岩国の話ですね、小玉部長にご紹介いただきましたけれども、集落支援員さんの役割っていうんでしょうか。どういうところで、どういうねらいで活躍して欲しいというふうにお考えかと改めて少し整理してお話いただけますか。

小玉／集落支援員さんの活躍の場、役割なんですけども。実態的には、地域おこし協力隊員さんと非常に重複する部分があります。その一方で集落におきましてはもう限界集落に

近い集落、小規模高齢化集落におきましては、社会保障における、地域包括的な役割であったり、福祉委員さんのような役割であったり、ちょっと広く地域の特性によって変わってくるのかなと、思っております。社会保障的な部分に関しましては、やはりそれを担うのは社会保障の部局であり、地域包括でありその役割を深化していくべきだろうと思っています。私の方としては地域づくりになって参りますので、その地域の思い、それから夢、そういったものを集落点検の中で引き出して、形作ってくれるのが集落支援員の役割かなと思っています。ただし、孤立しないように、集落支援員さんが浮かないようにという支援は大事だと思っています。

図司／はい、ありがとうございます。そう意味では先ほど事例の中でもご紹介いただきましたけれども、その地域の皆さんに声をかけたり、お話を聞いたりとかアンケートをとりながら、それをビジョンにまとめていく山口県さんの夢プランってというのは、県の事業ですよ。そこに繋いでいくというお話が、ある意味骨格としてあって、先ほど伝統芸能の話もありましたが、地域の方もそういう動きも一緒に絡んでいるんですか？そこはまたそういうプランづくりとはちょっと別の地域の中での動きになるんですかね。

小玉／伝統行事の方で少し深めたかったのは、新任されたばかりの集落支援員さんで、今大きな壁にぶつかっていますよって話なんです。ですが、地域の方からは、このまままだとこの伝統芸能を続けていくことが難しいって状況にきていますので、その新しい若い集落支援員さんなんですけども、その知恵を出して、文化財と調整をしつつ、どう残していくかっていうことを今苦労しながら進めておられるところです。まだ私の段階では傍観をしている状況ですが、楽しみに待っているところです。

図司／ある意味その地域の一番大事なところを一緒にあって、まずは関わりながら信頼関係を作っていくっていうか、そういうところも含めてということなんでしょうか。

小玉／そうですね。地域行事に関しましては、地域の宝で残さないといけないという観念がですね、少しこのコロナで変わってきたかなと思っています。4年間3年間、地域行事が止まっていたから、復活する段階でまたやるのという声結構出てきていました。そういったことも含めて、集落支援員さんの役割としては、これを存続していくことの大切さ、これが地域の誇りになるんだよってということと一緒に考えながら進めていけるといいなと考えております。

図司／はいわかりました、ありがとうございます。続いて小島さんですね。地域の自治協があってそこに事務局長という形もありますけど、これは本当は行政の方がいらっしやれば、その方に聞いたほうがいいかもしれないんですが、各自治協の事務局長として集落支援の仕組みをうまく絡められている感じですかね、それとも生野の場合がそういうふうに、特出してそういう扱いになっているか、その辺をおわかりになりますか。

小島／朝来市の場合は、集落支援員として、一般の方を募集せずに、自治協の事務局長を任命しています。また、市の職員の中で地域に関わる地域担当職員がいて、各自治協を支援する立場でいてくれています。ですから集落支援員というのは、朝来市の場合は各自治協の事務局長という位置付けです。

図司／ある意味、事務局長の皆さんの人件費のところを、集落支援員の制度を使ってみている、そういう解釈でよろしいでしょうかね。なるほど。ありがとうございます。川島さんのところは、室戸で「たのしいな」の中で活動されていますけれども、他にも集落支援員さんっていらっしやったりするんですか。

川島／現在集落支援員が私含めて4名おります。そのうちの二名は他の集落活動センターの担当の支援員になります。もう1人が集落活動センターにまでなるかどうかかわからないけど、地域として声が上がっている小さな拠点づくりの事業として採用された方が1人おります。

図司／なるほど。ということは、ある意味、集落活動センター、地域運営組織みたいなところを作っていくところに、支援員さんにサポートに入ってもらってるとそういう理解になります？

川島／そうですね。

図司／なるほど。はい、ありがとうございます。これ以外のケースも実はあるんですけども、去年、過疎連盟の方で、報告研究会で報告書を出していますので、またそちらもご覧いただければと思います。田口先生、今の話どうですかね。集落支援員、いろんなところに活用されていますけど。

田口／今日ご報告いただいたものは全然違う活動ですけど、この違う活動ということがすごく大事だと思っています。やっぱり地域の状況は地域によって全部違うので、この地域に

とってどうしてこ入れが一番有効であるかという時に、室戸でいうと、やっぱりそういった元気づくり、「たのしいな」ってすごい良い名前だと思いますし、朝来だとその地域の基幹的な自治組織をきちんと運営するようなことをやられています。朝来がこれだからうちでもこれやるというのではなくて、今日お越しになっている皆さんもそれぞれの地域の状況が全部別々にあって、その中にどうしてこ入れの仕方が一番有効であるかっていうことを、行政としてきちんと状況判断をして、そこに入れている。だから、結果、やる活動がバラバラになっていくということは、ある意味すごくリアリティーのある話だなと感じました。

図司／ありがとうございます。私も岩国にお伺いしているりと部長はじめ、皆さんに伺ったんですが、印象的だったのは、市として中山間の条例とか、計画作られていますよね。他ではなかなか無い気がするんですけども、どうですか、やっぱりこう一つ幹みたいなのがあると活動がしやすいのですか。

小玉／表面的にはこれが根幹になってですね、計画策定をし、それで進捗状況は図れるわけですから、これはすごく有用だと思います。本音の部分で言うんですけど、これ定期的に議会報告があったり、報告書を作らないといけないんで、ちょっと時間も取られてもったいないかなというところですが、新たにスタートする上ではやっぱりこの計画・条例ってというのは、必要性は高いんじゃないかなと思います。

図司／その辺も、参考にさせていただければいいかなと思います。ありがとうございます。さっき田口先生に言っていただいたようにいろんな地域に合わせた集落対策とか支援員の皆さんに入っていただくとなると、そこにどういう方が適しているのか。まず小玉部長、岩国の場合は、地域内外問わないけれども結果的に外の集落というか地区外の方が入っている話でしたけれども、その辺はどうですかね。

小玉／一般公募していますので、その地域、対象になる支援をする集落の方が応募されても構わないですけども、その集落の方から選考しようっていうのは避けたほうがいいかなと思います。というのが、その集落支援がうまくいってる時にはですね、いいんでしょうけども、うまくいかなかったり、トラブルが起きたりすると、その集落におられる方だと逃げ場がなくなっちゃいますから、そういった観点からも広く募集、考えています。それから、集落に何らかの行き詰まりがあるからこの支援が入るわけなんで、その視点を持って人っていうのは、内部よりも外部からの方がいいかなと思っておりま

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

す。そういった意味でも、地域おこし協力隊と同様に、うちはこの集落支援員制度は、外部人材の活用という位置付けでもって推進をしております。

図司／ある意味当初は地域に精通する方っていうと、むしろ地域の中の皆さんが担う想定で支援員の仕組みが立ち上がってききましたが、そうじゃない切り口もありうるということでしょうかね。

小玉／はい。決してその地域の方を阻害したり、おいてというわけじゃないんですね。その集落の方が応募されてもいいんですけども、やっぱり面談をする時、考え方を聞くときに、やっぱりその人物像でもって採用したいなと考えております。

図司／ちなみに、岩国は、複数の人数を置かれていると思うんですが、性別や年齢層について、何となく雰囲気構いませんので、ご紹介いただくと皆さん、いろんな方がいるイメージがしやすいかなと思います。

小玉／地域づくり相談員を入れて9名おるんですけども、このうち、70代が1名、60代が3名、あとは30代、40代ですね。男性がお一人で60代の方、後はすべて女性です。

図司／私も現場で女性の皆さんや40代の方からお話を伺ったんですが、世代とか、それぞれ適材適所で配置する形になりますか？

小玉／はい。良い人材が今残ってくれているなと思います。うまくいかなかった地域に関しては去っちゃってるんで、今残っておられる9名に関しましては、非常に個性的な方、特に若い方が、別の集落から支援する集落へ移って、支援をしているわけですけど、自分のところではこうだよっていうのを活かしながら、コミュニケーション取りながらいけるんで、外部の成功事例とかに関しても、スッと入って話をできる、引き出せる。そういった意味でいいかなと思います。だからやっぱり人物像でもって選ぶべきかなと思っています。

図司／はい、ありがとうございます。続いて小島さんですけども、小島さんご自身のご紹介があんまり先ほど時間を取っていただかなかったので、どういう人なんだらうと皆さん思われていると思うんですが、事務局長になられる、その経緯みたいなところを可能な範囲でちょっとお話いただければと思うんですが、いかがでしょうか。

小島／私は元市役所の職員で、地域自治協議会の立ち上げ時期も関わってまして、退職してから、生野の自治協からお声がかかりました。立ち上げに関わっていますので、逃げることはできませんし、やらなきゃあない、ということでやっているということです。

図司／はい。ありがとうございます。他の自治協の事務局長の皆さんっていうのは、必ずしも市役所とか行政OBじゃない方もいらっしゃるんですか。何となく雰囲気構いませんが。

小島／7割ぐらいは、市役所のOBです。やはり自治協は市役所と連携することが結構ありますので、そういう面では市役所の職員の方がしやすいと思っています。

図司／そういう意味でやっぱり適材適所なんですね。先ほど地域精通者というか役場のOBの方がちゃんとこういう形で入っていくと、先ほどの役所とのやりとりも進めやすくなると思うんですが、具体的に事務局そのものがもう裏方ですよ。その事務局長としての小島さんの役割とか、この辺が結構、肝で動いているみたいなのところってありますか。その場その場という感じですかね。

小島／情報共有は大切にしたいなと思っています。お前がやっとなやないかい、みたいなことにならないように、役員会や運営委員会では共通認識をした上で進めていくことを意識しています。今回のゲストハウスにしても、ある面、リスクもありますので、情報共有し、共通認識に気をつけながらやってきたつもりです。

図司／いろんな取り組みを皆さんやっているけど、みんなでやっているよっていうことを、機会を見つながら共有していくところに、ある意味腐心されているんですね。ありがとうございます。

次に、川島さんとしては、そもそもどういう経緯で支援員になったかみたいなところをお話いただくといいかなと思うんですが。

川島／室戸に来た当初は、子供の引っ越しに関しての精神的なケアとか、送り迎えがあったので、しばらくお仕事お休みし、何もしてない状態で半年ぐらいいたんですけど、もうそろそろパートでも始めようかなぐらいの時に、ちょうど観光協会のパートの募集を見つけて、室戸世界ジオパークセンターという廃校になった中学校をリノベーションした施設で、受け付け業務を始めました。観光にも少し関わって、結構いろんなお電話がかかってくるんですね。連休前だったらこの宿

がいいですか、どこがありますか、室戸ってダルマタ日とかダルマ朝日が見られるんですけど、それはいつ、どこで見られますかとか、お祭りの問い合わせとか、いろんな問い合わせがある中で、やっぱり室戸市全体のことをいろいろ覚えて仕事としてやっていくにはちょっと広くなって感じてしまったんですね。観光の仕事はすごい楽しくて、人と話すのも楽しくて、自分が感じている室戸のよさをお話するのも楽しかったんですけど、ちょっと手に負えないみたいな気持ちにもなるところで、ちょうどこの集落活動センターができる、廃校水族館ができるよというお話が自分の住んでいる地区に出てきました。私の中で降って湧いた気分だったんですけど。実は小学校の利活用の公募というはずとされていて、10年ぐらいされている中で誰も公募、企業もしないような状態でしたが、日本ウミガメ協議会という、その今の水族館を運営している組織が、研究員を10年以上、椎名に在住させて活動してきた恩返しみたいな形で資料館みたいなもの造れないかというような申請を始めたのがきっかけに、室戸市側としても水族館の構想が出てきて、一気に加速度的に始まった計画でした。自分が住んでいるところに水族館が出来るのはすごいし、しかもそういう拠点施設ができて何かにぎわいが出る、何かわくわくするな、みたいな気持ちがあって、最初の話し合いの会から参加させていただいたんですけど。地域として、観光施設が急にできることに関しては賛否両論があったり、造ったところで維持管理費どうすんだとか、そんなお客来るのか、室戸だぞ、みたいな話もたくさん出てきていました。オープンしてみればすごい、全国的にバズってしまって、Twitter（現：X）とかでも拡散されてどんどん人が来る状況が生まれています。私は単純に、面白いことができればそんな面白いことないし、子供がいたので、まず住んでいるところを面白くしたいとか楽しく生きられたらいいなというのが、最初でしたね。

図司／ありがとうございます。ここもやはり先ほどのように、いろんな狙いに合わせて、どういう支援員さんに入ってもらうか、どんな方がいいのかがまた連動してくると思うんです。田口先生どうですかね。地域の中のパターンもあるし、外のパターンもあると思うんですが、その辺どうぞ覧ります。

田口／すごくわかりやすく。先ほど川島さんは、移住者であるってということも大きいなという気がするんです。地域の皆さんが、なかなか地域のことを前向きに評価しづらくなってきており、特に中堅の皆さんが、自分たちの存在とか価値を当たり前のものとして思っている時に、移住者は、その地域を前向きに選んだ人たちであり、全く違う地域の見え方ができることにあります。まかない汁が上手いのが地元の人た

ちはわかってないというのと多分同じだと思うんですけど、外の目線で伝えていくことはすごく重要です。同時に、そこからやっていくときに、先ほどの小玉さんの話にもあったとおり、地域で実務を動かしていくときは、行政の皆さんが持っている事務処理能力、事務局能力が効いてきます。システムがある程度あってそれを運営していくことに関して、行政職員の力は結構大きいですが、何か新しいものを0から1に変えていくには、突破力みたいなことは必要ですよ。その時に移住者の力が重要です。私も移住して、何でわざわざこんなところで住んでいるのとすごく言われるんですが、僕は何でわざわざこんなところに進む価値があるかっていうことを100倍返しぐらいに言わないと、なかなか理解してもらえないです。だんだん暮らしていると伝わってくるころがあって、そういう時に外から来た人たちの存在は地域にとっては良くて、だからうまく機能しているんだらうなという気はすごくしました。

図司／そうですね。岩国もやっぱり外の地域、移住みたいなことではなくても、同じ市内でちょっと離れたところの地域の人たちが、関わっていく役割も持てるという話もいただかんじじゃないかなと思います。ありがとうございます。

ここまで導入というか、入口の話をしてきましたけれども、次に、皆さん方のお話にあったように、支援員さんと地域の関係、支援員さんと行政の関係というところが、いろいろ効いてくると思うんですよ。皆さんとの打ち合わせでお話を聞いているときも、手応えもあれば、苦勞された話があったりするので、その辺のお話をぜひ共有できればと思います。まず地域の皆さんとのやりとり、支援員と地域の皆さんの動きの中で、良い動きもご紹介いただいていますけれども、ご苦勞されていたりとか、こういう場面で大変だったみたいなお話を聞いてみたほうがいいかなという気がしています。まず小玉部長、岩国ではいろんな地域で支援員さんが動かれていますけど、地域とのやりとりの中で支援員の皆さんが苦勞された話もいろいろ耳に届いていると思うんですが、そこにどうやってカバーされたか、みたいなところも含めてお話いただけますか。

小玉／失敗例から言うんですけど、集落支援員を導入し、地域に入っていくときに、私、大切なこととして事前の地ならしは行政の役割だよ、これは必須だよというお話をしたんですが、これが中途半端にしかできてなかった事案があります。集落点検にいきなりその人、頑張って行ったんですけども、行った方々に何本かうちに電話が入ってきて、不審な人が来た。あれはどういう人なんだと、うちはそんなのいないよと。それから個人情報も聞かれたことにすごく憤られ

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

て、その人の役割がわかってなかった、周知できてなかったから、もう早速、しょっぱなで、くじけちゃったなというのがあります。集落の代表の方には話は通っていたようなんですけども、末端の人までこういった人が訪ねてくるよとか、こういう役割で来ていただけるんだよっていうことが、うまく伝わってなかったっていうのがあります。その他、集落との問題というよりも行政担当者との軋轢の中で、残念ながら去っていく方っていうのがあります。

かなり熱意を持って、集落支援員さんでも入ってこられてこういうミッションやりたい、こういうものをやりたいと、いろんな発想できる方がおられるんです。岩国の場合、若い方が集落支援員さんに多いので、いろんな発想とか夢を持って集落に当てはめて、集落の人と一緒に話をして、これできるといいねという話でプランニングもすごい上手なんですけども、それを実現できる行政の仕組みがネックになって進まなかったり、点検とそれからアンケートと話し合い活動のもう無限ループに陥っているところもあります。この3者、集落支援員と行政と集落の役割が上手く機能してコミットしてないと難しいなと思っております。

関司／できれば事前に目線合わせをしっかりとやるとか、地域の皆さんにも、その地域の皆さんに支援員さんが行きますというのは、事前に配って周知しているとか結構アナログな話ですか。

小玉／そういったところもあります。配りものでやっているところもあります。集落の会合があるのでそういった場で情報提供させていただいたりもしています。

関司／ありがとうございます。小島さんのところは支援員の立場としてというよりも、別格になるかもしれませんが、派生して、地域運営組織の話もおそらく集落対策として集落連携の要素が大きいですね。実際に、自治協の動きをされていて、ご苦労されているような、或いは事務局長の立場でご苦労されているような話あれば、少し話題を出していただければと思いますがどうでしょう。

小島／地域自治協議会は任意団体の住民自治組織です。通常の企業の組織のような雇用契約で結ばれたものではありませんし、私もアルバイトです。あくまでも社会関係資本という人間関係的なところで繋がりを維持している、それが規範にもなっているわけです。そして、運営委員会を構成している各自治会の区長も、どうしても毎年入れ替わりもありますので、そんな中で規範を維持しつつ、みんなで行っていただかなければなりません。お前が言うならしゃあないな、と

というようなことが大事になってくる部分もあります。雇用関係ではないところをどう繋いでいくか。人間関係調整学芸員というのがあったら良いのではと、私は前から思っているんですが。

関司／ありがとうございます。確かに役員さんも変わったり、人が変わる中で、ある程度、組織、チームとしての一定のポジションをキープしていくのは、それなりの馬力は要るなと思います。かといって、マニュアルでいくような話でもないと思うので、そこを丁寧に行っていくご苦労でしょうか。

川島さんはいかがですか。地域の関係、地元ということもありますけど、或いはそれこそ行政の皆さんとの関係、ご苦労話はありそうですが。

川島／私は立ち上げの会から事前の会から関わっていたんですけど、その時から担当課の課長さん今までで4回変わっているんですね。補佐とか班長もどんどん異動している。なので、人を頼りにしないというか、そこに依存をしない意識でおります。課長が変わるとちょっとずつ方向性とか、やっていいことのクッション、ニュアンスが変わってきちゃうので、この人にはこういうことをきちんと報告しなきゃならないんだとかということになってきます。言わなくてもどんどん自分のやりたいことやっても、やらしてくれる課長さんいれば、やっぱり報告してないとちょっとムッとされたりする場合もあるので、まず報告はめっちゃくちゃ大事にしています。ただでさえ違うところに施設があって、職員さんから見えない状況があるので、悪く言えばサボろうと思えば、なんぼでもサボろうと思えばできてしまいますが。まず、今週の予定から、どういふ人とおしゃべりして、でもその中でこういう課題が出てきたとか、こういう悩みが出てきた、ということも話します。ただ、それに対して何かしてくれてというのはあまりなくて、本当に報告ですね。自分のやることをきちんと伝えておく。

私、11月に着任してその次の月の12月からもう集落通信を始めたんですね、施設がないところからスタートしました。これは他のセンターとか他の取り組みの視察に行った時に、やってらっしゃる集落支援員の方がいて、これはいいなと思って、絶対やりたいと思ってやり始めました。それをどうやって配ろうかという話のときに、そもそも自治会通信というのを作っている自治会長と「たのしいな」の運営委員長が、実は同じで、そこが最初の部分はすごく良かったです。自治会通信を回覧する時にこれも一緒に回覧してください、とお願いをして、26班ぐらいに分かれているんですけど、その班で回覧し始めました。次の運営委員会の時にある方が、この通信すごい良いんやけど、何かその回覧やと回って行って、自分のとこに留めて情報を置いておくことができないから、全

戸に配れんかねみたいなことを言ってくださったんですよ。「よし」とか思って、室戸市の広報と一緒にその次の月番さんが配布をする形に変えて全戸にお配りできるようになりました。活動に関しても集落のいろんな行事、他の行事、「たのしいな」を使っていないような行事であるとか、出来事についても拾っていくようにしたり、水族館長には、何かこう住民にお伝えしたいようなことがあれば書いてみませんか？という形でコラムをお願いしたり、組合長からもこれから魚をブランディングしたり、椎名大敷が残っていく上で、大敷のことを知らない家族の方とかもいっぱいいらっしゃるような状況になってきていたので、その紹介も兼ねてやってみませんか？って話をしたりってするので、どんどん広げて、みんなに使ってもらえるような通信に仕上げていきました。これがあのおかげで、割と信用度とか私に対する認知度も上がりまして、最初こそ、自治会の通信の方にこういう人が着任したからこれからよろしくお願ひします、みたいな文章書いていただいたり、自治会の総会とかでもごあいさつさせていただいたりしたんですけど。今では初めて会うような集落の方でも、通信書いている川島さんねみたいな形で、覚えてもらっていたり、書いている内容も読んでいただいたりしている状況です。

関司／はい、ありがとうございます。地域との関係、行政との関係ですね。様々これもありますけども田口先生どうですか。

田口／いや皆さん強いなと正直思っていますね、やっぱり我々も人間ですから当然人によって違う。これは行政の皆さんも、人が変われば、少し雰囲気が変わるんで、どうしても一喜一憂してしまうんですけども。川島さんがしたたかに対応されているっていうのが、なかなかのすごい良い話だなと思うことと、その通信ですよ。これも結構僕、いろんな地域おこし協力隊員の皆さんには、絶対通信出したほうがいいって言うんですが、通信出すっていうのはすごく簡単なようで、継続するのはものすごく大変なことだと思います。それが、A4判で6ページって、もうどうということよ、って話です。これは地域の皆さんにとってはすごく大きな情報伝達手段であり、自分たちのやっていること、あるいは地域が、記事として蓄積されていることは、誇りづくりにすごい効いてくる気がするんですよ。そういうことをきちんと底上げという意味でいらっしゃるのは、すごく大きいですし、やっぱりこれ、なんでも行政だから安定運営ってあるんですけども、とはいえ、結構人事異動で起こっているのが現実で、それに対して、支援者や中間にいる皆さんがどう対応するかというスキルも、集落支援員の皆さん磨いていかななくちゃいけない。もっと言うと、行政の皆さんにも、自分たちは結構波があるんだって

いうことを自覚していただいて、その波の変化率を小さくするようなことはぜひ意識しながら、現場の皆さんと対応していただけると。おそらく、みんながみんな川島さんみたいに対応上手じゃありませんので。そういうところを考えていただけるとありがたいと思います。

関司／はい。ありがとうございます。大分良い時間になってきましたが、もうワンサイクルやらせていただければと思います。それぞれの地域で支援員の仕組みが回ってきていますけれども、協力隊との違いで言うと、協力隊は制度として最大3年の任期を終えて、移住定住に持っていくかが一つの流れになります。

集落支援員に関しては、ある意味1年更新で再任OKなので、言ってしまうと、エンドレスにもなりうるようなところがあると思うんですが、ゴールを設定すべきものかどうか、導入の仕方によっても当然変わってくると思います。何もないと、ただだらしかねない悩ましさというか、危うさもちょっとあるなと私なりにには気にしています。それぞれ皆さんご活動されていて、この先、地域の様子も、さっきの「たのしいな」の話でも頑張っているお母ちゃんたちとか、お父ちゃんたちも、どうしても数が減ってくる、ちょっと切実な話もありました。

こういう集落対策であったり、支援員の仕組みを、今後どの辺を見据えて展開されていくか。小島さんのところは自治協としての活動に置き換えていただいてもよろしいかと思ひますけど。今後のところで、悩みもあるかと思ひますので、その辺もこの場で共有しながら、この議論引き継いでいくっていう形になるかなと思ひます。小玉部長、いかがでしょう。

小玉／卒業はいつでしょうかというふうなお話でしょうか。

関司／卒業しないっていうのも。ある意味エンドレスだと思うので。



パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

小玉／エンドレスですね。その人のやる気が続く限り、意欲が続く限りは、ずっと続いていくのかなと思います。うちの場合はですね、今一番長い人でもまだ6年です。他の方はまだそこまで達していない方なんですけども。年齢的にもう限界がきて辞められる方、年配の方はそうですし、若い方についてはその意欲がある限りはずっと続けていくことができるかなと思っております。会計年度任用職員という立場ではあるんですけども、ずっと続けていく中で、また別の方策が出てくる可能性もあります。別の採用方法でもって、役所の違う部署にというような話にもなってくるかなと思います。役割としては、その集落が一つ落としかるまで行けば、集落は、うちは先ほど言いましたように150、実態的には200以上の集落がありますから、次々と担っていただきたいところがあります。

図司／支援員さんもある意味、いい関係で達成感というか、ここまでやったというのが見えて、もうちょっと次頑張ろうとかいうケースになると思うんですけども。今のところ、年配でもう体力的に厳しいって話は置いていても、比較的若い皆さんそういう意味では前向きなモチベーションでやっていたら、出来る限り、続けて欲しいという感じでしょうかね。

小玉／はい。その人その人のミッションも地域ごとに異なるんですけども、集落支援員さん同士が集まれる場っていうのをすごく大事にしています。そこに地域おこし協力隊員も交える場面もあるんですけども、できるだけ雰囲気を見ながらその場では行政職員は逃げるようにしているんですね。そこで自由闊達な意見、行政の悪口、行政への不満、そういったものを自由に出していただいて、溜まっているストレスをバンと吐き出す場をうまくやれば、継続していけるのかなと、新しいものがその人たちの中でも見えてくるのかなと思っています。

図司／あと支援員さんが入られる地域の側のこともあると思うんですけども、どうでしょうかね。先ほどのプランづくりみたいなところで区切りにして、とりあえず支援員さんが次の地域に移ったりされるのか、ある意味関わっているところは、それなりにずっと伴走支援するのか、これも多分いろんなケースあると思うんですけども、地域側の方から見た時はどうでしょう。

小玉／基本的に伴走になってくると思います。関係性が自立できてくるかなと。うまくこれに進んでいけるかな、ということになれば、少し引いたところから見てればいいんですけども。手を引いてもいいよと言ってあげたいんですけども、

やっぱり強い繋がりが出来ちゃっているんで、気になって、やはりずっと関わっておられますね。最初に関わったところ、それから次に関わったところも、三つ目、四つ目の集落に行っても、やっぱり過去の関わったところの集落、イベントであるとかに呼ばれて、また気になってという形で関わりを上手く残されています。

図司／今の話だとメインの集落、担当集落は変わるけれども、縁ができたところは、続けてらっしゃると、そんな感じですかね。

小玉／と思っていますね。そうなると思います。必然的に。

図司／なるほど、わかりました。ありがとうございます。小島さんいかがでしょうか。

小島／私は地域自治協議会の事務局をしていますが、その構成組織である12の自治会のうちの区役員もしています。自治会というのは伝統行事を通して、いろんな繋がりが生まれますが、ここ3年はコロナ禍で事業が止まっていますし、伝統行事なんか中止したりしていますが、何もせずとも時間は過ぎていきます。令和5年の秋祭りで、コロナも明けてきたので、奉納相撲をどうするかとのことで、子供が少なくなったからもうやめようかみたいな話が出てきたんです。我が家は2歳と4歳の孫がいるんですが、相撲ができなくても泣き相撲でもええやんかということで、何年かぶりにやったんです。やればやったで、子供が少なくても結構面白いんですね。どうするかという時に、もうやめようってなるか、いやいや、やろうという話になるのか。その時の瞬間の判断が非常に大事やなって思います。このコロナ禍の後の第一歩というのは非常に、私は大事なかなと思います。ゲストハウスもなんとかやっている、それに伴う雇用が発生したり、次の展開がちよこちょこっと見えてくることあるんです。ゲストハウスをやったことによって、神戸のデザイン会社が、サテライトオフィスを整備してくれるようになったり、その隣にある空き家で、バイオリンの製作工房を作ろうとしてくれています。レハンに始まったゲストハウスの動きが、これらに繋がっていていますので、何らかの動きを続けていきたいというのが、今の現状です。

図司／なるほど、ありがとうございます。前向きな動きをうまく作りながら、これまでの伝統みたいなところも、どうやって続けていくのか、多分そこは必ずしも別々じゃないよというお話でしょうかね。ありがとうございます。川島さんいかがでしょうか。

川島／集落支援員は1年更新ということで、毎年、今年も雇っていただけたな、ぐらいな気持ちもあったりするんですね。集落の方からも、あんたこの仕事は何か任期があるんかとか、ずっとおれるんかとか、おれるんやったら、ずっとおつてよ、みたいな話はいただいたりもするんですけど。何か自分の中でも危機感というか緊張感みたいなものは持って仕事をするのは大事なのかなとは思っています。もし自分が辞めなければならない状況とか、辞めたくなくなったりしたときにどうするかということも、たまに考えるんですけど、もし、集落支援員というシステムを市がやめるってなった時にもうしょうがない。ただ、「たのしいな」として何か活動が残っていく状況になった時に、それでも関わっていける場として、しいな遊海くらぶを作ったという一面もあります。私がただの椎名の地区の住民として、そこで活動ができるような場を作っておこうみたいな、自分の中のセーフティネットのつもりで作りました。別に行政と関係が悪いとかじゃないんですけど、全部信用はしてはならないなと正直思っていて。課長が変わったときに、他の場所で急にいろんなことが変わってしまった事例とか、地域おこし協力隊員の子が、行政の方とのやりとりで悩んでいるのとかもたくさん見てきて、自分なりの防衛策でしょうか。そもそも夫が漁師になるというので、この地に来たので、実際魚が取れなくなったり、大敷自体がつぶれてしまうということが起きるかもしれないというのは考えたりはしております。

図司／ありがとうございます。様々な目線で、今後を見据えてのお話をいただきましたが、先ほど控え室のところでも、高齢化なり、人口が減ってくると、やっぱり福祉的な要素が求められる集落支援員の役割について、先ほど出てきましたけれど、田口先生どうですかね。今の皆さんの話とか、福祉的な話、活用みたいなところも含めて。

田口／これから集落は縮退していくし、少子高齢化が進んでいくことを考えると、やっぱり福祉的要素は当然強くなってくと同時に、先ほど川島さんおっしゃったように、政策なんですよね、政変が起こると課がなくなる可能性がある。特に市町村の場合は、政権交代が割と起こりますので、そのときにどうなるか。特にその地域の目玉施策とかになっていけばなっているほど、政権交代の影響を受けやすいところがあって、そこはすごい危機感を僕は持っています。国の中での制度が大幅に突然変わるってことはそうないにせよ、地域では結構ありますよね。選挙の時に集落支援員どうよという話になってですね、対抗馬が勝って集落支援員が止められちゃうみたいな事例が実際、起こっています。1番迷惑を受けるのは地域なので、その中で気にしなきゃいけないことは、集落

支援員の皆さんが活動する中で、いなくなってもこれが残ればいいのか、地域側の主体的な動きみたいなものを、どう創り出しながら活動していくかということころは、結構大事だなと思うのがまず一つですね。もう一つは集落支援員を継続するかといった時に、キャラクターがすごくある気がするんです。例えば、最初の地域おこしが得意なタイプの若くて元気がいい子が、コロナで止まったものを再開するときって、どっちかっていうと実直性なんかよりも、やっちゃおうぜ!みたいな機運づくりが効いてきたりするんですね。そういうキャラクターの人と、いやいやこれはちょっと実直、慎重に進めなきゃいけないマネージャー型っぽい人と、多分キャラクターが違って。行政として、この地域はどういう状況にあるから、どういうキャラクターの人たちが向いているかどうかという判断が必要です。

～スライド表示～

これちょっと前に僕作った、ものすごい情報量が多すぎて皆さんから怒られる図なんですけれども、地域おこしのフェーズと、そこにどういうキャラクターが、どういう施策がっているか。今日のテーマである集落支援員以外にも、地域おこし協力隊もあるし、関係人口もあるし、それ以外の例えば近くの大学生との都市農村交流或いは地域おこし協力隊のプロジェクトマネージャーもある。こういったことはどのフェーズにフィットするかという辺りをちゃんと整理しながら、やらないといけないなと思って、こんな図を作っているんです。一番下に行政の役割は結構大変ですよ、というのを書いています。行政的に協力隊や集落支援員を入れると、ちょっと仕事が楽になると思っちゃう方がいらっしゃるんですけど、いやいや実はもっと大変ですよ、もっと言うと、今の状況で複雑化しているの、むしろ職員力量が問われているというところを表現しています。この図は最近出した『少人数で生き抜く地域をつくる』って本の中に載せていますので、興味あったら、そこをご覧いただければいいかなと思います。フェーズとかキャラクターとかと地域づくりっていうものをちゃんとリンクさせて、こういった人的支援を打っていただけるとありがたいという意味で最後にこういう図を出させていただきました。

図司／ありがとうございます。この話は我々も今ちょうど議論途中のところもあるので、これからバージョンアップはされていくと思います。今日のお話でも、支援員なり集落対策のそれぞれの局面でどう展開していくのか、いろんな形で皆様からお話いただいたかなと思います。では、質疑の時間が取れそうなので、御覧の皆様から、ど

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

なたかにお伺いしたい、或いはこのテーマでもう一度議論し
て欲しい、みたいなところがあれば、いかがでしょうか。

参加者／先程、地域に主体性をどう作っていくかという話が
最後にあったかと思います。特に過疎集落の中での地域づく
りで、“行政”が一つ大きなきっかけになると思うんです
けど、行政主導というか、行政に言わされている感を持つて
いる住民も出てきてしまうのかなと思うんですけど。どうや
って地域住民を巻き込んで主体性を持たせているか、聞きた
いです。

図司／ある意味、根っこの話ですね。冒頭の田口先生から
の投げかけのところになりますが、どうでしょうか皆様。最
後、田口先生にもう1回戻しますけど。小玉部長いかがで
しょう。行政の立場から、それぞれのお立場から見える世
界が当然あるかと思いますが。

小玉／集落においても、集落の規模の違いもあります。そ
れから先ほどいろんな事例を報告しましたが、担い手がいる
ところもあれば、担い手がおらず福祉的な施策の必要性が
高いところもあります。いずれにしても、その地域の実情
は何か把握する必要があります。その把握するのは行政
であって、行政が把握する方法というのは行政なりの戸別
訪問であったり、会合であったりします。そういった中で、
その地域が今必要とするものは何かを把握することだと思
います。

これは言う・言わせるというよりも、必然的に職員とその集
落の方達が関わりを持つ中で組み上がっていく、掴んでい
けるものだと思います。そこでの不便さ、そういう思いに
関してどんなことをチャレンジしていこうか、どういう取り
組みをしていこうかということで、行政と集落との協働、
二つの協働の間に、集落支援員をはせて、三つの共同
体で集落支援を進めていくという考えです。この共同
体での集落支援が進行する中で、それ以外にも関係する
方たちが増えてくると思います。いろんな協働の主体が、
地域づくりや集落づくりに関わってこられると思いま
す。このような形での集落支援、地域づくりを進めてい
くのがいいのかなと思っております。

図司／その流れで小島さん、いかがでしょう。OBの立場
でもありますが、両面見える世界かもしれない。

小島／市役所職員OBとして、自治協という中間組織
的なところに行っているんですけど、そこから市役所を見
ますと、どうしても市役所というのは、二元代表制です
から、職員はいろんなところに顔を向けなければいけ
ません。自治協にいる

立場からすると、どっち向いて仕事しとんやろな、と
思うこともあるわけですね。職員は大変やなと。です
ので、地域のことは我々がするわ、ということも思
います。自治協がやる方が、早く意思決定ができる
ということもあるわけで、田口先生が言われる自
立した組織になって、逆に自治協が市役所の仕事
をもらいますという感じになればなと思います。その
ためにも、事務局の機能がやはり大事で、そこに
集落支援員のような立場が位置付けられて、有効
に活かしていくことが、今後の地域を維持する上
での方向性かなというふうに、朝来市の場合は思
います。

図司／ありがとうございます。川島さんいかがですか。

川島／「たのしいな」の場合は、集落活動センターのシ
ステムを使って盛り上げていこうというのではなく、ど
ちらかという県とか市の提案があって、市として集
落で話し合いをして、じゃあやろうという形になっ
たんですね。提案されて始めた部分があるんですけど、
それが私の中でもすごく葛藤であり悩みであり、ず
っと引きずっているところですね。住民との関わり
の中で、受け身になっちゃっている部分があると思
います。どうやって主体性を持たせるかが本当に悩
みのところなんですけど。だから、やりたい人しか
来ないでくださいというスタンスではあります。

一番わかりやすいのは子供なんです。子供達は
やりたいことをやり出すと、本当に主体性を発
揮して、どんどんこっちの予想を超えていくん
ですね。そういうのを実際に体感して、それを
住民に見せる意味も込めて、たのしいなこども
クラブをやっています。子供が自分の気持ちに
素直にやりたいと思ってやっている姿を見せたら、
大人たちは恥ずかしくないですかという気持ちも
込めてやっています。

しいな遊海クラブでも、講師のおちゃんたちが
人に物を教えたり、観光客の人に案内をして、め
ちゃくちゃ面白いんですね。そんな文化が残っ
ているのすごいね、そういうふうにしてもらえ
ることで地域の誇りを取り戻します。もともと
誇りも愛着もあるんですけど、みんながどん
どん外に出て人が減っていくと、昔にぎわ
いがなくなって自信も全然なくなっ
てしまっています。幾らこっちが、中の人
としてこれすごいんです、絶対売れま
すよ、これは面白いんですよと言っ
ても、なかなか納得してくれないん
ですけど。外から来る人に言っ
ていただけることで、自信を取り戻
して、自分からいろいろ提案をし
てくれるようになるんですね。そ
こをどう活かすか、そのつづきと
か声をどれだけ私は拾って育てる
かというのが大事ななと思っています。

図司／ありがとうございます。では田口先生。

田口／僕はやっぱり主体性を作る最大の要因は、楽しさだと思っています。楽しいことはさっきの子供の話じゃないですけど、やるんですね。これは、行政のものの持って行き方にもよるんですけど。例えば、ここのペットボトルに水を容れたいと思ったときに、時々ね、こっちの方向に向けたいっていうと、いろんな水をかき集めて漏斗でこん中に集めようとする、ここに集約しなさい、行政がやりがち。こうするとやらされ感がどうしても出て。行政の皆さんには、でっかいお盆を用意していただいて、お盆からこぼれなさい、その中は自由にやったらいいですよ、ぐらいい感じにしておかないと、やっぱり面白くないんですね。卒論に取り組んでいる大学4年生だって、早く卒論書けみたいな先生のプレッシャーがあると、進まないんですよ。それが、ある時に研究の楽しさに気づくと、勝手にやり始める。これは人間の性で、だから趣味は続くけど、仕事は続かないっていう感覚がある。いかに地域の皆さんの楽しさを尊重できるか。地域から上がった声をどうするかというときも、デザインしすぎないことが結構大事です。徳島のうまくいった協力隊員から言われたんですけど、完璧に仕上げるんじゃなくて、隙間をいっぱい作って、いろんな人たちの居場所と出番がきちんと用意することができれば、どんどん主体性が出てくる。ただそれを全部コントロールすればするほど、主体性が出てこない。そのバランス感覚みたいなのは、僕は楽しさにあると思っているので、その楽しさをつくれる器、お盆をどう用意できるかが、すごく大きなポイントなんじゃないかなと思っています。だからこうあるべし、って形を持ってそれを目指しちゃいけない、ケラケラ笑いながら、あとで結果としてこれって地域づくりだよねと言えればいいんですよ。その地域づくりの視点から評価すればいいわけであって、地域づくりドストライクにやりなさいというのは小難しいだけの話ですから、なかなか主体性は育たないかなと思っている。ぜひ楽しさというのを大事なキーワードにさせていただけるとありがたいなと思います。

図司／はい、ありがとうございます。そういうきっかけをどこに作っていくのかということですよ。だから、先ほどの川島さんの「たのしいな」の話も確かに、県なり、行政の方からは振りかけられたけれども、やっぱりそこにどう楽しさを生み出していくのか。それはある意味、順番はいろいろありうるところだと思うので、本質はどこなのか、というところを皆さんから語っていただいたんじゃないかなと思います。ありがとうございます。良いテーマを投げかけていただきありがとうございました。

参加者／こちらこそ、ありがとうございます。

図司／はい。もう1人行けるかな。

参加者／最後の方で話に出たんですけど、どうしても今後の集落の行く末ということになると、福祉的なところが今からすごい重要になってくるなって思っています。我々県の立場からすると、住民の方々に、例えば高齢者の移手段であるとか、買い物など、将来を考えて欲しいなと勝手に思っていますが、なかなかそっちの方に目がいかない。そこにちょっと目を向けてもらうにはどうすればいいか、もしご意見等あれば、教えていただけないかなと思いました。

図司／ありがとうございます。暮らしの課題に対して、ある意味、集落対策だったりとか地域運営組織みたいなものがどう向き合っていくのかってところでしょうか。これもいろいろ皆さんお考えなり現場の様子はあるかと思うので、小玉部長からこれもいいですか。

小玉／行政の方なので、地域の実情をよくわかったご質問などと思います。福祉的な視点は大事だと思いますが、この集落支援員制度に関しましては、あまり福祉的な視点を取り込みすぎると、社会保障部局の地域包括制度であったりとか、福祉委員制度だったり類似の制度とバッティングする可能性があるかなと思います。ただ、集落支援員さんの活動は、個別訪問型の集落点検をしていますので、その中から個別相談的なものは幾つも上がってきます。それは社会保障部局に届けていくってことで、連携は取れているかなと思います。

私のところの実例でいきますと、集落点検は本当に隔々におられる方たちの声を拾い上げることができます。生活インフラの問題、特に買い物の問題であったり、移動支援であったり、医療であったり、あとは地域の清掃作業であったり、そういった活動ができないという声も幾つも上がってきます。そういった声を集約し、行政側が集約することで、制度化出来ているものもあります。買い物支援に関して困っている集落が多々あるとなったときに、移動支援としてそこまで行くタクシー券を配布するのは、福祉部局の制度です。地域づくりの視点からすると、そこに商店を持っていくことは無理だとしても、移動販売という形で実現することはできると思います。

岩国市の場合ですと、移動販売に関する助成制度を設けています。ガソリン代燃料費の支援、それから車両の改造費の支援があります。こういった中で、生活インフラを近づけていくというのは地域づくりの観点で進めていくべきものかなと思います。

あとは、自治会活動とも密接に協調していますので、集落活

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

動に関しましては奉仕作業であったり、地域行事であったり、そういったものを支援する仕組みとして、お助け隊、ボランティア活動といったものを制度化していく、財源手当していくことが考えられるかなと思っております。

図司／ありがとうございます。小島さん、いかがでしょう。

小島／自治協は五つの部会があるんですが、ふくし部会が、役員の成り手がいないということで課題になっていますが、いくの自治協は現在42%の高齢化率の地域です。いきいき部会で、ウォーキングトレインをやっていますが、ウォーキングトレインに参加してる人ってほぼ65歳以上なんです。特にふくし部会の活動としなくても、自治協で取り組む事業は、すべて福祉施策やというふうに統合的に考えていく方が、よりいいんじゃないかなと思うんです。福祉、福祉って考えると、社協が取り組む事業も既にありますし、何をしたらいいのかと、詰まってしまうのではと思うんです。なかなか成り手がいないということよりも、今やっている部分はすべて福祉施策ですよ、というふうに認識したほうがより効率的ですし、あえて、ふくし部会の活動ということ、声高らかに言わなくても良いのではないかと、最近思っているところです。

図司／ありがとうございます。ウェルビーイングの話にも繋がりますかね。川島さん、お願いします。

川島／着任当時、ごみ出しを大変苦労されている、ちょっと足の悪いおばあちゃんを見て、何かやらなきゃいけないかなとか、ここの部分をどうにかしたいな、という福祉的な課題はたくさん見えたんですけど、全部自分ができるわけじゃないなというのを感じました。げんきクラブに来てくれているおばあちゃんに、ちょっと認知症の気が出てきたら、社会福祉協議会に連絡してみたりとか、そのメンバーさんで見守るようにしたりとか、ちょっとした手助けとか気づいたことをどこか関係のところにつなげていくようなことはしているんですけど、全部を背負うっていうのはやっぱり、やめました。ただ、ごみ出しについては今後すごい課題になってくるかなというのを感じています。高齢者のごみ出しが大変で、ごみ屋敷になるケースであるとか、そういう新聞記事を拝見しましたが、それを行政で考えていくのか、福祉の方で考えるのか、集落活動センターがあるからそこで考えるのか、話をしながら進めていきたいです。手助けしたいという人もいたりするので、連携をとりながら、何かできる方法を模索したいなと考えています。

図司／ありがとうございます。田口先生どうぞ。

田口／時間もないので手短かに言いますが、一つは集落点検で、集落点検の弱点は現在の状況の点検なんです。地域の皆さんは現在のことはもうわかっているんで、なかなか行動に結びつかない。私は、実は10年後の姿を地域の皆さんと描こうとしています。そうすると、今年2023年ですけど、ちょうど団塊の世代の皆さんが後期高齢者に移り変わっているタイミングで、これまでの10年とこれからの10年って相当状況変化が起こると思っています。だから本来ならもう5年ぐらい前にやりたかったんです。戸別訪問型の集落点検だと、なかなかその将来予測はしにくいんですが、単純に地図に、現在と10年後の戦力図を地図にシールで貼っていくんです。どの家に何歳の人がいるといったように。これで、現在と10年後の地域の様相の変化を、こっちが示すんじゃないかと、住民の皆さんが貼りながら気づいちゃう。こうすると、今やらないとやばいになっていくことに地域の皆さんが気づけるかなと僕は思っています。僕それを「心を折らない程度の危機喚起」と呼んでいますけれども、そういう仕掛けをやっていかないと、皆さんで考えるきっかけがないんですよ。だからこれは、農水省の地域計画を作るということの一つの言いがかりにして、全地区でとりあえず10年後の姿を描いてみようよと言うと、あっと気づくところがかかり出るんじゃないでしょうか。で、ただ逆に、もうちょっと駄目かも思っちゃう地域がひょっとしたら出てくるかもしれない。そこのフォローは前提としながらも、ちょっと未来の姿をどうリアリティを持って描けるかということが、ハッと思わせる時のきっかけとしては有効かなと思って、今そういったことをあちこち取り組んでいる状況です。

図司／はい。よろしいですか。

参加者／ありがとうございました。

図司／はい、ありがとうございました。ちょうどいい時間になりました。

最後になりますが、集落対策、或いは集落支援員の仕組みに関して、今日はいろんな角度から話が展開しましたので、まとめは難しいかと思いますが、ただ先ほど小玉部長も言われましたけれども、出発点は地域の皆さんと向き合って話なり、様子をちゃんと見つめ直すというところかなという気がします。昨年度の集落支援に関する過疎連盟の報告書に、私からも、集落対策を諦めないというフレーズを入れました。集落点検も1回やってそれでおしまいみたいな雰囲気になってしまうところあります。先ほども控室で話していましたが、定年退職をする予定だった皆さんが定年延長で地域に戻ってきてないということが、就農の問題であったりとか、

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

集落の自治協みたいなどころの担い手問題に、これからはね返ってくるんだと思うんですね。そういうことも含めながら、あとは全体的な高齢、団塊世代のリタイア、引退という話も出てきますので、かなり様変わりする局面に入ってくるんだらうと思います。

それを見据えたときにやはり先程、田口先生言っていたきましたけれども、地域の皆さんの中での不安のあぶり出したいな作業をどういうふう丁寧にやるのか。その入口はやはり行政の皆さんと地域の皆さんの向き合い方みたいなどころからでしょうし、あとは田口先生にも今日お話いただきましたが、集落とか地域の人達だけで頑張っってねというような時代でもなくなってきているということもありますし、昨日からの議論もそうですが、移住者の方と或いは関係人口で関わる人たちの存在というのも過疎地域にとっては大分こう見えてきたところもあるかなと思います。

そういう意味で、集落対策のあり方というところを、今一度現場の方で見つめ直していただき、また私とか田口先生はそういうところにお手伝いにまた馳せ参じたりもしますし、今日皆さんとディスカッションする中で、いろんなものが見えてきたと思います。それぞれの地域に合わせたところでお持ち帰りいただきつつ、また議論を深めていただければ、この分科会として開催した意義があったかなと思っております。

それでは、これで第3分科会を閉めさせていただきます。改めて、皆さん方に拍手をもってお礼に代えたいと思います。どうもありがとうございました。



過去開催地

第1回(昭和63年)	鹿児島県	21世紀を拓く地域おこし ～過疎地域の再生と活性化のために～
第2回(平成2年)	秋田県	明日を築く地域おこし ～過疎からの脱却をめざして～
第3回(平成3年)	兵庫県	今、過疎新時代 ～その大いなるポテンシャル～
第4回(平成4年)	島根県	過疎 ～新しい思想を求めて～
第5回(平成5年)	岩手県	明日の過疎地域を拓く ～イーハトーブからの提言～
第6回(平成6年)	高知県	新・いなか創造 ～自立と挑戦～
第7回(平成7年)	新潟県	近き者よるこび、遠き者来るまちづくり
第8回(平成8年)	広島県	豊かさ実感 ～魅力と誇りの創造～
第9回(平成9年)	北海道	未来へつなぐ地域づくり ～新たな国土のフロンティアとして～
第10回(平成10年)	岡山県	21世紀に挑戦する過疎地域 ～新しいライフスタイルに対応した地域の活性化～
第11回(平成11年)	福島県	新たな時代の過疎対策 ～21世紀の真に豊かな国民生活実現のために～
第12回(平成12年)	岐阜県	自立と美しく風格ある地域づくり ～豊かな自然・文化・生活の創造～
第13回(平成13年)	大分県	自立への新たな視点 ～地域資源を活用し、自立した地域を創るヒント～
第14回(平成14年)	山形県	地域づくりへの新たな挑戦 ～過疎地域の自立と「公益」的役割～
第15回(平成15年)	宮崎県	小さな地域からの変革 ～住民参加による地域の新たな価値の創造と発信～
第16回(平成16年)	和歌山県	新たなふるさとづくりを目指して
第17回(平成17年)	徳島県	変革の時代における地域づくり
第18回(平成18年)	宮城県	地域の共生、新たなステージへ ～交流居住の時代～
第19回(平成19年)	福岡県	ふるさとの価値を見つめ直す ～自立と連携・交流による地域づくりの展開～
第20回(平成20年)	石川県	次代に引き継ぐ愛着と誇りの持てる地域づくり ～都市と過疎地域の互惠・共生～
第21回(平成21年)	長野県	時代に対応した新たな過疎対策 ～日本の原風景 文化、文明を育んだ過疎対策をどう守る～
第22回(平成22年)	東京都	過疎 新時代 ～都市と過疎地域の新たなパートナーシップの構築～
第23回(平成23年)	愛媛県	過疎地域の底力 ～地域再生への新たな決意～
第24回(平成24年)	愛知県	過疎地域でともに歩む ～外からのサポートと内なる価値～
第25回(平成25年)	長崎県	過疎・離島・半島っていいね! ～本物の価値、コミュニティの知恵、そして誇り～
第26回(平成26年)	三重県	過疎地域の未来に向けたイノベーション ～つながり、持ち寄り、支え合う「ふるさと」～
第27回(平成27年)	香川県	過疎・離島で輝く ～地域の資源を磨き、交流を生み出す～
第28回(平成28年)	奈良県	訪れたい、住みたい、住み続けたい地域 ～過疎地域で幸せな暮らしに出逢う～
第29回(平成29年)	佐賀県	人が輝く地域づくり ～自発と誇りが地域を変える～
第30回(平成30年)	山口県	田園回帰 ～地方に若者を呼び込む～
第31回(令和元年)	青森県	地域の食・文化・人を育む「農山漁村」を守る ～経済を回して維持・発展する仕組みづくり～
第32回(令和3年)	高知県	過疎地域の持続的な発展をめざして ～高齢者の暮らしを守り、若者が誇りと希望を持てる地域づくり～
第33回(令和4年)	熊本県	過疎新時代 新しい時代の流れを力にする ～創造的復興の現場からメッセージ～

全国過疎問題シンポジウム実行委員会事務局

〒930-8501 富山県富山市新総曲輪1番7号

富山県地方創生局ワンチームとやま推進室 中山間地域対策課内

TEL:076-444-9607 / FAX:076-444-4561 / E-MAIL:achusankan@pref.toyama.lg.jp